

被爆体験、証言、記録の部

私の被爆体験記

深堀 勝 一

昭和二十年八月六日の夕刻でした。私が動員学徒として出動していた三菱兵器製作所大橋工場から帰って来たところ（そのときは坂本町四十七番地の自宅がB24・B25の八月一日の爆撃で半壊したため、母の実家である本原町一丁目二十番地居住）弟の博がかけよって来た。あんなに広島に新型爆弾が投下されて若干の被害がでたらジオが言っていたばい、と息せきこんで言ってきた。

私は、そのとき、あいたしまったこれは原子爆弾だなあと直感したのでした。

当時三菱兵器製作所には、海軍の技術将校がいてときおり、原子爆弾の理論や、現在時点において原子爆弾製造の進捗状況ではアメリカが一番進んでいることなどを聞いていた。

なんでも原子爆弾の威力は、マッチ箱程のもので戦艦を吹きとばすとか、また富士山の形もかわる程の力があ

るとか、かなりまちまちのものでした。

私はどうしたらよいだろうか、これはあきらかに原子爆弾だけど、とにかくどのようなしたら家族を安全なところにおくことができるだろうかと思案したのでした。

「そのとき母トモ、姉光枝、弟博の四人ぐらし」

姉が松山鉄工所に勤めていて、同僚に長与町の人がいたので、四畳半を借りるようにしていた。

八月二日の日は、とりあえず坂本町から本原町に疎開して来たので、これから又長与町の方に行くのも大変だなあと思いながらも、原子爆弾の空おそろしい話を聞いていたので恐怖におののいていたのでした。

まあ広島市の被害状況がそのうち伝わって来るだろうし、どれくらい威力のあるかも、しかし、当時の情報は統制されていて、被害を過少に、国民に伝えていたのであまりあてにならないと、うすうす気づいていた。

当時の軍関係の報道というのは、軽微に伝えていたのです、というのは、八月一日の長崎大空襲による被害も軽微であると発表していた。

あの時も物凄い爆撃だったのです、だから広島少数

機によって相当な損害が出たということは、物凄く被害があったということを私達は知っていた訳です。そういうことで私も家族を長与に疎開するかどうかをためらっていた、しかし、次はおそらくどこかの都市に落ちるだろう、その次に疎開することを決めたらいいということで一駒おいたのでした。これが私の一生の悔いになったのです。まあ、千慮の一失ということであったのですが、まさか、次には長崎に持つて来るとは思っていなかったのです。爆弾が落ちた時には、これは原子爆弾だと直感したのです。

私はそこで八月六日の晩、原爆のこと等いろんな事を考えておいたら、八時半頃になると急に寒気が来て、丹前を着て寝たことがあった訳です。

八月六日といえば長崎地方は物凄く熱くて夜も寝られない程でした。

急に背中がゾクゾクし、震いがき、丹前を着て一時間程かかってその震いを止めたことがあった訳です。

奇妙な事に私は、その後病気をしても今だに急に寒気が来て震いだすという持病を私は持っていますけれど全

く同じ病気を今日四十年後でも、持病として持っている訳です。これはどういう関係か私には解明出来ないのですけれど、これは奇妙に合致する訳です。その時の恐怖感、あの時の寒気、今だにも続いておるのです。

何か一寸ちよつとひよんな事があると震いだす自分の持病となっておる訳です。八月九日のときは朝起きて七時頃動員で出勤する時に、お袋に対して、今日もひどかけん外には出るな”と言いかせて裏木戸から出かけた。お袋も承諾して外に出ないようにしていたようですが、原爆落下後三ヶ月位たつてから、お袋がどこで死んだか判らなかつたのですが家族のうちで生き残っていた私の伯母で、前川マキから聴いてみたら、十時頃友達が野菜屋の組合から出てこいといわれて迎えにきたため、どこで死んだか判らなかつたという事情でした。

私は、あの日は七時半頃三菱兵器に出動、それから空襲警報になって山の方の防空壕にいつて、たしか十時半頃空襲警報解除で工場に帰つて来た訳です。

そして、仕事をする段階で、やつと始めてひと働きし、つかれたので一寸ちよつと振返つてみると商業の同級生の若杉政

雄、木下政隆が二十米先で一生涯命やすりをかけていたのを目撃したのですが、それからまもなく、ぴかっと光った。私は危険を感じ、何かものにかくれようとしたのですがかくれる所がなかったのです。おそらく時間にしたら、0秒3か0秒45位の時間の間があつて、ドンときて、それから何が何んだか判らなくなつたのです。気が付いてみるとあめのごとく工場が壊れておつたのです。

暫くの間は真暗やみで十分か十五分位は真暗かつたと思います。そして次第にしらみがかつて、自分の身体をみれば身体中血がふき出してたのです。

それから私は三步いっては倒れ、五歩いっては倒れ、西町の土橋をこえて、西町の奥の方の防空壕にたどりついた訳です。

西町の防空壕には既に二十名程度の負傷者がうめき声をたてていたようでした。

時間的にみると十一時四十分頃から三時半頃までこの防空壕にいたと思つてゐる。

一時頃になると長崎師範の学生二名が防空壕を訪ねて来て負傷者の応急処置をしていたのである。私の

右手から出血がひどかつたので自分がしめてゐるゲートルを破つて止血をして貰つたのである。私がお名前はと尋ねてみたが答えは返つて来ず、又次の防空壕へと去つていつた。この師範の生徒が返つてから間もなくしてから、急に寒気が来てそこいらに脱ぎ捨てられた服を着せて貰つたことを覚えてゐる。それが核の冬によるものであるか出血多量によるものか未だに判らないのであるが、私は目がさめるたびにこのようなひどい状態は夢でないかとわが身をつねつてみたのでしたが夢ではなかつた。やっぱりこれは現実だと認識した。

午後の二時過ぎ頃と思うが、グラマンF6が二機稲佐山の中腹を低空で偵察に飛んで来た。操従士の頭が見える程だったので高度一五〇米か二〇〇米の低空であつたろうと思う。私は「今蓄生」と思ひながらも眺めていた。それから聞もなくして救援列車がトンネル工場前附近を出たという知らせがきた、そこで私はこの防空壕に長くいると出血多量で死んでしまふと思ひ、立ち上ろうとしたがもう立ち上ることが出来なかつた。おかしいが、さきほどまでは三菱兵器製作所から四〇〇米程もあるこの

防空壕まで歩いて来たのにと思ったがどうにもならなかった。ところが、その防空壕の前を商業の三年後輩の松本英雄が通りかかったのです。私はさっそく呼びとめて西町の鉄道線路までつれて行ってくるように頼んだ。松本君が肩かけして五十米程のところまで歩くとへたばってしまった。

私は一米七十三糎の長身であるのに対して、松本君が二年生でしかもからだ小さかったのに対して、彼も被爆で身体を痛めていたのでした。

私はこれでは仕方がないと思つてぼう然として天を仰いでいた。そこに通りかかったのが強制連行できつい仕事ばかりさせられている朝鮮人二人でした。

私は、とにかく頼んでみた(断られると思ひながらも)ところが簡単に引き受けた。しばらくしてから、どこからみつけて来たのかりヤカーを持って来て、はやくのれと私を抱き上げてリヤカーに乗せてくれ、西町の線路傍まで運んでくれたのです。そこには百名程度の負傷者が横たわっていた。

午後七時頃だったと思う、機関車を逆さにつけ客車を

六、七輛つけた救援列車が十km程度のスピードで到着したのでした。そこで線路傍にいた負傷者がつきつぎと救援列車に乗りこんだ。私も列車に乗りこもうとしたがどうしてもおこなうことができなかった。考えてみればホームの場合は乗降口とホームとが同じ高さであるのに対して、たんぼの中に汽車がとまっているので、乗降口と地面では恐らく一米五〇位の落差があつただろうと思つているところが、これを見ていた警防団と国鉄マンの数人がかけつけて列車に乗せてもらったのです。あとで判つたことであるが、このときの状況を私の従兄、松尾春美がみていたそうで、勝一兄さんが救援列車に乗せられて諫早、大村方面に行つたと生き残つていた親戚のものに伝えたそうである。救援列車のなかをみると、私と同じ職場にいた海軍少年工作兵のSさんもいた。又女子挺身隊で奄美大島から来ていた新納さちさんもいたのです。いずれも全身に血を浴びたような姿でうずくまっていた。どちらからも視線を合せたのみで声をかけることもなかった。それほどまでに弱りきつていたのでしょう。

やがて汽車は発車した。時間としては八月九日午後七

時過ぎと思う。道の尾を過ぎて長与町に差しかかった。ふと窓の外をみると、切通しの土手の上から二十名前後の人が救援列車をみつめていた。薄暗くなつていく時刻で、身もこころも淋しくかつあわれでした。ああ戦争に敗けたなあ。あの原爆地獄の惨状をみてきた私としては日本をとりまく情勢は正に敗戦への道へとまっしぐら、それに加えて原子爆弾の出現では、もはや日本には勝つ見込みはなかったのです。

その後うつらうつらしていた。途中で諫早についたときしばらく目を覚ましたようだった。それから最終駅の大村駅に列車がついた。歩ける人は歩いてホームにでたが、私は動くことができず列車に寝そべったままでした。しばらくしてから警防団の人と国鉄職員がやって来て動けない負傷者をホームに運びだした。私もこのような恰好でホームに寝せられた。そのときホームが夏の陽光で暖められていたのか、太陽の余熱でまだなまあただった。夜の十時前後の時間だったろうと推定される。間もなくして負傷者をトラック、消防自動車で運びだした。私は消防自動車に乗せられたそこには七、八名の人達が

のついていた。漆黒の闇の街、大村市を南へと向つて消防自動車は走りだした。ところが、しばらくして上空に敵機の爆音が聞えて来た。すると兵隊の声がひびいた。

「川柵方面へライトをつけた自動車を発進させろ」

「逆方向へ誘導しなければ危いぞ」とつきつきに伝令が飛んでいた。

二十分程走つて自動車は停車した。そこは大村海軍病院でした。私達はさっそくおろされて軍医の診断を受けた。私は、強心剤二本を打たれて用担患者の名称をつけられてベットに寝かされた。まわりを見廻すと百名程度の人がねがされていた。一階にいた傷病兵は二階にあげられうめき声をたてる人、水をせがむ人、それはそれはやかましいことでした。私ものどがかわいていたので水を飲ませて貰ったがこんなに水がおいしいものであるとは知らなかった。こんなことだったらもつともつとふだんに水を飲んでおればよかった、と思った。

一階から二階に上げられた傷痕軍人の人達は下に降りて来て、酷かったな、頑張れよ、水を飲んだらいかんどぞとそれぞれ叱咤激励しながら被爆者の看護を続けたので

す。傷痍軍人の人もその晩は恐らく寝ていないだろう。翌日まで下に降りて被爆者の看護を続けたのです。まさに、庇^{ひき}を貸して母屋を取られた形で傷痍軍人の人達も長崎原爆の被爆者のために一生懸命に救護に当たったのです。翌十日、もう既に七・八名の人が死亡していた。それを衛生兵達がどこかに運んだのですけれど、私達は何がなんだかさっぱり判らずに、時々眼が覚めては周囲を見わたしていたのです。

昼頃になって、やっと食事が運ばれたようでも私達は重湯を飲んだことを記憶しております。周囲には呻^{うな}き声はするし、水をくれ等でまるで戦場のような状況であった訳です。私の近くに女子挺身隊の人がいて、私の顔などタオルで拭いてくれました。何回拭いても顔にコールタールのようなものがべったりついてとれない、それ程までに真黒になっていたのです。

五・六回してやっと取れたようですけれど、被爆した人は皆んな真黒になっていたのです。特にその時感じた事ですが、看護婦さんの色白には吃驚^{びっくり}しましたそれ程までに自分達が真黒になっていたかとの立証だと思ふ。

その後負傷者が続々と送られて来て、いつのまにか大村海軍病院全体が長崎原爆の負傷者で一杯になった。十一日頃になると家族の人達が負傷者を探しに沢山長崎からおしかけて来たのです。再会の喜びとか、酷かったなと言うことで、その日は家族の人の面会とか救援で、またいつそう騒々しくなったのです。死んでいく人も多数ありましたけれど、そういう面での騒々しさもあつたと思います。大村海軍病院では、死亡者がつきからつきに出ていっておそらく一週間たつた時には、半分位の人が亡くなったのではないかと思います。後の十人か二十人位は家族が連れに来て帰つたと思います。

家族の人が連れて帰るのもいろいろで、担いで帰る人もおれば、離島の人は漁船を仕立てて帰って行つた。

八月十五日の日は特に覚えていた。たえず空襲があつて防空壕に逃げておつただけけれど、私達患者は動くことが出来ず、ただ運を天にまかせて寝ていたので。ところが、その日になつたら敵の飛行機が飛ばず空襲警報も鳴らないのです。

そこで私はカトリックの祝日である聖母の被昇天であ

る八月十五日であるから、カトリック教徒の多い米軍も空襲を休んでいるのではないかと思ったのです。ところが、昼過ぎになって誰れとなく日本が戦争に負けたということが伝って来たのです。

私を検温に来た看護婦に「戦争は終わったのですか」と聞いて、私が「よかったですネ」と言ったら、看護婦さんからなじられたのです。「戦争に負けてでも終わった方がよいのですか」と言われたのです。しかし、私は原爆の惨状をみて、あの状況をみてから決して戦争をしてはいけないし、人類は戦争をすべきでない、アメリカが勝ったとか日本が負けたということではなくて、戦争をすること事態が人類の滅亡につながると率直にいった訳ですが、看護婦さんからなじられた訳です。考えてみればあの人は原爆の惨状をみていないし、こちこちの教育を受けた関係でそういうことだったろうと思うのです。

その翌日の昼過ぎに大村航空隊の飛行機が沢山でてきて、低空でぐるぐる廻るものだから、私はこの飛行機はどこにおったのだろうかと思ったのです。皇軍に降伏はなしといって今迄どこにおったか判らない飛行機が低空でデ

モフライトをする訳です。私はこんなに飛行機がおったのならばなぜB29を落とさないのかと思つたのですが、考えてみれば赤トンボのような幼稚な飛行機も沢山おつた訳です。これではB29の新鋭機にぶつかって行くのも困難ではなかつたかと私は思いました。それから病院も戦争に負けたということでもわさわしでしたのです。兵隊達が今後自分達はどうなるのかと憂れえて逃亡兵も出たそうです。八月十三日になって初めて検温があつた。

朝の六時の検温で三十九度一分だったことを覚えています。その頃になって病院の態勢が出来たのでないかと思うのです。そういうことで四日位混乱の時期があつたと思う。私も八月十七日頃になって、原爆を受けてから大体十日位たつて、初めてトイレに行けるようになった訳です。その頃になれば皆さん死ぬものは死に、引き取り手は出てくるし、病院も動き出したようである。八月十七日か十八日の夜中に歌声がきこえるので誰れかと思つて頭をもたげると、瓊中の帯屋君だった。一高の寮歌を歌っていた、えらい元氣な奴がおるもんだなと思つていたが翌朝目を覚ますと、姉さん達が泣いているので、どうな

さったのですかと聞くと弟が死んだとのことであつた。

昨日の晩まで元氣でおつた人が翌日ころつと死ぬケースが非常に多かつたのです。私は考えるにあの放射能でやられた人は静かに安静にしていることが一番必要だと思つた。晩よく喋つていた人が翌日ころつと死んだケースが多かつた訳です。八月二十二日頃私の小学校の同級生だつた深井弘君と廊下でばつたり逢つた。深井君はお母さんと兄弟が皆んな死んで姉さんが入院しているから看病に來たと言つていた。原爆落下後岡町一帯を探して廻つたらしいけれど、その惨状の模様を語つておつた。それは聞くも涙というようなことだつたのです。深井君は浜松航空隊におつて終戦になつて帰つて來たということです。それから二・三日して八月二十五、六日だつたと思うのですけれど三菱兵器と一緒に働いていた若杉君の兄さんが廊下を歩いているのです。声をかけたら若杉君が判らないものだから探しているとのことだつた。私も一緒に歩いて廻つたのですが若杉君はいませんでした。二十六・七日頃になつてから十病棟に初め百名ばかり收容されていたのですが、三十人か三十四・五人になつた

のです。半分位は死に、その半分位は家族に連れられて歸つている關係で、十病棟も少くなつた訳です。患者を一ヶ所に收容するという形で私達は三病棟に移された訳です。三病棟に移つてから暫くして私を個室にいけといわれた。最初は大部屋だつた、なぜ個室にいけというのか疑問に思ひながらいつてみると、師範の山口君というのが一人寝ていたのです。そして看病におばさんの木下仁代さんという方がおられた。山口君のお父さんは小学校の校長で長く看病することが出来なかつたから、妹にこいということと看病に來ていたらしいのです。ところが、木下仁代さんのご主人は海軍中尉で非常に病院に顔がきく訳です。酒保からお菓子とか果物等を持つて來るのです。私は二人一緒におるものですから木下さんから親兄弟みんな死なかつて可哀想にということと、私を非常に可愛がつていたでいて、そういうめんて病氣の回復に一段とスピードがついたのではないかと思つています。八月二十八日位になつたら病院側から退院してくれと言われた。冗談ではなか私は、家も家族もないのに何処に歸るのか、といつて強制退院を拒否した訳です。九月に

なってから喉にガラス片が入っていることを知った。大きな息をする度にピクピクしてくるのです。ガラスの摘出手術をしてもらったのですけれど、手術をして頂いたのは海軍病院の海軍少佐外科部長でした。多分麻酔がなかったんだけど初め一寸痛かったけれど大したことはなかった。九月五日になって兄が面会に来ました。というのは八月九日に私が救援列車に乗る時見ておった松尾はるみという従兄が、勝一兄さんが大村方面へ救援列車に乗せられて行ったと知らせたので、早速兄が面会に来たのです。廊下で逢ったのですが私は身体中に一杯包帯を巻いているので兄貴は気が付かないのです。兄貴とって声をかけても気付かないのです。後でわかって再会を喜びました。そして、家族のこともまた全部死んだということも聞いた訳です。覚悟はしていたけれど、矢張り悲しかったということをよく記憶しておる訳です。それから復員した兄が三日に一日ぐらいい見舞いに来てくれるようになったが、兄が復員したままの軍服を着ていたのである。勿論焼け出されているので、軍服を着ることが出来なかったのは当然のことである。とこ

ろが、海軍病院でしたので一等水兵、上等水兵などの下級の兵隊が沢山いたので、下士官であった兄を食事のときは一番上座に坐らせて食事をさせたのもおもしろいなあと私は眺めていたのでした。

私は海軍病院のベットに臥しながら、これからの世界の情勢はどうなるのだろうか、戦争は、私は長崎に投下された原子爆弾は最も初歩的なひな型とも言うべきものでありこれが改良されたあかつきはこの何十倍、何百倍の原子爆弾が製造されるであろうと思つた。こうなれば人類は原子爆弾によつて滅亡するのであるうと思つた。又民衆の平和を願うところは更に切実になり、より大きな声となることも考えられた。

しかしながら、人類の戦争の歴史をおもうとき人類は戦争を絶滅することはできないだろうと思つた。所詮は人間の欲望、果しなき欲望がこのように戦争をもたらすものであるから、とにかく、人間が欲望を制御するかがこれからの人類の将来を決定するものだとも思つたのである。

そういう病院のなかで、商業学校二年生の篠崎喜寿郎

君がおった。大人ばかりのところに十二・三才で顔をみれば「エノケン」のような男だった。看護婦さんから可愛がられてアイドルみたいになっていたので。けれども頭を大部怪我をしておりました。九月十日過ぎ頃になって伯母の前川マキが大村海軍病院に入院することになりました。兄貴が、大村海軍病院は設備が非常によいということと連れて来たと思います。伯母は髪の毛が一本もなく抜けておった。私も行ってみて驚いたのですけれど私達も髪は薄くなったのですが、伯母は全く髪の毛がありませんでした。この病院において非常に面白かったことは、終戦の日位までは甲板掃除と言っていたことがあります。甲板はどこにあるのだろうかと思っていたら廊下を棒雑布でごしごしふいているのです、それを甲板掃除といっているのです。さすが、海軍だなあと思っただ。巡検もあつたようです。終戦を境にそういうものがあったり、なかつたりでした。戦争に負けたということで大村海軍病院では混乱していたのではなかつたかと思うのです。九月三十日に退院するのですけれど着て帰る洋服がないので、三菱兵器の職場にいた上戸さんから洋

服を買ってそれを着て帰ったのです。

退院する時には、なにか証明書を買って大村駅に出したら、ただで切符をくれましたそして列車に乗って長崎についたのですけれど、道ノ尾を過ぎると無惨でよくいう中でよく生きておつたなと思ひ浦上一帯を列車の中から眺めていた。上戸さん宅に一応お世話になつておつた訳です。原爆を受けてから病院関係や又救護活動をされた沢山の人の温かいお情けで生きて来たのです。そういうことを考えれば今のような世代では、あの時のような災害があれば誰れも助けてくれるものはおらんと思つた。この稿を書きながら現代の世相とあの時のことを考えれば空ろ恐ろしい感じがするのです。

平和への誓い



山田 昌介

あの日、あの時、あの一瞬が長崎市民の運命を変えました。それはまさしく青天のへきれきでした。三十七年前の今日、この時刻、ピカッとして走ったせん光、ドーンと耳をつんざくような音とともに私は吹き飛ばされ気絶しました。気づいてみるとあたりは真昼というのに真っ暗やみ、数分後、視界が開けて必死で倒壊した工場の鉄骨や機械の間をはいずり、かいくぐって、やつとのことで脱出して見たものは、噴煙と阿鼻叫喚あびきょうかんの巷ちまたと化した長崎の街でした。

全身火傷を負い、真っ赤にただれた皮膚はめくれ、さ迷い歩く母親、黒ずんだ顔からは血を流し泣き叫ぶ子供

水を求めて川縁に集まり、しかばねとなって重なりゆく人、建物の下敷きになった人、けがやガラス破片で満身創痍いたの人、人。「助けてー」「助けてー」の声、声。その惨状は、この世のものと思われぬ地獄絵図そのものです。私もひん死の重傷を負いましたが、救援列車に救出され、大村海軍病院で治療を受けたおかげで九死に一生を得、きょうここにまいることができました。しかし、原爆は私の左目を奪い、三十七年後の今日もなお身体のうちこちからガラスの破片が吹き出してくるのです。

幸い軽傷の友人、無傷だった市民や遠方より肉親を探し求めて市内に入った多くの人々も数日後、紫の斑点が吹き出し、おう吐し、下痢、出血に苦しみ、毛髪がゾロゾロ抜けて、のどをかきむしりながら死に絶えてゆきました。

ようやく一命をとり止めたものの、今なお放射能による原爆後遺症に苦しむ者、その数のいかに多いことか。また、歳月の流れとともに被爆者は老齢化し、被爆体験は風化しつつあります。九千度の熱線、秒速二千メートルもの爆風は、地上のすべてのものを倒壊、炎上し、罪

のない善良な十五万余の長崎市民を一挙に殺傷した。このような残虐非道な原爆は、人類史上絶対に許されるものではありません。

私たちの叫びは、ようやく世界的な叫びとして高まってきました。「ノーモア長崎」「ノーモア原爆」。先般、開催された第二回国連軍縮特別総会は、みるべき成果もなく閉会したといわれていますが、反核の声は大きなうねりとなって世界にこだましたことは心強く喜ばしいことです。

この際政府は、まず国家補償による被爆者援護法の制定を決意され、世界に日本国の責務と良心を示していただきたい。また、鈴木首相は国連軍縮特別総会で被爆体験、非核三原則、平和憲法を持つわが国の立場を強調され「人類はかけがえない地球を愚かな選択で破滅に追いやることは許されない」と核軍縮の実現を訴えられました。しかるに世界の列強国は、核軍備の増強に狂奔しつつあり、今や恐怖の均衡の下に世界の破滅へ一步一步近づいている予感さえします。唯一の被爆国であるわが国は、被爆者の声、民衆の声を聞き、米ソをはじめ核兵

器保有国の猛省を促し、政府自ら陣頭に立ち、全世界のイニシアティブをとって軍縮、核兵器廃絶、世界恒久平和への絶ゆまざる努力を傾注されんことを切望してやみません。

焦熱地獄と原爆病で死んでいった原爆犠牲者の御霊よ。きょう、私たちはあなたの肉親や友人たちとともに、ここの浦上の丘に集まり、花を供え、水を注いでごめい福をお祈りしています。あの日、あの時、あなた方はさぞ苦しかったでしょう。水が欲しかったでしょう。あれから三十七年目、長崎はみぞうの大水害に見舞われました。

今度は、荒れ狂う水と土砂の犠牲となられた多数の被爆者の方々も含めて、きょうは新たに千八百八十八人の原爆殉難者の御霊があなた方のお仲間入りをしました。私たちは、決してあなた方の痛ましい死を無にしないため、長崎が最後の被爆都市でありますきょう、戦争のない世界平和実現に向かって、生命の限り努力することを被爆者を代表して御霊の前に誓います。どうか安らかに眠りください。

(注) この体験記は昭和五十七年八月九日の原爆犠牲者慰霊平

和祈念式典で被爆者代表として「平和の誓い」を朗読されたものです。

被爆体験記

近藤 近

私は丁度原爆の落ちた日は、村役場に勤務しておりますが執務中でございました。何か炎のようなものが、ピカッと凍りついたような瞬間で光が先で、それから、小学校の運動場に、何か爆弾のようなものが落ちたような感じがすると同時に、ガラス戸も、なんもかも吹き飛ばされて、他の方達は、全部裏の方に避難していらつしやいましたけれども戸籍主任（現在助役）をしております辻君と私だけが、まだ仕事を続けておりました。ところが、ガラスの破片が辻君の頬一杯にぬかった訳です。その瞬間吃驚したので、机の下に暫く潜んでおりましたけれども、砂埃でブーツとして部屋一杯舞つておりました。書類は全部吹き飛んでしまって、ガラスが全部割れてしまうような悲惨な状況であった訳です。

何だろかなと云うことで、暫らくして、だんだん気が落ち付きまして、やっと机の下から這い出してみると、何もかも目茶苦茶でございました。それから、だんだん気を落ち付けて他の村長さんとか助役さん達も出ておいでになりましたので、色々話をしておりましたところが二時頃に、長与の堂崎に魚雷発射試験場が設けてございましたが、その発射試験場の西さんといわれる方がその日は丁度長崎の三菱にお出になっておられて、他の下役の人に靴を握らせて自分は足袋裸足で血まみれになって帰ってお出でになった。そうして、今長崎はこういう状態でも何もかも目茶苦茶で、火災でドンドンもえておる、やっと、自分はあちらこちらを逃げ廻つて今此処にたどりついた、だんだん負傷した人達が長与に逃げて来るだろう、何とかして、そういう人達を助けてやつてくれということでした。それで村長さん始め皆さんがそういう人達がおいでになつても収容するところがないから、早速、小学校の教室を片付けて、そして外に収容するところはないだろうということで、机や椅子を廊下の方に片付けまして待つておりましたところが、焼けただれた方、

そしてほとんどはだかの状態で次から次と夕方から夜にかけてだんだん患者の方がお出になりまして、そして、小学校の教室は全部塞がるような状況でございました。

ところが、医療の手当その他が出来ませんでしたけれども、早急にお医者さんやら薬局の方にお願ひしまして、焼けたただれた方に火傷の薬を何とかしてくださいというようなことで、そういう薬品をあちらこちらから収容しますと同時に、今の消防団でございしますが、その時は警防団といっておりました。団長さんも役場に駆けつけて頂いて色々努力をしてそう云う方々を看病しようと云うことになった訳でございます。したがって第一に食料がございませんので、初め二、三日は、白米が些少ございましたけれども、もうその当時から米の配給がなくて結局一升瓶に玄米を入れて、そして棒で突っついて白米になして、お互いがたべておった時代でございましたので、それも食いつくし、とうとう後には玄米をその儘で炊き出しをして、小学校に収容しておる負傷した方々や或はお握りを作りまして、長崎市の六地蔵付近までお握りをカマスに入れまして送り、何とか食料に困ってお

られる方を助けてあげたいということで、村をあげて一生懸命努力した訳でございますけれど、しかし、焼けただれていらつしやる方は毎日毎日亡くなっていく訳です。埋葬する余地もなくなつたのです。また、棺桶の手配も資材不足でまにあわないので、死体はそのまま現地に持つて行つて掘りまして、竹を割り、その竹に死亡された方の判つている住所、氏名、年令を書いてそして墓場のところに、それをかけて埋葬しておつた訳です、毎日亡くなつた方が四、五人から十人位亡くなれました。

私達は役場におりまして、炊き出しその他の指揮をしておりましたけれど、段々女の方々が来て頂いて炊き出しの手伝いをしていただきました。約三週間だつたと思います。それから佐世保の海軍病院からやつと来るようになります。そういう病院に収容するようになります。最後には、亡くなつた方々の名簿その他もきちんと整理しております、判つた方々には連絡などで大変心配した訳ですけれど、そう云う悲惨な状況を直接目の前でみて、いくらなりともそういう人達を看病してあげたことを今考えますと本当に涙なくしては話されないような悲愴な

状況でした。その焼け爛れた方は特に婦人の方は股に蛆が出来まして何とかしてください、おじさん何とかしてくださいと悲愴な声を聞きますけれど、お医者じゃないもんですから、どうにもならないで、そういう方が蛆に悩まされながら、亡くなった方も記憶しております。昼も夜も見廻りますと、水がほしい、これが患者の一番の望みでしたけれど、水をやったら駄目だと、そういうお医者さんの命令でございましたので、水を飲ませることもできませんで本当に情けない思いでした。それから、患者を小学校から他のところに移した後も、小学校の校舎前を通りますと、いやな臭いがいつまでも一ヶ月余りは全然その臭いがとれませんでした。漸く一ヶ月位たって授業ができるようになりました。小学校の屋根もなにもかも目茶苦茶になるように、吹き飛んでしまつて、授業するにもガラスは破れてしまつておるし、屋根が飛んでおるといふことで、村を挙げてそういう修理、その他大変でした。当時の村長さんや助役さん達はそれこそ昼も夜も大変苦労されたことを記憶しております。私達は下っ端ではございましたけれど、何とかして早く復旧し

て行きたいと努力した記憶はございます。その後、被爆者手帳交付の問題その他で大分努力をした訳でございましたが、今でも鉄筋がグニャグニャになって本工場といえば今の長崎大学のある所でございます。鉄筋コンクリートの建物が一ヶ所位残っていただけで後は全部倒れていたような状態でございました。多くの負傷者が鉄筋にはさまれて引き出すことが出来なかつたので、助けられる人だけを助け、後は仕方なく放っておく以外に方法がなくつらい思いを致しました。長崎造船所の方に救援を頼むようにとの命令がありましたので、私と外一名で行つたのですが、道路が遺体や壊れた家屋等で通れない状態で生きておられる人は私の足にすがりつくような方もいた訳です。

純心高校の先に造船とか兵器の女性報国隊員の寮がありました。当時は女性も三交代でありまして、丁度、夜勤した女性達が帰つて寝ていたところに原爆が落ちたと思います。焔があがつて、その中で助けられと呼ぶ本当に悲惨な状態でした。次の日まで耳からあの声が離れなかつた。やむを得ず川の中を走りまして、川の中でも

被爆体験記

長崎市油木町

大平力男

水を求めながら相当な人が死んでおられた、ようやく稲佐岳を登って造船所に行き、救援を頼んだ訳です。赤迫を一時頃出まして造船所についたのが七時頃でした。職場に帰ったのが、夜中の一時頃でした。それで自宅に帰ろうと思いましたが、夜中の一時間でした。それで朝方事しなければということ自分の家に帰ったのが、朝方の四時過ぎでした。実際に体験をしておりますので、援護法の問題、これはなんとしてでも成立させて頂かなければと思う訳です。戦争犠牲者の会の杉山会長が申されたように、この両輪を軸として援護法を成立させたいと思います。私共も微力ですが友の会の一員とし頑張つて行きたいと思えます。

この問題はあくまでもイデオロギーを捨てて、そして中広く全国一致してやっけて行くべきだと私は思う訳です。

(注 この体験記は昭和五十九年八月八日長与老人福祉センターにおいて「援護法制定運動と被爆者交流」の会議で

収録したものです)

昭和二十年八月は晴天続きで野山は若葉が茂り「セミ」の鳴く音で、息苦しい盛夏の暑い毎日でした。

当時私は、三菱工業青年学校二年在学中、養成工として三菱兵器製作所大橋工場へ勤務しておりました。戦時体制のため始業は午前七時、終業は午後七時、十二時間勤務が定時となっていた。八月九日はいつもと同じく太陽が照り肌には焼きつくような暑い日でした。自宅は西町（現在油木町）をいつもの時間通り六時三十分に出て大橋、岩屋橋を経て七時前に構内へ入り、作業服に着替え七時より朝礼が行なわれてから、各々の持ち場で仕事に従事、工場では魚雷の推進器（スクリュウ）の鑄型製作、鉄を熔解し鑄型へ流し込む仕事で五〇度近い暑さで、シャツを脱ぎ上半身は裸でした。丁度十一時を過ぎた頃高圧電気がショートしたような黄色い光が一面になったかと思つた瞬間、爆風で私共十数人は五十米位先まで飛

ばされ、屋根材の落下で下敷きになって意識不明の状態
で恐怖におびえ動く事ができなかった。数分前まで活気
に満ちあふれた工場の人（当時三百人）誰一人も見掛け
られず破壊された、鉄骨がアメのように曲がり、横たわっ
ていた。少し意識が回復につれて無我夢中で昭和町方面
の山林へ逃げた。山の中は怪我した者、やけどした者、
水を水をと泣き叫ぶ者、これが本当の生き地獄だ。大橋
から長崎駅方面は真っ赤な炎につつまれて、一軒の家も
なく長崎は全滅だ……唯一つ思い浮かんだ吾が家、そし
て、母、弟妹はどうしているだろうと思いつながら、どう
することも出来ない私は、ただ、ぼうぜんとしていた。
しばらくして自分自身が、血で真っ赤になっていること
に気がき、調べて見ると右頭部長さ八センチ深さ三セン
チ位、右手の指四本が第二関節まで入るほど割れていた。
多分工場の屋根材スレートが頭に当たったものと思われ
た。その傷の手当するにも薬品、包帯もなく、ただ一つ
身に付けていたフンドシをとり、頭部へ巻き付けた。時
間がたつて、従つて、眠くなり、寝ていると海軍の兵隊
さんに寝たら死ぬぞと言われて、ホホを二、三回たたか

れ、道の尾駅まで歩いて行け病院行の汽車が待っている
と叫び回っていた、私も一生懸命の力をしばって歩き始
め二軒の道を五時間位で行った。途中「B 29」の空襲が
あり逃げては歩きの繰り返しであった……丸焦げになっ
た死体が道路の沿線にまた……田の中、川の中には水を
求めてヤケドした者が何百人もいた、悲惨な状況でした。
道の尾に着いた時は薄暗く、八時を過ぎていた列車は
貨物で荷物同様に積み込まれ、各駅停車で大村へ着いた
時は十一時でした。消防自動車やトラックに積み込まれ
大村海軍病院へ搬送され、私の手術は多分朝方の三時を
過ぎていた。麻酔もなくメス、ハサミ等で海軍の衛生兵
によつて診療を受けその痛みは四十年過ぎても忘れる事
の出来ない、大村海軍病院に入院中新型爆弾という事を
知った。その威力は大村の病院長崎寄りの窓ガラスが全
部破れていた。一週間を経過してから三日分の乾パンと
被災証明を受けて長崎の我が家へ、道の尾駅から歩いて、
人家なく、灰色の街となつていた。私の家は爆風で倒れ
家の下敷きとなつて、母弟妹三人が死んでいたが、私一
人でどうすることも出来ず、死体と共に一週間過ごした。

今、思い出すと盛夏で腐って悪臭があったと思うが、当時は臭いとは思わなかった、まったく不思議な思いがする。二度と悲惨な原爆を使用しないよう全世界に叫びたい。その後八月二十四日父が久留米より復員して、ただぼう然として元気がなく、私は父に勇気を出してと泣きすがり、やっとの思いで家の整理にかかった、母弟妹の死体を搬び出し古材を並べて火葬した。そのもようが時々浮かんで苦痛である。それから苦しい生活が続き、食料はなく、金はなく、草を食べながら家の整理を終わり、小さなバラック小屋を父と二人で作ったが、唯、雨もりせぬ程度のもので風が吹けば飛ぶような貧弱な小屋であった。それから畑を耕し、イモ、ジャガイモ、野菜類を作って食べ栄養失調を食い止め元氣を取り戻した。と思っっているうちに秋は過ぎ、寒い寒い冬のおとづればバラック小屋は、すき間風で肌につきささるような寒気の夜が続いた、正月を迎えたが餅はなく、洋服もなく、友達もなく、古材を集めて焚火しイモを焼いて食べた、そのうまさも今でも思い出される。原爆が落下されて六ヶ月を過ぎた頃、被爆で生き残りの近所の人が次から次へ

と原爆病にて死んで行く、今度は自分の番ではないかと不安で生きる氣力がなく、食事ものを通らなかつた日が数日続いた。父から氣をしつかりもつて生きる事だけ考えろとはげまされ、勇氣と精神力で頑張つた。それから数年が過ぎ健康も回復し百姓に専念した。二十三年に長崎高等工学校土木科へ通つた卒業と同時に長崎市役所土木課へ就職、測量の助手として杭打ち、ポールもちなど皆と変わらぬ健康になつたが五年後には、原爆によるガラスの破片が肩、背中、足、から何回となく出始め、市民病院、大学病院で手術を受けた。また十五年被爆して三十五年目にも首からガラスの破片が出て、原爆病院において手術を受けた……。

被爆者は叫ぶ、二度と原爆を使用してはいけない。広島、長崎に落下された原子爆弾によつて約七十万人の尊い人命が失われ、今なお後遺症に苦しみながら病院のベッドで原爆病と戦つて、生き続けて核廃絶を訴えている患者、叫びは二度と戦争を繰り返してはならない。最近の報道によると依然として核兵器競争が続けられ人類は危険な時期に直面している。

私達は、あの悲惨な原爆を体験したことを生かし、国内はもとより全世界が真の平和確立の輪を広げなければなりません。

被爆の思い出

南高来郡南有馬町

中村 栄 秀

自分は科学的知識がないのでこれを分析した記事を書き残すことは出来ないし、又表現がまずいので小学生の作文に等しいかも知れないが、長崎に原子爆弾が投下された時の惨状を中心にその前後の模様など原爆犠牲者の三十三回忌に当たって記憶が蘇って来るまま私の体験を書き記して見たい。

(一) 当時の私の職場

大東亜戦争(当時日本政府はそう呼んでいた)を遂行する為昭和十七年二月一日新設された門司鉄道局長崎管理部に業務課旅客係として門鉄局勤務より転勤を命ぜられそのまま勤務していたのである(家族は全部十九年三月郷里南有馬に疎開させ以後自分は独身寮で生活中)

(二) 庁舎の疎開

庁舎は初め出島の税関前に新築されたのであるが、戦局は益々厳しくなりこの長崎も何れ本格的な空襲をまぬがれない情勢になって来たので、今の内適当な場所に疎開していなければ空襲を受けて管内の輸送がマヒする事になっては大変だという意見が出始めた。然し四〇〇人も職員が勤務する庁舎の移転ともなれば庁舎外に職員住宅等も必要になり相当に広い敷地があるし、又複雑で特殊な通信設備の移転が簡単に行かないという事で疎開は中々実行に移せないいたのである。処が昭和二十年の二月不幸にして火災を起こし庁舎は勿論重要な書類も殆ど焼失してしまった。そこで軍事輸送を始め一般の輸送も必要最小限の業務が、何とか出来る程度の事務的資料整備に全力を傾けて取り組むと同時に長與村吉無田郷(長与駅前附近)の水田を借り受けることに成功し、ここに三・六型(巾三間、長さ六間)のバラック十三棟、住宅数棟、及び横穴防空壕等を昼夜兼行で急造し、通信設備等もほぼ出来てここに疎開を完了したのは二十年の七月始め頃であったと記憶する。

(三) 原爆の炸裂

八月六日広島に新型爆弾が投下されたという事は翌日の新聞で知ったのであるが、これが原子爆弾であることはまだ誰も知らなかった様である。それから一日おいた八月九日、その日はよく晴れた暑い日であったが、自分は仮庁舎の中で本局に提出する書類を整えていた時、空襲警報は警戒警報に切り変えられていたのに午前十一時頃（正確には十一時二分）飛行機の爆音らしい音がかすかに聞こえたけれども、別に珍しい事でもないので気にも止めないでペンを握ったとたん、目がくらむ様な強烈な閃光に見舞われ不吉な予感に打たれた。瞬間殆ど無意識に隣の机の下に身を投げ出し両手で耳を押さえたがそれと同時にドーンという物凄い音と共に窓の障子は枠共折れ硝子はミジンに砕けて反対側の窓にたたきつけられていた。

自分は初めその窓ぎわに爆弾が落ちたものと思ひ机の下（土間）にはい乍ら体を撫で回して見たがどこもやられた様子がないので跳び起きざま裏の防空壕に逃げ込んだのであった。その部屋には七、八人いた筈だがその

連中がどんな行動を取ったか知らなかった（当時私は36才）。暫くすると駅裏の小山の向こうからもくもくと黒煙が上つて、空は長与の上まで一面まっ黒くなり今すぐ土砂降りでも来そうな状態になったがその時誰からともなく長崎は全滅らしいと防空壕の中にも伝わって来た。（自分が今迄思い込んでいた長与から見る長崎の方向は丁度90度違っていて長崎と長与は直線で極めて近い距離にあることを初めて知った次第である）。

(四) 救援列車の乗り入れ

十二時過ぎ長与駅で客が降りてしまった下り列車を早速救援列車として長崎に乗り入れるよう運転係との合意で計画し、被災者は生き埋めになっている事を想像してスコップを持参せよとの命を受け大急ぎで乗り込んだ（旅客のT君貨物のN君の外数名乗ったと思うけど正確な人数は不明）。そして次の道ノ尾駅では大した変化も気付かなかつたが市内はまだ煙が立ち込めていて線路の安全も確認し難いので、N運転係が列車の前方を徒歩で合図し乍ら汽車を進めたので全くのろのろ運転であったが、連続して鳴らす汽笛の音のみが如何にも気味悪くさえ聞

こえた。然し後で聞いた処によると生死の境をさまよい乍ら助けを求めていた負傷者は、この汽笛を聞いた時「あゝ助けて貰える」という気がしてどんなに勇気づけられた事かとのことであつた。そして列車は大橋の少し手前のガスタンクの近くまで進んだが残念乍ら鉄橋の枕木が焼けていて危険なため止むなくそこに立ち往生せざるを得なかつた。

(五) 市内の惨状

スコップをかついで線路伝いに歩いたが、転がつた死体を右にさけ左にさけ気持ちは愈愈緊張して来た。最初感じたことは男女を問わず遺体全部が丸々と太つていてやせた人は一人もいないのを不思議に思つたが、これは高い放射熱を浴びて体が膨脹したままだという事が分かつた。暑い最中の事なので上半身裸又はシャツ一枚の人が多く露出した処は全部無惨に火傷して死んでいる。髪の毛は帽子を被っていた人だけが残っているが、それも帽子から出た部分は、丁度乳児の頭をそつた様にはつきりきわ立って全く髪の毛が無くなつていふと言ふ人もいた。電車通りに近づいた時そこにうず高くしかも極めて乱

雑に積まれた死体の山を見た。一瞬ぎよつとしたが調べて見るとそこを通過中の満員電車が放射熱の為焼失してしまひ、鉄の台枠丈が残っている上に乗客の死体が折り重なつたままの光景である事を知つた。長崎駅について見ると駅長の姿は見え、主席助役は煉瓦築の爐の煙突が折れ屋根を打ち抜いて落下した時自分の席で圧死したとの事であつた。幾人かの駅員は目についたが他の駅員や家族の消息を知る者は誰もいない、暫くして機関区合宿所の賄い小母さんが重傷を負つていたので救出して欲しいと依頼されたので、スコップは誰かに渡し担架を見つけて大橋の向こうにいる列車まで運ぶことにしたが、担架の相ぼうは誰であつたか思い出せない。最初は左程でもなかつたが十分もたたない内一面の焼け跡から立ち込める煙と自分の汗で目をあけきれなくなつた、袖で汗をふこうとしても紐のない担架をかかえていてはどうにもならない。体はくたくたで此の世の地獄とはこんなものかと思つたりした。それでも必死で浦上駅の近くまではたどりついたが、愈々続かず誰かを見つけて替つて貰つたのでその小母さんはどうなつたか気がかりではあつたが後の

事は遂に知らない。半崩れした煉瓦塀の陰で、漸く生氣を取り戻し救援列車の処まで行つて見るといつの間に来たのかその附近一帯に何百人（或は何千人？）もの負傷者が集まつてその半数とも思われる程は既に死んでいた。考えて見ると何処から来たのかここに来るまでは自力で逃げて来たに違いないのだが半ば安心した事もあつてか力尽きて息を引き取つたのであろう。死んだ人は万々気の毒だが今処置する術もないので仕方ないがまだ息のある人だけは早く手当の出来る処（主として諫早・大村・川棚の海軍病院）まで運ばねばならない。困つたことにここは駅のホームではないので踏み台を探しては来たがまだデッキに届かないし座りが悪いので中々乗せにくい。一人は下からだき上げ一人はデッキから引き上げようとするとつかんだ手は一面に水ぶくれで、皮が破れてずるつと沁るので大きなうめき声を出して泣き叫ばれるとほんとに自分がしめつけられる様で息がつまりそうだ。

大橋の兵器工場にいた海軍の兵隊が大勢いたが中には歩くことも出来ずベソかいているので可哀想と思ひ乍らも大きな声で「ここは戦場だぞ軍人が此の位の怪我でへ

こたれてどうするか」とどなりつけると不思議に立ち上がったて歩いたものもいた。数は定員の半分も乗せていないが殆ど横臥しているのもう積みめない。列車を発車させようとした時若い女（顔を見ても年令など分かる状態ではないけれど）が一人死体の群れからはい出して「小父さんわたしも助けて下さい」と足元にすがりついて来た。「此の汽車にはもう乗れないが直ぐ次の汽車が来るから元氣を出してここに待つときなさい」と言つたが汽車は道ノ尾駅で行き違つて直ぐに来たのに可哀想にその娘（？）はもう死んでいた。明るい内は困難を極め乍らも何とか救援作業が出来たが暗くなつたら愈々困ることになつた。敵機は戦果を偵察に来るのか頭上を旋回する位だから、合図灯一つも自由に使えない。だからといつて救援をやめるわけにはいかないので、暗闇の中に乱雑に転がっている中をはつて回つて死体の中からまだ息のある人を手さぐりで選り分け乍ら汽車に積んだのである。

こうして何個列車が出した時（多分十一時頃）部長から呼ばれて線路伝いに道ノ尾駅に行つた処「縁故者の安否を気づかつてこの駅まで来た人が市内の状況や道路等を

尋ねようと駅長に面会を求め人が果てなく続くので駅長は自分の仕事が出来ずに困っているから君が替って応対役を引き受けてくれ」とのこと。夕食も取っていないし全く力のない腹を押さえ乍らそれに当たっていると夜中の一時頃駅の広場で「南有馬警防団集まれ」と叫んだ声が聞こえたので驚き乍ら直ぐに飛び出して暗やみの中で近所のNさんを探し当て「こんな状態だから私は当分家に帰れそうにないけど元気でいる事だけをあなたが帰られた時家族に伝えて下さい」と頼んだ処肩の重荷を降ろした様な気がして楽になった（通信機関も使えず安否を伝える方法がなかったから）。市外の時津方面からは被災者に配給する為炊き出しの飯をそのまま四斗樽に詰め込んで大八車から数知れぬ程運んで来たらしくそれを握り飯にして駅にも幾つか貰ったので自分も一つ戴いた。ほんとにうまかった。翌朝自分の手を見ると水ぶくれのはげた人間の皮がいくつもいくつも両手にはりついていて。道理で夜中に食べた握り飯は格別な味がついていたわけだ。

兎にも角にも一度長与の寮に帰って一眠りして来よう

と自分の部屋に行つて見ると瀕死の重傷を負った同僚の家族が五、六名自分達の布団を引き出して部屋一ぱい横たわっている。仕方がないのでその中に頭を突っ込んで寝て見たが重傷者のうめき声で神経を刺激されては如何に疲れていたからとて眠れるものではない（その家族達も一週間位の内に殆どなくなったとの事を後日聞いた）。

寮の食堂に朝食を食べに行つたが以前からの事乍ら小さな芋の粉団子を五つばかり入れた味噌汁一ぱいで腹の虫さえ押さえられない程だった。その辺に点在する鉄道官舎をのぞいて見ると決まった様に炊事場の石綿煙突が三つ位折れて次の部屋あたりまで飛ばされているし、屋根の瓦は皆おどりまくり、天井が全然張ってないので（敵の焼夷弾が天井裏に止まらないようにとのこと）灼熱の日光が遠慮なく部屋の中を照らしていた。長与でこれ程の被害を受けていようとは現場を見た者でなければ気がつかなかったかも知れない。被災者の救援については市役所から打ち合わせや依頼に来ると思つているけど何の音沙汰もないのでY主席に同伴して市役所と県庁に行つて見たが職員も家族も大分やられてるらしく殆ど出勤

してないので何の打ち合わせも出来なかった。浦上駅に行くと見ると駅舎はペチャンコに倒潰して幹部は全滅したらしいが元氣な職員も幾人かいたので、これと協力して救援や連絡応対に天手古舞いしている間に警防団と鉄道の施設課員等の手によって、焼け残りの材木と付近に散っていた古トタンで立体三角形の応急駅舎を作って貰った。一日も早く営業開始が出来る様に仕向けなければならぬ。有りつたけの乗車券が倒壊した駅舎の内外に散乱しているが番号揃えも何も出来るものではない。然し如何に非常時とはいえこれをそのまま放置する事は許されないので一枚も残さぬ様に集めることにしたが壁土を取りのけていると死体が出て来たりして中々能率が上がらない。それでもやつと集め終わった乗車券は管理部旅客係としての自分が立ち会いの上完全に焼却させ、その旨本局に報告する様処置した。腹はペコペコだが一面焼け野原の中では何一つ口に入れるものはない。幸い雜のうの中に出張用の米が二合位はある。他に一合位持ち合わせた人がいたので三合程の米を遠方から借りて来た釜と石を積み重ねたカマドで炊くには炊いたが茶碗も

箸もおかずもないので握り飯を作っていると次々に人が尋ねに来るので暫く応対して帰って見ると白い箸の握り飯がまっ黒になっている。不思議に思つて見るとそれは数知れぬ蠅がとまっているのである。その蠅は何処から来たという周囲にはまだ沢山な人間と馬車馬の死体が放置されたままだからその死体にたかつていた蠅が飯のおいをかぎつけて集まって来たものに違いない。全くいいような不潔極まるものだがこれ以外に何も食う物はないのだ、人の殺し合いである戦争のさ中だと思えば何の事はない。その蠅を追い払つて舌つづみを打つたことは一番記憶に新しい。それにしてもこれ程人畜や植物が死滅する中でどうして蠅丈が生存していたのか未だにその謎は解けない。食つた後も腹に異常はなかったが初め外傷もなく元氣で働いていた職員の中に一週間後に一人、二十日位過ぎて又一人急に変調を訴えて残念乍ら他界してしまつた。所謂原爆の放射能が二人の命も奪つたのであろう。浦上駅附近に続けて十日ばかり行った後のことであるが、管理部仮庁舎の一棟を開けて土間に藁を敷き、ここに収容していた主に職員家族の負傷者を病

院に移す為だき起こして見ると火傷が化膿して、そこには沢山なウジが出来て体中をはい回っていたのには一寸顔をそむけたくなくなった。当時の諫早駅長Kさんはこう言った「原爆の惨状は地獄以上だ」と「なぜならいろんな地獄の絵を見ただけ此の位悲惨な絵は見たことがないからだ」と。

(六) その他

自分は早くから家族を疎開させていたので被爆の際も肩の荷は軽かったが、長崎で家族を失った職員は焼け残りの材木を拾い集めて肉親の遺体を自分の手で火葬に附しこれは母、これは長男、或は妻と幾つもの骨箱を書類棚の上に置き乍らAは輸送に、Bは施設にと各自の持ち場を最後迄死守する姿を見た時思わず抱き合つて初めて泣いた事を覚えてゐる。

八月十五日陛下の重大放送は焼け野原の中にいたので聞く術もなかったが夜になって防空指令本部から「戦争終われり、防空中止」という電報が届いた時ばかりは「戦争終われり」という一片の言葉で片付けられてたまるものかと又手を取り合つて号泣した事であった。

救援作業が一段落した頃自分は下痢を始めて一ヶ月以上も治らずに困つたのであるが医者に見て貰つても原爆の影響か否か判然とはしなかった。一番困つたのは何と云つても食糧が足りない事で芋を食い始めた朝も、昼も、晩も、昨日も今日も、明日もと芋の素炊きばかり、そしておかずは海草ヨガマタを乾燥したもの（普通は誰も食べない）の連続で、これがなくなれば今度は芋の粉（半分は芋づるの粉末を混ぜた薄苦いもの）で作つた小さい団子の味噌汁一ぱいのみが毎日三回続くのであるがそれでさえも井を手取る時は落ち込んだ目をぎらりとさせて少しでも多かりそうなのに手を延ばすのである。人間もここまで来れば誠にあさましき限りで動物と何ら変わるところがない。電話のベルが鳴つてもひどい空腹では応答して声を出したくない位だ。管理部では総員がプランを立てて食糧用の野草採取に行くよう計画までされたが遂に実行はしなかった。こうして食糧難で困つてゐる時進駐軍が乗り込んで来、従つて今度はその進駐軍輸送を始めとして外人の捕虜輸送、日本軍人の遺骨輸送復員輸送、続いて植民地からの引き揚げ邦人の輸送等々

返つて戦時中以上の苦難が長く続くのであるがその詳細は後日に譲ることにし原爆犠牲者の御冥福を祈り乍ら一先ず被爆の思い出を終わりたい。

尚原爆に対してはその放射能が現在世界中で騒がれる程危険なものであることを即刻至近距離に入り込んだ私共は勿論、それを命じた上司も当時は全然知らなかつた為であつて若しこれを知っていたら例えば人道上的問題はあるにせよ十日間も浦上付近に入り込むような危険は冒さなかつたであろう。自分はその後肺結核、肝炎、胃潰瘍、胃ガン（疑似）等数々の病気を次々に患つて世間様にも大変御厄介をかけ乍ら既に六十八才を過ぎていたが戦時中から戦後にかけての過労と食糧事情の急迫が健康を損ねた一因であろうとは想像されるけども、これが原爆の放射能を浴びた影響であると断定する術は今もつてないのである。

（二伸）

1 自分は家族を郷里に疎開させるまで道ノ尾駅から徒歩で二、三分位の処（滑石郷）に借家していたので原爆後その附近に行つて見た処瓦葺き家の中

に点々と混じつて建つていた五、六棟の藁葺の家は放射熱の為即座に火がついたとの事で一棟も残らず焼失していたのにはこれ又大変なショックを受けた次第である。長崎―浦上―道ノ尾―長与私共が乗つた救援第一号列車を牽引した機関車は記念として後日長崎市に譲渡されることになり昭和四十八年十月十四日の引き渡し式には市の招待により元国鉄マン七名中の一員として自分も参列の光栄に浴したわけであるがそのSLは今も市の中央公園に鎮座し當時を物語つている。

証言

諫早市幸町一〇九

清水ミチ

昭和二十年八月九日長崎災害の時、被爆者の方を、諫早市の各施設に収容されました。その中の一つに、海軍病院もありました。私達の厚生町も市の要請により海軍病院にも看護の補佐に出動致しました。私は十七日夜、二十日と出勤しました。

特に印象に残っている、二十日の出来事を証言致します。この日はなぜか沢山の方々（二十四名）が出動したのです。厚生町から海軍病院迄は約一時間はかかりました。天祐寺の前の道をガヤガヤ話しながら歩く人、私達若い者は、大人の話しに興味がないので、線路を歩いて、永昌町のガードの前で、大人の人達と一緒に、守衛さんの所迄来ました。私は、町内の代表者ですから、十七日の夜のように、厚生町より何名来ましたと報告しました。すると奥の玄関の方へ行く様指示をされましたので、二人、三人と連立って、バラバラに歩いて玄関迄来ました（この時の服装は、カスリとか棒縞とかで作った、モンペーの上下服を着ていました。又婦人会の人は制服のウグイス茶で作った上張りを着ておられた方もおられました。其の頃は白いエプロン等は、機銃掃射の目標になるから、白色は外出の時は使用してはいけない事になっていたのでした）。玄関には白い衣類を着た看護婦さんが迎えに来ておられて、十七日の夜の様に手を消毒して、広い廊下を一寸歩いたら、右側に出入口がありその部屋を受持つ様に言われました。其の部屋は右側に庭が見え

ていました。患者さんは、白い衣類をきて、ベットに寝た方坐った方等がおられました。約三十名位おられたと思います。一番驚いたのは入ってすぐ右側のベットに、国民学校の二校舎でも見たのですが、黄色い、カボチャがぶよぶよにくされた様な感じの方がおられ、目と口があるから、人間と解る様な方がおられた事です。なぜ、たった一発の爆弾で生きた人間が、くされるのか、この爆弾の威力に驚かずにはおられませんでした。この日の作業はシーツの交換から始まりました。私達は全部素人です。一人の患者さんに、四人も五人もかかって、やっと全部の方のシーツを交換しました。

このシーツは、広い廊下に面した出入口の外にもう一つ出入口があつたのです。その部屋を出て、一寸歩いたら又廊下がありそこに手術をする時、病人を寝かせて運ぶ車がおいてあり、その上にあつたのです。次は又看護婦さんの指示に依り、部屋の掃除をしました。それから看護婦さんが薬を、バツバツと病人さんの枕元において行かれましたので吞ませる手伝をしました。国民学校や、中学校では、こんな事がなかつたので、はっきり憶えて

いるのです。次は食事です。一人に、一人ずつ附添って食べさせました。その時分の私達には、夢にも見られぬ御馳走なのでさすがは海軍病院じゃなあーと感心しました。又、真赤な梅干が印象的でした。私は、町内の事務をしていましたので、炊出しに入れる梅干を一軒、一軒事情を言つて貰つて廻つたのですが、其の時代の貴重な食糧だったので、少ししか集らず困つたからはつきり憶えているのです。この食事の時です。一緒に出勤した江島さん、広瀬さん達が受持つておられた学徒動員の方がなにも欲しくないとおっしゃるのだそうです。水もあまり欲しがられないとか、それで、少しでも食べなければ元気になるからと言われても、ただ欲しくないとと言われるので何か欲しいものはないかときかれたら、カボチャか里芋の蒸したものが欲しいと言われたそうで、この方は、宮崎か熊本の方だろうと話しておられました。そうして、此度来る時もつて来て上げると言われたのですが、二日たつても、看護の要請がなかつたので、其の方の言われるのをもつて海軍病院に行かれたら守衛さんの所で、非常にとがめられ、やつと事情を言つて中に

入れて貰つたら、又、玄関の所でとがめられ、又、一生懸命事情を言つて、やつと病室に入れて貰われたら、その方は、すでに亡くなつておられたそうです。私は、町内会から行つた時は、すんなりと中に入れて貰い、個人で行つた時はとがめられる、これから見ても、市と海軍病院とは、何かの連絡があつていたのじやないかと思うのです。お昼休みに、正面玄関より広い廊下を通つて、一寸行くと、左側の方の部屋にも被爆者の方がおられると言う事をきき、どんな様子をしておられるのだろうかと思ひ行つてみました。其の部屋は、タタミを敷いてあつたのか、板敷の上に、そのままか、此処の所が一寸思ひ出せないのですが三十から四十畳位の部屋がありました。私の記憶の中に、病院の中に、こんな部屋がとびつくりした事が忘れられません。なにしろ、其処の部屋の障子が印象的でした。そうして左側に庭が見えていて、部屋の向うの方にも庭が見えていました。其処の部屋の方はベットじゃなく、畳か板敷の上に寝ておられ、白い衣類はきておられませんでした。やけどされたそのままだったのです。凡ての方に大きな蠅が寄つて来るのです。そ

れで、ウチワや新聞紙の折りたたんだのがあったので、蠅を追払ったり、汗をふいてあげたり、オカワで用を足してあげたりしました。この部屋の看護の係も昼休で、休憩をしておられたのか、ただ一人簡単服の上に白いエプロンを着て、手伝っておられるだけでした。そうして時間となり、元の部屋に戻ったのですが、暫くして、病室の端の方におられた男の方が、足がむずむずすると言われるのです。見てはどうもなかったのですが、看護婦さんに、私達は連絡に行きました。その看護婦さんの部屋は、かなり広い廊下に面してありました。すると、お医者さんが（小柄な方）来られ、患者さんが言われる部分の所の皮を、メスではがしたら、ウジ虫が行列した様に、皮の中から、次から次へと、出て来るので、びっくりしながらも、私達はお医者さんの言われる通りにお手伝いしたのでした。そんなに行っている時、入院患者が来られましたからどなたか三人位迎えに出て下さいとの事で、出入口の傍に香田さんや田口さん達、半造の方がおられましたので迎えに行かれ、担架に乗せて連れて来られました。その方のベットの位置は、部屋の中央あたり

で、庭に面した方でした。そうして、病人に附添って来られた親類の方から、この方は、広島軍隊で原爆にあり、復員後、髪が抜け、歯ぐきから血が出てとまらなくなつたから入院されたのだとおききました。また、その方は七班の香田さんの知人でしたので、半造（七班）の方々は、それから主にその方を看病されました。時間になり帰る時、その親類の方も、それでは自分も川内町だから、貴女達と道順が同じだから帰ると言われ、諫早公園の近所の現在ガソリンスタンドのある横の道まで一緒に来て別れたのでした。九月になつてまもない頃、その方が私の家の近所に引越して来られたので私達は、なおさら、この時の印象を忘れていないのです。その親類の方の名前は後で知るのですが、毎熊さんと言われるのです。十七日の夜も二十日も何回か看護婦さんから指示を受けましたが、同じ方であつたならば、私は一人の看護婦さんと一人のお医者さんにしかお逢いしていません。又、この日はお昼前栄町の方とお逢いしました。私達がおりました部屋の外で、ガヤガヤと言う話し声があるので、それで、何事が起きたのかと、尋ねました

ら、栄町の方がひん死の病人さんから腕時計をとられたのだそうです。それで、厚生町の江島さんがひどく叱られたと言う事だったのです。この事は、私達は自分達が多くなに不利になろうとも絶対に言わないと約束していたのですが、仕方がなかったもので、厚生町の吉田さんが五十二年十二月頃の面接の時、当時の葉山さんに言われたそうです。又五十三年三月十六日県との懇談会の時、当時の栄町々内会の事務をしておられました現在毎熊さんとおっしゃる方が言われました。この話しは、厚生町と栄町の当時住んでいたものは殆んど知っています。でも本人さんが現在幸福な生活をしておられるので、なるべくこの話しは、したくなかったのです。昭和五十一年二月十九日県の説明会をきき、手続をしようと思った時、私は、二十日の日にかつぎ込まれた方の事を思い出し、あの時の方は誰れであつたのだろう、と思い、半造を訪れました。

半造の田口ヨシさんの話し

あの人は、内田格馬さんと言って、昔半造におられた人の子供さんだったけれど、一緒に行った香田シナさん

が生きておられたら詳しい事は解るのだけれど、なにしろ香田さんの家は、自分の家の隣で、内田さんの奥さんが幼な友達と言う事で、よく遊びに来ておられた事は知っているけれどーと言っておられました。昭和五十一年十月二十七日夜、県庁より民間人は海軍病院には看護に行つてないと言われたと言う話しをおききました時、内田さんの戸籍とう本を見たら解ると思いました。そうして、内田さんの家族の方を、やつと探し出して、了解を得て、市の戸籍係の協力を得て戸籍とう本を入手しました。それを見たら矢張り場所は海軍病院、死亡月日は八月三十一日になっておりました。それで、当時の係の葉山さんに、これで審査をして下さいと言いました。葉山さんは、審査会にかけてみなければ解らないけれど、この位では却下されると言われ、そんなものかなあーでは、どうして真実を証明したらいいのだろうと、その時はそう思ったのです。そうして、五十三年になり毎熊さんの御主人にこの話しをしてみました。

御主人の話し

病院にかつぎ込まれた方は内田格馬さんの子供力男さ

んと言つて、内田格馬さんは、大正十二年頃迄半造におられ香田シナさんの家とは道をへだてて、斜向いの半造の土手に家が あつた。自分は小野町の中村という部落のもので、相撲取りをしていた。内田格馬さんも又、相撲取りをしておられた関係上、自分は諫早に用事で行く時は、その時は歩いてばかりだったから何時も、行き帰りには内田さんの家に寄り、お茶をご馳走になつていた。そんな時、内田さんと、香田さんは幼な友達であり又、内田さんの奥さんと香田さんは、若い時同じ場所、働いておられた。そんな関係上、内田さんの家で、香田さんはよく裁縫をしておられた。その後も内田さんは、本籍が半造であるから、親類の方が、こちらに沢山おられるので、用事があり、諫早に来られる時は必ず香田さんの家に寄つて行つておられたと思う（半造という部落は諫早と小野の中間にある）。昭和二十年広島島の呉が空襲にあつたのは、自分も内田さんも広島島の呉におつた。そうして、自分の家内は実家が川内町であつたから、川内町に疎開をし、内田さんの奥さんは、半造の家を売つて出られたので、黒崎町に米倉さんといつて、昔、同じ相撲仲

間の方がおられたので、その方の世話で黒崎町の田崎病院の離れを借りておられたので、内田力男さんは其処に復員して来られた。そうして、内田力男さんはその時結婚しておられて、今は消息が解らないけれど、確かに奥さんがおられたと教えて下さつた。その奥さんの事は、半造の方々が知つておられたので、五十二年一月六日広島島の呉に行き、国立病院に入院（脳外科、癌病棟）されておられた奥さんとお逢いしました。手術四日前の事だったので、自分が言われた事を私が書きました。なにしろ県があまり諫早市民を疑うので、私はただ真実を証明するため、五十一年十一月二十七日の夜より今日迄勤務以外の時間は全部といつてもいい程この事に使用し、又、この為に使つたお金も計算して見たらどの位になるか解りません。私のこの行動が、真実を証明する一つの手段となるならこの証言を書きました。

証言

原爆投下時の所属矢上村役場兵事係

吉 田 末 茂

当時は多数の負傷者、被爆者が矢上村森病院に押しつけて来た。その数延二百名を越えるものと思われる。森先生は負傷者ならいくらでも治療をやるという気概の人でしたので、森病院の玄関への通路にも、むしろの上に横たわりながら治療を待っていた。

私は当時矢上村に駐屯していた姫路の部隊の世話等に忙殺されていた。それで、一、〇〇〇米位の距離にあった矢上自動車試験場には、行ってもみず一切知らなかった。当時の村長田代さんは、政府より保管を命じられていた麦を放出して、村民に配給したため責任を問われ、諫早刑務所に拘留されその後病死した。しかしながら隣村の戸石村においては、駐屯していた軍隊が、軍管理の物資を矢上村より大量に放出したが、これは処分されなかった。原爆被災者に配給して、炊出したにぎりめし米だったのですが、これについては、責任を問われなかった。田代村長も決して、独断でしたことではなく、村の農業

委員会、いろんな機関にはかつて決めたことでしたが、気の毒なことでした。

なお青年学校においては、炊き出しをしたところであり救護活動をしていなかった。

意外に早かった米軍の「原爆実態調査」

元長崎県保健部理事兼原爆被爆者対策課長

松 永 均 人

昭和五十一年三月二十八日（日曜日）午前十一時から同十一時五十分までの約五十分間、元諫早高等女学校教諭山田辰雄氏が入院している諫早市天満町二七四高橋病院に行き面接して聞き取り調査をした結果は次のとおりです。

申立人 氏名 山田辰雄（元諫早高等女学校教諭）

住所 諫早市天満町二七四高橋病院三階六

号室

昭和二十年八月十六日に長崎県庁学務課長（岡山県の中学校長より着任された人であった）より指示があつて県立諫早中学校（氏名は忘却）県立諫早高等女学校（山

田辰雄) 県立諫早工業学校(忘却したが後日ABC勤務となった人)の三名は諫早中学校に出頭するようにとのことであつた。直ちに行つて見ると学務課の事務官が来ていた。

その人から、色々な感情もあるでしょうが明十七日に米軍のバード少将以下二十一名の科学者達が来るので、その通訳になるようにとのことであつた。私達三名はそれは困ると言つて帰つたのであつた。

翌八月十七日の朝十一時頃になつて、警察の自動車のようなものに乗つて警官が私の自宅(諫早市城見町慶巖寺下にいた)に来てうむを言わせず準備をさせられ、乗車させ連れて行かれたのが、大村海軍航空隊であつた。

その後で十三時にバード少将外二十一名の科学者が長崎の原子爆弾投下後の状況を現地調査のために到着することであつた。この時の出迎への代表者は県知事の代理として県の学務課長であつた。

着いて見ると既にB29みたいな大きい飛行機が二機着陸しており十三時になるとバード少将以下二十一名の科学者達が整列して待つておられた。私は手を上げて大声

で挨拶をした。向こうも手を上げて挨拶があつた。直ちに車に乗り長崎に向つて走り出した。長崎では原子爆弾投下跡や被害状況等の実態調査で私も共にあつちこつちに通訳のため廻つたのであつた。この日の夜は茂木のビーチホテルに宿泊することとなつた。

八月十八日以後二十日頃までは、私は長崎出島の税関に居て通訳に當つたが、その頃出島の岸壁には米軍の病院船が横付になつていて、米軍等の捕りよが次々に集まり、船内に収容されており、私は出島の岸壁や倉庫附近を時々見廻り通訳をやつていたが、特に記憶に残つてゐるのは捕りよ達が税関の部屋の中に着ていた新しい服や靴が、一ぱい積み捨てられており大変惜しい気がしたことであつた。又税関の中には十名位の制服を着た米軍の兵隊が出入りしていたが、これは病院船勤務の人達ではなかつたかと思われた。

八月二十一日から二十二日頃は、大村の海軍航空隊に行つて通訳をやらされたが、この時点ではバード少将外二十一名の科学者達は何処に行かれたか姿は遂に見ることは出来なかつたことを記憶している。

八月二十三日以後は諫早の方の勤務となり通訳に当たった。

追記、本件の裏付調査は昭和二十年八月二十日（月曜日）と二十一日（火曜日）の二日間、県からの命により県立農事試験場技術員養成所の生徒達二十数名が出島岸壁の倉庫の清掃作業に従事した際に山田辰雄教諭（英語）がたまたま税関に米軍の通訳で勤務されており、時々倉庫附近にも巡っておられた時に生徒とトラブルを起され（通訳の内容が悪く）たことがあったので参考までに記録しておく。



原爆秘話・私達の歩んだ道

衛生兵の逃亡のため

退院を強制した大村海軍病院

深堀 勝 一

私達は幸いにも、八月九日午後十時過ぎのことだったと思う、大村海軍病院に収容された。

長崎市西町附近に停車した救援列車第二号に乗せられた時間が午後七時過ぎのことでした。列車はつぎつぎに飛来するアメリカ軍の偵察機のために、徐行を続けながらの為に、長与駅附近の切通しを通過するとき、近くの住民が土手の上から救援列車の通過するのを注視した顔々が、うす暗く、ぼんやりと写っていた。長崎市の八月九日の時間帯をふり返してみると、長与駅附近でうす暗くなる時間が、七時二十分前後ではなからうか。ところで、八月十五日大村海軍病院に敗戦の報がどいた。それからというものは、あわてだしたのは、軍人で、

看護婦は、従軍看護婦でよほど訓練されていたせいか、き然として、平常通り勤務していた。軍人のなかでも逃亡したのは衛生兵が多かったのです。その為に病院当局は、八百人を超える原爆被爆者と、それまでの傷病兵のため医療行為を行うことが困難な被爆者のちよつとでも経過のよいものには退院を命じたのである。ところで、退院を命じられても、原爆被爆の病気は、どのように進展するか、又変化するか、判らないのが、当時の情況でした。それに、原爆被災のために、家、家財もなく、又頼るべき肉親も死亡しているために帰るに家がない人が多数いたわけでした。私も入院後二週間位たった八月二十五日頃だったと思うが、八月三十一日に退院してくれと看護婦から命じられたのです。しかしながら、私の許に誰れも見舞客一人来るでなく、家がどうなったか、さっぱり判らなかつたのです。

人の話によれば浦上地区一带全滅で恐らく家族は一人

も生きていないだろうとのことでした。私は八月三十一日が来ても、退院をこばみ看護婦が何回言って来ても断り続けました。

病院の関係者によると、二百名前後の人が退院を強制されたそうです。そのようなことで、私が大村海軍病院を退院したのが九月三十日でした。

松山爆心地沿いの河で

背びれを焼いた鯉をみた。

深堀勝一

昭和二十一年七月頃のことだった。私は現在の松山町の爆心地横を流れる河をみて驚いたのである。

二十センチ前後の黒鯉数匹が泳いでいた。よくよくみるとそのうち二匹か三匹が鯉の背びれがちぢれているのである。これは、おそらく原爆の熱線で背びれを焼かれても一年後によく生き残ったものだと思った。

ご承知のとおり、爆心地から五〇〇米以内に屋外にいたものは、人間をはじめ馬、犬、猫等は全滅しているの

である。それにくらべてみると水の中を泳いでいたものは背びれをやいたのみで、生き残っているところをみると、水は熱線、中性子線、ガンマ線等の放射線を遮蔽する役目を果たしたのではないかと思うのである。断っておきますが、私は坂本町四十七番地の自宅から山里町の高台を越えて、松山町爆心地公園の川のほとりを抜けて、油木町の長崎商業学校に通学していたのである。その間は、昭和十六年四月から昭和十九年三月までの年月ですので、この河に鯉やふなが泳いでいるのをたちどまって、よくみていたのでした。この河は松山町爆心地の附近で深いところで八〇センチ近くあり、浅いところ三十センチ位のところであり、若干にごつていたのでした。深いところを中心として、鯉、ふな、が泳いでいて、ときおり石垣の下にも逃げこんだりしていた。

背びれを焼いた鯉は、原爆投下の瞬間には、ものかげでないと泳いでいたため、このようになったと思う。

その後、三年ばかりして、河をのぞいてみたがもはや、姿を見ることは出来なかった。

二人の夫を戦争と原爆でなくした私

水江 オケ

最初の夫と婚姻したのが、昭和十年で、まもなく支那事変が勃発し、夫にも召集令状が来しました。新婚後もまなくのことで、すでに、水江さんは妊娠八ヶ月の身重であつた。夫は、勇躍戦場に出征したが、昭和十二年上海で名誉の戦死を遂げたのです。

乳呑児を抱え途方に暮れた、水江さんはまだ若かつたので、周囲の進めで、丁度、夫の弟(実)が現役で久留米の野戦重砲兵第五連隊に入隊していて、時々帰省して逢つていた関係で、気心もわかつていたから昭和十六年に再婚をされました。二度目の夫は、現役を除隊後、三菱兵器に就職していた。まもなく、臨時召集により再び二年間の召集も無事に終え、三菱兵器に復職して、二人の女兒に恵まれ幸せな日々が続いていた。

ところが、昭和二十年八月一日の高空襲で、御船蔵地区周辺では多数の死傷者が出た。子供達はひどく怯えるし又町内でも疎開する人が増えたので、家族会議の結果

夫と姑を残し、たまたま、夫の弟が赤迫の三菱兵器地下工場で働いていたので、その方の世話をするため、八月二日三人の子供を引き連れ、水江さんの実家である西彼杵郡長与町の百合野に疎開したのです。

八月九日長崎市に原爆投下される。百合野では、長崎市内は全滅だとの噂を聞き夫や姑の安否を気遣い、翌十日朝四時に子供達をまた引き連れて疎開先の百合野から御船蔵に帰つたのです。姑は無事でした。お互いの無事を抱き合つて喜びましたが、姑は実が帰らないと気でもくるつたようになつてただ茫然としていた。百合野からの帰る途中では、惨い状況を目のあたりにみ本当にこの世とは思えない惨状であつた。原爆の恐ろしさをいやという程知らされた。夫が働いていた三菱兵器の工場は、跡形もなく、ただ鉄柱のみが折れまがつていて、無惨な姿のみで夫を探す気力もなく、ただ茫然としていたら、こんどは姑から、夫は他人だ、自分は子供を三人も亡くしたのだよと、逆に励ましてくれた、夫を何とか探さねばと度々兵器廠の跡に行つてみたが夫を探すことができなかつた。唯一つ残つていた建物(診療所)には負傷し

た人達で階段は足の踏み場もない有様で、そこでも夫をみつけることが出来なかった。

八月十三日午後五時頃現在の井上病院跡附近に、六六〇個の棺桶が並び百缶の石油が積んであった。三菱の係の話では、八月十四日まで待つてくれとのことでしたので、この棺桶のどこかに夫の遺体が入っているものと思ひ探し廻った。棺桶には竹竿の先にボール紙をつけ、それぞれが書いてあるので探しやすかったけれどもなかなかみつけることが出来ない。最後に黒のカーテンに包んであるのをようやくみつけることが出来た。夫は身体が大きくて棺桶に入らなかつたとみえます。遺体を引き取ることは当時としては出来なかつたので、お参りをして、あとは係の方におまかせする以外に方法がなかつたのです。六六〇個の棺桶に石油をかけ一斉に火をつけました。それは無惨で、悪臭が漂い、そばに近寄ることも出来なかつた。一晩中火事がおきたように燃え続けていた。八月十四日午後五時頃遺骨を受け取りに来るようになると連絡で遺骨を受領にいった、それは簡素な箱ではあつたが丁重に一人一人に手渡されたのでした。遺体は三菱

兵器および製鋼所の工員さん達だつたとのこと。それにしても、六六〇個の棺桶が原爆投下後僅か二、三日で用意が出来たことに、本当に不思議に思い或る人に尋ねたところ、三菱造船所営善課で、この様なことがあることを予測して作つておつたとのこと、ただ驚くともにも感謝していた。

終戦後は、姑と弟が別世帯となる。自分達母子だけで生活することとなり、生計は一応農業でたてておつたが現金収入が少く、子供達も段々と大きくなつてきたので、昭和二十四年に知人のお世話で三菱電機に就職することが出来、また、長男も県営バスに就職が出来、結婚もして二人の孫までもうけ、本当に幸な日々が続いていたが、突然孫娘が、白血病で倒れ僅か六日間で死亡したのです。孫娘は本当に優しい娘で、私の誕生日をよく覚えていてケーキ等必ずプレゼントしてくれた。あの娘が、白血病で死んだことは、どうしても原爆との因果関係があつたのではないかと恐ろしく思えて仕方がない。長男がまだ九才の時に、私と一緒に百合野から原爆落下後の翌日に大橋方面を通つて御船蔵に帰つた。また大橋にいた私の、

姉夫婦一家が原爆で全滅したのではないかと、探しに行くなど二回も浦上の原野を彷徨った、その関係ではないかと本当に心配でならない。また、他の子供や孫達にいつこのような症状がおきてこないとも判らないので不安である。

水江さんは、原爆の感想について、原爆は一日も早く全て廃棄すべきで二度と、戦争のない平和な世の中になつてほしいと語ってくれました。

入院生活十年私は

父なくしては生きていなかった

磯田泰子

被爆者のなかでも自分よりまだ酷い障害を持つて悩んでいる人、また、不幸にして死亡された人に比べれば外見は普通の人と変わらないくらい正常になつた自分が本当に幸だと思つている。しかし、頭部の障害と右手運動障害は一生治癒しない。原爆を一生恨み続けたい。しかし、自分より不幸な人も数多くおられることを考えれば、

一人でも多く不幸な被爆者のため、微力ではあるが尽したい。また自分のため一生懸命に看病してくれた亡母の供養と、なけなしの財産を病院代に払ってくれた老父に対して孝養を尽したいと思つている。

昭和十九年瓊浦高女の四年生の時学徒勤労令により強制的に三菱兵器大橋工場に従事させられた。

昭和二十年八月九日午前十一時二分長崎市に原爆が投下された。丁度三菱兵器大橋工場で仕事であつた。爆風のため五、六メートル吹き飛ばされ、一時失神状態であつたが、気がついた時には、屋根の柱が身体におおいかぶさり首だけが出ていたそうで、自力では脱出できず人の助けでどうにか脱出することが出来たが、頭部からの多量の出血で貨車に運ばれるまでは記憶はあつたがあととは、大村の病院につくまで判らない状態であつた。頂頭部に約八センチ位の木片が刺さり、そのため中枢神経を冒され右手の運動が自由にならなくなった。自分の身を案じ父と姉が工場跡附近を探し廻つたが判らず、学校に行つてようやく収容先が判つて大村病院に駆けつけてくれた。父の足許をみると地下足袋が焼けただれていた。

浦上の原野を歩き廻つたためと直感した。父に逢えた嬉しさと、原爆の恐ろしさで胸が一杯だった。翌日から母親が片時も離れることなく看病をしてくれた。

昭和二十四年一月十二日大村海軍病院を退院したが、入院から退院までの三年六ヶ月間に四回の頭部手術を行った。手術には当然輸血が必要となります。当時は復員軍人が多数おられましたので、手術は順調に進んだようです。しかし、頭部の傷口がなかなか塞がらなかったようです、また、血清肝炎と胆肝炎を併発するなど病状も悪化し、昭和二十三年頃は生死さえ危ぶまれ病院の中にある霊安室の死没者の記録台帳に自分の名前が書かれてあったとのことで、それ程重態であったかということが判りました。

昭和二十四年一月十三日国立長崎大学附属病院古屋野外科に転院することになる。ここでも頭部手術を三回行ったが頭部の傷口が塞がらない原因は、頭の中に髪の毛が一本入っていたためと判明した。その後手術をするたびに剃刀でグルグル坊主にされた。その時には本当に悲しかった。女性としてこんなつらい事はなかった。

昭和三十年四月十三日大病院を退院することになった。約十年間の入院生活で、かた時も離れることなく看病に当たってくれた母と姉、それに莫大な治療費を出してくれた父親に対して感謝するとともに、これから孝養につとめたいと心に誓った。

昭和三十三年三月被爆者に対する医療法が制定され、治療に対する救済がなされるようになったが人並に就職することも出来ず悩んでいた。

昭和三十二年十一月動員学徒犠牲者の会の発足。自分と同様の障害にあるもの、又は不幸にして死亡したその遺族のために微力ではあるが尽したいと思ひ会に入会した。

昭和三十三年から昭和三十五年まで、この三年間は、自分の趣味である洋裁と絵画を、趣味と実益をかねて洋裁学校や絵画教室に通ったこともあるが、被爆時に受けた右手の運動障害と左腕脱臼のため、目的を果たすことが出来なかった。兎角現金収入を得るため、母方の伯父に当るクリーニング店で働くことになる。右手は、箸や鉛筆を持つのも自力で持てない状態なので、左手で計算

するとか、金銭の授受やお客の応待等が主であった。給料は僅かであったがそのうち半分は食費として家に入れ残りのお金で自分の身の廻り品を買うなど経済的にも苦労した。

昭和三十六年十月動員学徒に対する障害年金が裁定となる。当時のお金としてはたいした金額ではなかったが、生活費の一端として援助することが出来て嬉しかった。

昭和四十四年一月被爆者友の会に入会し、同時に理事として被爆者手帳、健康管理手帳など原爆二法による各種援護受給申請の手続等にあたり、被爆者掘り起こしに特に離島など隠れた被爆者が多く、重症者がいることを予測して、五十数回相談業務を実施したことがあるが、この時も左腕脱臼等で困ったことが度々あった。

昭和四十六年三月長崎大学附属病院で八回目の頭部手術を受く。

昭和四十九年八月九日最愛の母が死亡(クモ膜下出血)した。十年間の斗病生活で片時も離れることなく看病してくれた母の恩を決して忘れることは出来ない。

最後に原爆に対する感想については、戦争は決して二

度と起こさないとともに、平和な世の中になること。原爆は一生恨み続けたい、しかし、自分以外にも酷い障害を持つて悩んでいる人が数多くおられるので、その人達のために微力ではあるが尽したいと語ってくれた。

終戦の詔勅が放送されていたとき 右腕切断の手術を受けた私

下谷 富太郎

昭和二十年八月九日いつものように会社に出勤して仕事についた。私は、長崎市茂里町三菱兵器製作所第三仕上工員として勤務しておりました。八月六日広島に新型爆弾が落ちたという噂が工場内で持ち上っておりました。その頃は毎日のように空襲があり、仕事すら手につかない日が続いておりました。その日も空襲警報が発令されたが敵機はたしかめられず八時三十分か九時頃に空襲警報が解除となりました。私はメッキ工場へ行き仕事にかかろうと外に材料を取りにいった、帰ろうとした時、長崎駅方面に黄い閃光があった。一瞬爆弾が落ちたと思

急いで工場内に入ろうとすると、工場の屋根とか壁が崩れて来た。爆風で飛ばされたのです。どの位気を失っていたのか判りません。気づいた時には私の身体の上を逃げる人が踏みつけていったのです。踏まれたおかげで気がついたのでしょうか、あゝ、生きていたのだと思ひ皆さんの逃げる方向へ私も後について逃げましたのです。

工場の門を出る頃には暗くなり、目覚町か銭座町かわかりませんが人が逃げる方向に私もついて山手の浜平方面へ行ったのです。途中家の下敷になった人が助けてくれ助けてくれと、あちらでも、こちらでも叫んでおりましたがどうすることも出来ませんでした。逃げまどううちに水がほしくなつて来たので、杉林がある谷間の方へ降りて行きました。そこには皆さんが水を求めて集まつておりました、焼け爛れた人、傷ついた人等で一杯でした。私もそこで水を飲もうとした時、水を飲むな毒が流れているぞという人がいましたが、飲まずにはいられなかつた。そのまま杉の木の根元に横になり、夕方まで谷間にいましたが、八千代町のガス会社が爆風でやられていたためか、ガスの臭いと熱風のため、たまりません。日が

落ちて上の道路に出ようと思つたが、身体の具合が悪くなり、その夜はそこで過ごしました。八月十日動ける人達が道路の上に昇つていくので、その後を追つて昇りましたが、まだ身体が思うようにならず、とうとう溝の中で夜を過ごしました、何時頃かわからないが誰れかが「ムシロ」を被せてくれた。浦上方面は家が燃え続けている、ガスの臭いと、火の勢いでとても堪らない。八月十一日の朝になって、会社の元気な人達が探しに来てくれた。現在城山町におられる谷山さん達でした。銭座町の上にある砲台跡に担いでいつてくれたのです、かなり広い所でしたが、そこでも多くの人達が、傷つき、焼け爛れた人、呻き声を出す人、水をほしがる人等で一杯で本当に生き地獄のようでした。私は、そこで、水と握り飯しを貰い元気な人達から頑張るよう励まされました。

八月十二日救護隊がやつと来てくれて茂里町の兵器工場へ運ばれました。そこでも傷ついた人で一杯でした。衛生兵が来て患者に手当をしていましたが、傷ついた者には赤チンキを塗るだけで、火傷した者には油のようなものを塗るだけだった。私は、十二日から十四日まで引

き続き工場におりましたが、この間多くの人達が亡くなられたようです。私は十五日朝出血がひどくなつて飽の浦三菱病院に運ばれました。先生達の話によれば、右腕を切断しなければ死んでしまうとのことでした。私は、切らずになんとかしてほしいと頼んだが矢張りどうにもならなかつた。十一時頃遂に右腕を切断した。その時でした先生達がソワソワして落ちつきがない。私は、余りの痛さに早くしてくれと叫んだ。すると二、三人の先生がいま大事な放送があるから暫く静かにしてくれと言つた。私は、手術台の上で戦争に負けた放送を聴いた。なんと酷いことだろう。戦争には負け、右腕は失い、さらに右眼にガラスがささつて失明寸前の自分の惨めさ、ただ茫然としていた、しかし、私よりみじめな人が沢山いた、焼け爛れた人、足を切断した人、身体中蛔が湧いた人等本当に生地獄でした。そして夜になり一人また一人と次々に死んでいった。本当に酷い戦争である。原爆を一生恨みたい。私の一家は母と妹が原爆で死亡、父親と私が茂里町の三菱兵器で被爆、姉は赤迫のトンネル工場で被爆、弟二人は大橋工場で被爆している。

私は退院後、眼科、外科と病院通いをした。腕の方は早くよくなったと思つていたら、肉が萎んでいくにつれて骨が二センチ程出て来た。二回目の手術をしなければならぬ、その時の痛さは今でも忘れることが出来ません。眼の方は治らないため永い間通院をした。

昭和二十二年九月頃、旭町の海岸通りを散歩していた時、新聞販売店の前に配達人の募集広告がでていた。その時は働かなければと決心し家に帰つた。二、三日してから販売店の前を通る度に店の中に入ろうかどうしようかと躊躇した。一週間位その家の前をウロウロした。思い切つて入ろう。傷害者だからといって断られたらとの不安が先に立つた。思いきつて家の中に入ると、人のいい主人が出て来た。新聞配達をさせてくださいと頼みますと、主人は私をみて暫く黙っていたが、腕のことを聴かれた。茂里町三菱兵器で原爆にあい腕を切断したこと、また、いまは眼科に通院していること等しばらくそのような話をした。主人は明日から来るように言われた。それから新聞販売店に働くようになったのです。その店の受持区域は渕神社から立神までで、私は立神地域を配達するよ

うになった。十日間位は園田さんという人に教えて貰い後は自分で配った。片手で配ることは普通の人の何倍もかかった。そのうちだんだん馴れて三時間位かかっていた時間が、一時間位で配れるようになった。一番困ったことは雨の日で新聞を濡らさないように配達することです。傘をさすと新聞が配れず、雨の日はよく新聞を濡らしました。ある日水溜りに新聞を落してびしょ濡れにした時もあった。その時は読者の家によって乾して貰ったこともありす。それから、新聞社まで新聞を取りに行く時は自転車に乗れないのでリヤカーを引っぱって夜の十一時頃取りに行った。どうしても自転車で乗れなければ仕事にならないので、自転車のけい古を始める。一週間か十日位かかりどうか乗れるようになった。しかし乗れるまでには左手を相当痛めた。毎晩のように右腕があるような夢をみた。それから何年かたち新聞販売店が専門店となり県外紙は、朝日、毎日、西日本とそれぞれ店が別々となった。私は旭町にある毎日新聞塩塚販売店に勤めることとなる、それも私を新聞配達員として働かしてくれた主人ですから一生懸命働きました。昭和二十

五年頃毎日新聞をやめ、長崎日日新聞中央販売店に勤めるようになりその後、城山、浦上の販売店に勤めた、或る日浦上教会の近くの食堂で、深堀会長と知り合った。会長から声をかけられ、腕のことを尋ねられた。茂里町の兵器に勤務している時、原爆で負傷したことを話した。会長は、いま、自分達は動員学徒犠牲者の会を作り、国に働きかけている、動員学徒、女子挺身隊、徴用工等で犠牲となられた遺族に対して、遺族給与金を貰えるように働きかけている等話してくれた。また、障害年金のことについても説明があり、あなたも障害年金が貰えると思うから、自分が勤務している役所まで書類を取りに来るよう言われた。こんなに親切にしてくれる人がいるなんて初めて知った。傷害者の僻みでしようか、右腕のことをいつも言われているようなきがしてならなかった。早速会長さんから教えていただいたように造船所に行き被爆証明書をもらって障害年金請求書を市役所に出しました。それから約半年位たってから障害年金証書が参りましたその時の嬉しさは、今も忘れることが出来ない。本当に深堀会長さんに逢えてよかったといつも思ってい

ます。昭和四十四年七月私は独立して、白鳥新聞販売店を経営することになりました。他の販売店に負けないよう一生懸命に働きました。当時は八百部の販売部数だったのが、昭和四十八年には千二百部にまでになりました。昭和五十年頃になつて疲れが出たのでしょつか身体の具合がひどく悪くなりました。深堀会長から仕事をやめなと死んでしまふよと言われました。思いきつて昭和二十二年から初めた新聞販売を昭和五十一年四月にやめることにしました。

毎年八月九日の原爆記念の日が来ると、手術台の上で右腕を切断された時のことが走馬燈のように思い出されます。原爆を一生恨みたい気持ちで一杯です、原爆は一日も早くこの世からなくなり平和な日本がいつまでも続くことを祈っております。

妻、子、父母の家族全員を

失つたその後の人生

深堀 市五郎

昭和二十年八月九日あの忌まわしい原子爆弾の落下の日には、三菱造船所第二機械工場幸町工場に勤務しておりました。

爆弾の落下と同時に、瞬間的に机の下に潜り込み、奇的にも殆んど無傷で助かりました。倒壊した鉄骨の中から這い出し、無我夢中で我が家に向つて帰り出しましたがどこをどう歩いたのかよく判らない状態でした。いま思えば、鉄道線路伝いに行き、海岸に沿つて歩いていたらと思ひます。途中、無数の焼死体、焼け爛れた息たえだえの人等水を求める声、助けてくれとうめく声、それは生地獄のような光景をみながらどうすることも出来ず、ただ黙々と歩き続けた、家族の安否を気遣いながら急いだ、下の川を通つて橋口町の畑の上に一軒だけ家が焼け野原にたつていた。そこに村野さんという方が茫然として立つていた。家族を探してから又来るから、ここに待つ

ているようにと行って暫く他の方を探しに行き、もとに戻ってみますとその人は既にどこかに行っていないかた。そうこうするうちに弥三郎さんという長老が私を呼びますので、行ってみますと、家族は誰れもないとのことでした。弥三郎さんは町に出かけていて助かったそうです。とに角、妻の実家が高尾町にありましたので、そちらに探しに行くことにしました。ところが、山里中学校の近くの畑の中に妻が倒れていました。三年生になる女の子がいて家族の消息を知ることが出来たのです。

被爆時の家族構成は

私が三十七才 三菱造船勤務

妻 三十五才 妻の実家高尾町で爆死

父 六十九才 自宅で爆死

母 五十六才 自宅で爆死

長女 県立高女二年生在学中学徒報国隊として三菱電

機に勤務中爆死

長男 六年生 自宅で散髪中爆死

二男 五年生 自宅で散髪中爆死

二女 三年生 妻の実家高尾町で爆死

三女 幼児 妻の実家高尾町で爆死

妹が二名と妹の子が一名が爆死

以上家族全員と妹達を含め十一名が原子爆弾により犠牲となつたのです。

被爆後は、草木も生えない所には、一時もおれないと思ひ妹達が嫁ついでいた大村市、佐世保市、福岡市、のいづれかをたよつて、商売でもしようかと思つておりましたところが、三菱の係長が、復帰するようにと強く進めてくれましたので、三ヶ月後に復職することに決めたのです。しかし、最初は廃材等で塩作りを始めたのです。被爆後、幸いにも畑を多少持つていたので、食生活には不自由はしなかつた。再起するのも並大抵の苦勞ではなかつた。妻の死にぎわに残した言葉を涙ぐみながら話してくれました。原爆の恐ろしさについても、三菱造船で特攻兵器等にたずさわつていた者として、全面禁止をすべきだと強調していた。

夫の理解と協力により 幸せな結婚が出来た私

測 本 玲 子

私は、瓊浦高等女学校の四年生の時でした。動員学徒として、三菱兵器大橋工場木工場に勤務させられました。工場はスレート葺のゲージ場という所で、小さな部分品を作るところでした。昭和二十年八月九日あの忌まわしい原爆の日は、いつものように職場で作業をしていたところ、物凄い爆風でスレート葺の工場は脆くも倒壊しました。私は、その瓦礫の下に身体の半分が埋ってしまいました。何時間かして、やっと瓦礫の中から自分の力ではい出て、瓦礫の上に座ったままで動く力もなかった。そのうち工場の上司から早く診療所の方に行くようにいわれたが、腰が抜けて動くことも出来なかった。しかし、上司からそれ位の傷でどうするかと怒鳴られた瞬間歩けるようになりました。第二門の近くにある診療所のそばまでいきますと、診療所は火の海で、先生方がポンプで消火活動をしておりました。これではいかんと他の人の後

について門の外に出ることにしました。ところが丁度兵器製作所と書いてあるトラックが一台止っていましたので荷台に皆さんと同じように上ろうとしますが、どうしても上がる事が出来ず、うろろうしていますと、帽子に二本の白線の入っていた学生が二人立っていてそのうちの一人の方（後で判ったのですが時津支部長の平井さんでした）から、しっかりせんかと怒鳴られたので、途端に元気が出て、どうにか荷台に上がることが出来ました。トラックは大橋方面に進んだのですが、建物の火災で進むことが出来ず引き返すことになりました。暫くして、長与方面にトラックは走り出しましたが止った所は、時津の何阿医院（中国人経営）の庭先に降されました。私は、瓦礫で右頬から右の耳の上に至るまで、裂傷を負っていたので、耳の切れかかっている部分の手術をすませ時津のお寺に収容されたのです。

被爆後三日間は自宅にも連絡は出来ず、そのため両親は心配して、大橋方面から大村の病院にまで毎日探しに行ったそうです。警防団からの連絡で三日後の八月十一日にやっと父と逢うことが出来ました。自宅（八幡町）

に帰つたのはそれから二週間後でした。その頃病院等ありませんでしたので、新興善国民学校（当時は救護所）で治療を受けるため毎日通院することになりました。

被爆による直接の障害は顔面（額）に軽いケロイドと甲狀腺だった。その他脱毛や歯からの出血等被爆によるものと考えられる症状はあった。それから瓦礫により耳たぶの裂傷等により戦傷病者戦没者遺族等援護法による障害年金の四款症の裁定を受けたが、幸いにも聴覚障害には異常はなかった。この裁定を受けるためには、救護所に私の障害ヶ所を撮影した写真が保管されていたため、その写真が裁定の極め手になったものと思われまゝ。したがって裁定になるまでには相当の日時がかかりました。女性として人並の結婚を望んでおりました私は、顔に障害があるから結婚に縁遠いのだと近所の人からまでいわれていたのです。知人や親戚からお見合いの話は度々ありましたが、矢張り片目の人とか、肉体的に欠陥のある人を紹介してくれました。この時程ショックで嫌な思いをしたことはありませんでした。たまたま、私の父方の叔父さんが世話好きでして、島原の方によい相手がおる

のでは是非お見合いをしてみないかと話しがご座いましたので、叔父と一緒に島原まで行きお見合いをすることになりました。すべて叔父さんがお見合いの段取りまでしてくれたのですが、私は、素顔で傷のあるのを承知で結婚してくれることを望んでいると叔父さんに申しますと、叔父さんは、被爆を受けたと言うだけでも嫌われるのに、そんな傷までみせてはとも人並な結婚は出来ないぞと言われ、厚化粧をさせられ、或る程度傷の判らないようにいたしました。右の方に傷がありますから相手方には、左の方に座っていただき、無事にお見合いをすますことが出来たのです、お見合いの日から十日後には結婚式を挙げることになったのです。

主人となる相手方に対して、傷害のあることをかくして結婚することを申し訳なく思いながらも無事に挙式も終えて新婚生活に入ったのです。

新婚後まもなく、ある夏の日、恐れていた傷跡が、夫に判つたのです。人生の破滅が来た、すべて自分の犯した罪であると諦め離婚されても止む得ないと覚悟をきめていたのです。最初は夫も複雑な心境のようでした。

日がたつにつれて、被爆による傷害であることを理解していただくようになり、なにかと協力してくれるようになりました。そのうち子供にも恵れ幸せな日々を送っております。

核のことについては、家族中でいつも議論しています。核兵器によって人類は滅亡するか、どうか、ということについては私共は、滅亡すると信じております。核シェルターでたとえ生きのびたとしても、今日の日本のような平和な生活は望めないと思います。核廃絶を訴え、平和運動に協力したいと思っております、と力強く語ってくれました。

体にガラス片が残ったまま

命懸けで故郷に帰った私

泉 ワ カ（奄美大島）

昭和十九年三月頃女子挺身隊として徴用をうけ、長崎市の三菱兵器大橋工場に勤務させられた。

昭和二十年八月九日の原爆落下の日には、工場で作業

中爆風のためガラスの破片が全身に刺さり、無我夢中で逃げるのがやっとで、どこをどう逃げたのか全く記憶がなかった。汽車に乗せられたことはぼんやりと覚えていた。正気にもどったときには、佐世保市南風崎というところだった。駅の待合所に鏡があったので、自分の顔を恐る恐る見ると、顔中が血だらけでこれが自分なのかと情けなく思った。兵舎のようなまた収容所のようなところに収容させられて、軍医さんの治療を受けた。たしか四十日間位そこにおいて、まだガラスの破片は残っていたが、収容所を出ることになった、収容所での生活は兵隊さんから親切にしていただけ、有難かった、また帰る時には、羊かん、石けん、毛布等沢山頂戴した。丁度弥次喜多道中のように身体の前後に袋をぶらさげて持ち帰った。しかし奄美大島に帰るにもお金がないので、り災証明書とかり災金が貰えることを噂で聞いていたから、兎角長崎に行けば貰えるし、自分がいた住吉寮に衣類やお金も多少あったので、長崎に行くことに決めたのですが、寮は原爆のため跡形もなく途方にくれました。元氣を出して、り災証明書とり災金（たしか六十円だった）を尋

ね歩いてやっと貰うことが出来た。一日も早く故郷に帰りたい一心で汽車に乗り途中何回か乗り継ぎして、鹿児島までようやくたどりつくことが出来た。しかし、そこでも二週間位収容所にいた、奄美まで行く船がそう簡単になかった。奄美まで行くには漁船を仕立てたヤミ船で、帰る以外に方法がなかったのです。それも船賃が一五〇円もするとのことで、り災金六〇円では足りませんでしたので、収容所でいただいた毛布等を売捌いて船賃にあてたのです、小さな船は三日間もかかってようやく故郷の土を踏むことが出来たのです、本当に島に帰りたい一心で命懸けだった。

奄美に帰っても、腕と足それに左眼の縁に小豆大の粒があつて触れると痛い、被爆時のガラスの破片によるものと思つていた。また、リユーマチによる手足の不自由も原爆に起因したものと自分では思つていた。地元の医者も原爆のことは知らないし、役場でもあまり相手にしてくれなかった。たまたま、昭和五十九年七月に長崎県被爆者手帳友の会の現地調査のあることをきき、出席しようと思つたがリユーマチのため足が不自由で歩くこと

も出来ず出席出来なかった。その後深掘会長さん初め友の会の皆様方の温かいご指導により、日赤長崎原爆病院に入院することが出来たのです。五ヶ月の長期間にも拘わらず病院関係者の親切な治療と看護によりまして、無事に腕と足のガラス破片の除去手術を終えることが出来、また原爆とは関係がないリユーマチによる足の不自由も平常に歩行が出来るようになり、本当に皆様方のお蔭と感激しておられました。

原爆で妻、子を亡くし逆境にもめげず
農業会のために情熱を燃やした私

佐 木 篤 二 (前琴海支部長) 八十八才

昭和二十年八月九日のあの忌まわし、原爆落下の日には、岩川町にあつた長崎県農業会西彼杵支部の支部長をしていた。当時軍の要請を受け松根油の製造を各農家に指導するため大草村に行く予定であつた。自宅が城山にあつたので、昼ごろの汽車に乗ろうと思ひ、道ノ尾駅近くを通つていたとき、長崎方面に閃光があり一瞬爆風の

ため吹き飛ばされた。幸いにもかすり傷程度で無事であった。妻や子供の安否を気遣い急いで長崎方面に歩いていくと道路が瓦礫の山で、それに、遺体等が散乱し、通ることも出来なかった。止むを得ず鉄道線路伝いに歩いてみると、枕木が燃えていた。原爆の放射線によるものだと本当に驚いていた。早速く妻や子供を探し廻ったが妻は、近くの防空壕の中にいて、かなりの重傷だった。兎に角妻の実家に連れて行こうと思ひ、知人からリヤカーを借りて、それに妻を乗せ、妻の実家（村松村）まで、運んだのだが残念にも翌日十二日に、原爆のため死没したと涙ぐみながら話してくれました。また、子供は、丁度夏休暇で、外に遊びにでもいつていたのでしよう、三日間も探したが遂にみつからなかったそうです。妻の実家に疎開するように話しをしていた矢先のことだけにと残念そうに話されました。

家族のことばかりでなく、役所の農業会には職員が十名程いたが、そのうち六、七名は即死であった。それに佐木さんの叔父さんが松山におられたそうですが、その叔父さんも焼死する等、それらの後始末で大変苦労され

たそうです。佐木さんは直接遺体等には触れることはなかったが間接的には大量の放射線を浴びていたことは事実です。しかし、今日まで幸いにも原爆症と思われる症状は全くなく健康で過ごしているそうです。

体質的にもまた、すべてにおいて運がよかったのでしようと言ってくれた。自分の身体に対しては、常に健康管理に注意しているそうです。米寿の祝いも昨日お済みになったそうです。八十八才とは思われないような若々しくお元気なお顔でした。被爆者手帳友の会琴海支部の初代支部長として昨年まで活躍されまして、現在では、農業共済組合のお仕事に情熱を燃やされておられます。今後益々お元気で活躍されますことを祈念して、お別れいたしました。

夫に感謝しながら生きてきた私

八窪 松代

昭和十九年十二月まで京都にいたが、戦争が熾烈になり、疎開のため出身地である五島の富江に帰って来た。

しかし、僅か四ヶ月位で、国家総動員法による女子挺身隊の隊員として、昭和二十年四月一日三菱造船所幸町工場第一機械設計係に勤務させられた。同郷からは四名が働くことになった。八月九日原爆落下の日には朝早くから空襲警報が出たので、皆さんと一緒に井樋ノ口防空壕に入っていた。十一時頃警報が解除になったので職場に戻り、椅子に座ろうとした途端ピカツとして家が真二つになったような気がし何かの下敷きになって腰から下が砕けたようになった。気が付いた時には誰かに助け出され、担架の上に乗せられていた。その時、ドカンと物凄い爆発音があった。そのため一斉にみんなが防空壕に逃げ出し、自分一人が残され本当に心細かった。幸い何事もなく、上司の方の指示で鮑ノ浦国民学校に収容され、八月十八日米軍が上陸するとの噂が出て、女、子供は疎開をした方がよいとのことだった。或る人が、旭町の棧橋から五島行の船が出るとの知らせを聞き、何としてでも帰りたい一心で、若い人の背に乗せて貰い死ぬ思いで乗船することが出来た。その船は、十九日の朝、五島岐宿町の水ノ浦という所についた。その修道院に一時収容

されることになった。応急手当を受けたが、診断の結果、右足股関節骨折とのことであった。翌日、家族達の手で、岐宿から富江まで六、七時間もかかって実家に帰ったのです、家に帰った途端、発熱をするし、下痢、嘔吐等、原爆特有の症状が出て、一時は助からないと親達は諦めた位でした。しかし漢方薬が効いたのか奇跡的にもよくなりました。股関節骨折の治療のため、福江にある公立病院で治療を受けたが、治癒する見込みがないと言われ諦めていた。昭和二十一年父の友人の勧めで、大村海軍病院に行き、治療を受けた。一年間の入院生活の後、嬉野療養所で六ヶ月間の温泉療法等のお蔭で、入院前はすごい跛びこだったのが大分よくなった。一年六ヶ月間の治療のお蔭だと感謝していた。

跛のひどい時には、町の真中で突然転び起き上がることも出来ず、丁度、達磨さんの様になって恥かしい思いをした事があった。こんな時戦争さえなければ、また原爆さえなければと恨みたい気持ちで一杯でしたと、いつておられた。昭和二十四年修道院のお世話で結婚、二人の子供と孫にまで恵まれ幸せな生活を送っておられます。

しかし結婚後は必ずしも幸せな日ばかりは続かなかった
 そうです。一時は、別れようかとも、また逃げだそうか
 とも思った事があったそうです。足が自由なため、育
 児から、炊事、洗濯にいたるまで、ご主人の協力によつ
 て過ぎて来られたそうで、いまでもご主人の協力に対
 して感謝していると涙ぐみながら語ってくれました。

多くの人の善意に支えられて

村崎 圭子

昭和五十八年十二月、三十七年間勤務した三菱造船所
 を退職され、年老いた母（九十五才）と妹さんの三人暮
 らして四十年前のことを次のように語ってくれました。

あの思まわしい原爆落下の日には、三菱兵器大橋工場
 技術部の研究室に男一人と女三人がいて窓際にいた村崎
 さんが熱線のため一番火傷がひどく他の方は軽傷で生命
 には別条なかった様でガラス片等で負傷された方も多
 かったようです。研究室は二階にあつて階段付近は炎で、
 どこから降りたか判らない状態で足には多少怪我をして

いた、その前は暫く失神状態であつたのではないかと
 思っていた。兎角逃げなければと防空壕のある山の方に
 行つたのですが途中人の遺体や馬の死体等丁度生き地獄
 のようであつた。自分も顔の火傷で眼が潰れるような感
 じで、又右手は骨が見えていた。どうにか防空壕に入れ
 てもらったが、中に入っていた人達から、傷害が余り酷
 いので病院に行くよう言われて、人に迷惑をかけられな
 いので一人で汽車がおる西町付近まで行き、たしか鹿児
 島大学生の方から汽車に乗せて貰つた記憶があり、その
 後は覚えていなかった。諫早の陸軍病院に担架で運ばれ
 たが、結局そこは満員でどうすることも出来なく、大村
 海軍病院に入院することとなつた。後で考えて見ると大
 村海軍病院に運ばれた事が幸いしたのだといつていた。
 約五ヶ月半の間（入院昭和二十年八月十日退院昭和二十
 一年一月十五日）完全に治癒するまで、あらゆる治療を
 施してくれたこと、アメリカの医師の手厚い治療と看護
 等を思えば恵まれていたと思つている。退院後は、父は
 老令であつたし当時日本画家をしておつたが、特殊な材
 料も手に入らず生活は苦しかった。頼りにしていた兄も

原爆により死亡したため、自分が働く以外になかった。

まだ国家補償や医療制度がなかった時たまたま三菱造船に勤務する傍ら英語の勉強をしていた、その英語の先生の紹介で、アメリカオクラホマ州のアシポルト・ワトソンという相当年配の方で多分宗教団体の役員をされている方と文通をすることとなった。彼は、アメリカが戦争に勝つたことを恥じていた、非戦闘員である若いあなた達を後々まで傷つけたことを恥じている。自分は貧しい生活をしているが、治療費等に使ってほしいと三ドルとか五ドルを送金してくれた。その時は、本当に有難かった。丁度妹は高校に行っているし、自分は入退院の繰り返しであったので助かった。又造船所では、被爆者であるという特別な扱いは受けなかったが仕事や給与その他病気がちなことについても何かと心遣いをしていただき有難かった。いろいろな人の恩恵でどうにか今日まで過ごして来られた事を感じておられた。高令である母親（九十五才）を抱え、又癒えぬ傷跡のある村崎さんに幸あれとお別れをしました。

母と叔父の看病で奇跡的にも助かった私

土 岐 えみ子

長崎県立高等女学校四年生の時、動員学徒として、城山国民学校内にある三菱兵器製作所の分散工場に勤務させられた。丁度学校が夏休み中であつたので、学校の校舎に分散して魚雷の部品の製造とか、事務関係の仕事等であつた。土岐さんは給与課の事務関係の仕事をしていた。その当時は、始終警報が鳴っていたり、戦局の報道が放送されていたので、就業中でもラジオの放送をしていたそうで、あの忌まわしい原爆落下の日には、丁度十一時頃の放送で「敵機が島原半島から長崎方面に西進中なり」と放送があつた。給与課には、動員学徒・女子挺身隊員等十名が机を並べて事務をとっていた。まだ警戒警報中であつたので何気なく、外を見ると、飛行機が一機飛んでいた。長崎の方に向つて飛んで来るようであつた。暫くすると黒いものが落ちた。その黒いものが地上に近くなつたかと思うと物凄い閃光があつて、その瞬間土岐さんは、近くの壁に叩き付けられ、その儘失神状態

となり、どの位の時間がたったか判らないが、「母さん助けて」とか「神様助けて」と、かすかに呻く声うなづが聴こえた。部屋が真暗くなって誰れがどこにいるのか全然判らなかつた。階段は崩れ落ちていたため、事務室の二階の窓からどのようにして飛び降りたのか、無我夢中で学校の校庭の隅にある横穴式の防空壕に入った。気がついてみると全身にガラスの破片が刺さり、また、ガラスで頸動脈の近くが切れ血だらけになっていた、それでも失神状態となつた。後で判つたことであるが、城山国民学校にいた学徒、女挺の一〇〇余名のうち僅か四人しか生存者はいなかつたそうである。そのうちの一人の生存者で本当に奇跡的に助かつたのだといつていた。

土岐さんの家は、柿泊で長崎から約十キロ離れたところにあつた。家には、祖父、祖母、母、妹(幼児)、お手伝いがいて、父は陸軍々医で済州島に応召中であつた。弟二人(小学生)は油木町の知人宅で遊んでいるうち被爆した。母は、娘や息子の安否を気遣い普段通つている道路が、原爆のため目茶苦茶に破壊され通れないため、山越えて、城山国民学校の防空壕まで迎えに来てくれた。

しかし、重傷であつたため動かすことが出来ず、仕方なく、また、柿泊まで引返して、四人の若者を頼み担架で運んだのである。途中中心臓が悪くなり、何回か強心剤を打つたそうである。夜遅く家に帰り、母は一睡もせず看病をしたそうで、ガラスの破片を抜き取るのに一晩中かかつたそうです。父方の叔父が西彼杵郡の神浦で開業医をしていたので、そこに使いをやって、叔父に来てもらった。叔父は父同様軍医で、出征しておつたが、たまたま病氣のため帰休除隊中であつたので、出来るだけの治療をしてくれました。完全に治癒するまで診てもらつたそうである。本当に母と叔父の献身的な看護のお蔭で生きてこられたと土岐さんは感謝しておられた。しかしまだ、爆風のため壁に叩き付けられたのが原因か、時々手足が痺れるしびのですよと、原爆の恐ろしさを訴えるように語つてくれた。

ケロイドで生涯悩まなければならぬ私

犬山春吉

自分の体験したことが多少でも反核とか、平和運動などにお役にたてばと前おきして語ってくれました。被爆当時の家族は、妻と妻の母、それに子供が三人いて六人家族であった。戦局が激しくなったので、稲佐から西彼杵郡長与町の三菱社宅に昭和十九年十二月疎開のような形で移転したので家族は被爆にも会わず無事であった。

八月一日の長崎空襲で三菱造船所も被害を受けた。船のボイラー関係の工場が破壊されたので、その跡片付けのため屋外で作業をしていた。あの忌まわしい原爆落下の日には、まだ、破壊された工場の跡片付けを継続中であった。丁度、十一時頃金比羅山方面にB 29特有の金属音がしたので、空を見上げると白いもの（落下傘）の落ちるのがみえた。それから二、三秒たって左前方から閃光を受けると同時に、大きな爆発音がした。戦時中は、爆発音があった時には、伏せるような訓練をされていたので、咄嗟に伏せたとと思うが、自分で伏せたのか爆風で飛ばさ

れたのか判らない。気がついた時には、身体の前の部分（顔、胸、両手、両足）に放射線を受け、衣服が燃えていた。幸い自分で火は消し止めたが、火傷のため、それは物凄く痛さで、口では言い表わすことが出来ない位でおそらく、苦しみもがいたことと思う。兎角、家族に会いたい一心で、長与の自宅に帰ろうと思つて、稲佐橋の中央まで来た時、職場の先輩が丁度通つていたので、声をかけたが、火傷のため身体の容姿が余りにも違つていたので、初めは誰か判らなかつたくらいでキョトンとしていた。何度も声をかけてやっと判つた状態だった。何とかその方の手助けで、稲佐橋を渡つたところの防空壕に避難したが、そこは、火事が出て危険な状態であったため、すぐに出なければならなかつた。稲佐国民学校で怪我の治療をしているとの噂をきいて、稲佐国民学校まで来てみた。しかし、負傷者が多く看護婦さんが一人おられ、手が回らず、先輩に手伝ってもらつて、顔（両眼ともみえない状態となる、鼻、口）、胸、両手、両足の応急手当を済ませ、国民学校の上の防空壕に寝かされて、一夜を明かした。しかし、傷が疼いて、ふるいまで起き

苦しい一夜だった。翌日飽ノ浦の本工場から応援に来てくれまして、担架で三菱病院に運んでくれた。それから、家族の者が長与の隣組の人達とリヤカーで迎えに来てくれた。長与についた時には、真夜中の十二時を過ぎていた。十一日には、長与国民学校が仮救護所となって、陸軍の看護兵数人と学校の先生が看護に当っておられた。

しかし、医薬品もなく、火傷には、塩水を沸かしてから、それを付け替えるのみであった。両眼が化膿していたので水道の水で洗滌をした。そこに二十日までいたがよくならず、当時新興善国民学校に設置された長崎医大の分院で治療を受けるため、消防団員の協力により、リヤカーで運んでもらった。二十一日頃から歩行の練習を始め、食事も自分で食べられるようになった。その後、九月二十五日大村海軍病院に入院し初めてお風呂に入った。更衣室にある鏡の前に立ち、自分の身体をみてケロイドのため顎の下が引きつり、まともに見られない状態だったので、これが自分の顔かと思つて本当に情けない思いがした。昭和二十一年一月二十一日左手が化膿していたが一応退院をした。二月上旬福岡に火傷に良く効く温泉

があるということをきき、一ヶ月程温泉に行くなどあらゆる療養を行ったが、治癒できなかった。同年三月七日から会社に出勤した、しかし、左腕の治療で毎日通院十一月三十日まで治療を行った。ケロイドのため従前の仕事は出来なく、軽作業の職場に移された。このため、給料が少なくなり、生活も楽でなかった。何とか仕事が出るようにならないかと三菱病院に相談したら、最近では医学も進歩しているので長崎医大に行くよう紹介をしてくれた。昭和二十九年十月七日辻村、調両先生の診断を受け入院し、左大腿部の皮膚を喉元に移植する手術に成功し、同年十二月二十九日に退院した。ケロイドのため、人との応待も出来ない状態であり、現在なお、ケロイドの部分に「カユミ」が出て原爆病院に治療を受けている状況です。なお、娘の結婚、仕事のこと等を思うと、いろいろな方の善意で生きてこられたことに感謝すると同時に、二度と戦争を起こさないこと、核兵器の廃絶を強く訴えておられた。

運命の悪戯いたずらか家族全員を

失ったその後の私

上園 好成

被爆当時は、陸軍に召集を受け、即日、佐世保相浦海兵団に編入となった。批把坂部隊といつて主計隊であった。戦局が段々と熾烈になって来たので、家族は西彼杵郡の道ノ尾にある温泉旅館に疎開をさせていた。

家族の構成は、

妻 三十六才

長女 十七才（女子商業から女子挺身隊として三菱造船所に勤務していた）

長男 十六才（瓊浦中学から学徒動員として三菱製鋼所に勤務していた）

二女 十二才

三女 十才

四女 八才

二男 三才

お手伝いさん（鹿児島から呼んだ人）

上園さんは、当時長崎市内に四つの工場（鉄工場、ローソク工場、石鹼工場、煉瓦工場）の責任者で軍に関係する工場もあった。たまたま、八月六日工場を見て来るようにと特別休暇が三日間出た。七日の朝家族を疎開先の道ノ尾から長崎の自宅に連れて帰ったのです。自宅は岡町二十四番地で原爆の落下地点の直ぐ近くであった。家族を連れ戻したのは、自分が長崎に三日間滞在することと、会社関係の役員とか、主だった連中を家に呼んで、夕食でも一緒にしながら、留守中の事業の様子をきくためであつて、道ノ尾から家族を連れ戻さなければ皆が無事であつたのに、また、自分が長崎に帰っていないければ無事であつたのにと、運命の悪戯いたずらを嘆いておられた。

八月九日朝早く浦上駅から佐世保に帰隊したが、隊内で長崎に大型爆弾が落ちたと噂があつたが、まさか、一家全滅するようなことは夢にも思わなかつた。夕方「妻子死す」との電報が来て上官から長崎に帰るようにいわれ、翌十日朝長崎に行くが、昨日までであつた我家もまた近隣の家もすべて廃墟となり焼け野原であつた。道ノ尾温泉旅館に行けば、誰かに会えるかと思ひ急いで道ノ尾

に行つてみると、六年生になつた二女がいた。その子の話しを総合すると被爆直後はその子だけが奇跡的にも助かり赤迫まで逃げその晩は、防空壕に一夜を過ごし十日に旅館に帰つたとのことで、被爆直後の模様を父に知らせるため生きていたかと不憫でならないと涙ぐんで話された。その子は、十二日に死亡されたとのことです。家族の後始末もそこそこに、工場関係者の後始末が大変であつた。工場の幹部連中は全員死亡したとのことで、名前も判明しない無縁仏が沢山あり、それを、十一日に寺町の長照寺に預けて、十三日には、鹿児島県に家族七人分の遺骨を持って、悲しい帰郷をされたのです、鹿児島から呼んでいたお手伝いさんは、運のいい方で、原爆の落ちた日には、丁度浜町に買い物に出ていて助かつたとのことです。

上園さんは工場の責任者であつたので、家族全員の死亡の悲しみを乗り越え、工場で働いていた犠牲者のご供養と犠牲者の家族への連絡等で十二月までかかり、責任者として、責任を全うしたと晴れ晴れとされていた。

八十二才の高令とは思えぬお元気なご様子で、四十年

前の思い出を語っていただき、本当にお気の毒なきがいたしました。いつまでもお元気で過ごしにられるよう祈念しながらお別れをした。

被爆者援護について

このように活動をした

永元 安夫

永元さんは、三菱青年学校に在学中徴用となり、昭和二十年四月十九日飽ノ浦造船所の横穴式防空壕掘りの作業中、落盤事故で負傷（頭部、左足、両手等）をしたため、造船所の工員としての勤務が出来なくなり、そのため、三菱造船所飽ノ浦寮に配置替えとなった。寮での仕事は、寮長の指示によって放送室での伝達業務等が主であつた。

あの忌しい八月九日の原爆落下の日には、寮の玄関付近で仕事中、爆風のため三メートル位吹き飛ばされ黒板などが身体全体に覆いかぶさって気を失っていた。幸い被爆による直接の障害は軽く、自力で脱出が出来たが、

寮生達に負傷者が多数いた。これら負傷者の救出に毎日多忙な日が続いた。親達心配して郷里に帰るよう何度々手紙が来た。仕事も満足に出来ないため、一応十月に故郷の沓岐に帰り、翌年の春に三菱を退職することにした。

沓岐に帰ってから、原爆特有の症状が出るようになった。午前中はどうか仕事が出来ても、午後から疲れが出るとか、大量に血を吐く等、五、六年は寝たり起きたりの状態が続いた。とに角、まともな仕事が出来るような身体ではなかった。また、内臓疾患で手術を七回もしたことがある。これは直接被爆との因果関係があったかどうか判らない。たまたま、昭和四十二年に沓岐郷ノ浦で動員学徒の集会があつて、それに出席したら、障害のことを聴かれたので、戦時中に三菱造船に徴用工として勤務中負傷したことを説明した。これをきいて徴用工としての障害年金の請求が出来るからといわれ、深堀会長が親身になってご指導くださり、お蔭様で僅か六ヶ月程で障害年金証書が参りました。もし、集会に出席せず、ご指導を受けていなかったら、今日のように安定した生

活が出来ていたかどうかと、いつも感謝をしているといつておられた。被爆者のためお役に立てばと、最初は二十人程でグループ活動から初めて、昭和四十九年に被爆者手帳友の会の郷ノ浦支部を結成した。

被爆者の運動の一環として、機関紙を年二回発行していたが資金難のため約三年間で中止となった。

昭和五十二年には被爆者合同慰霊祭を郷ノ浦で開催、また、平和運動の一環として、原爆写真展示会および映画会等を町公民館等で開催、四会場とも盛況裡に終了した。今後被爆者運動と平和運動に益々力を入れて、高齢化する被爆者のためお役にたちたいと、熱意をこめて語ってくれました。

私はこのようにして

友の会を知ることができた

大 浦 愛 子

被爆当時は、徴用として、三菱兵器製作所大橋第三仕上工場に勤務していた。作業中、爆風のため、吹き飛ば

され、気を失っていたが、気がついてみると、周囲は火が燃えあがっていて、自分がどこにいるのか全く判らなかつた。気分が悪く、暫く動けなかつた。とに角逃げなくてとはと必死になつて、起きあがり、歩きだしたら、近くに友達がいいて、服が破れて血が流れていると教えてくれた。その時は無我夢中であつたので、痛さも判らなかつたが、暫くすると傷口が痛くなつてきたが辛抱して友達と歩いていった。そのうち、鉄道線路に出た。そこで汽車がくるのを待ちなんとか汽車に乗つて、大村の海軍病院に収容された。その時はもう夕暮れであつた。病院では、服が血の固りで脱ぐことが出来ないため、鉢で服を切つて治療をしてくれた。最初の診断では、頭部、腰部、肘部、両手の打撲であつた。頭部には、ガラスの破片が沢山入つていて、ガラスの破片を抜き取られるのを覚えてゐる。十日間程たつて、父が、生月から心配して、きてくれた。医者はまだ暫く入院するように、すすめられたが、当時は食糧事情も悪かつたので、是非連れて帰るといって、生月に帰ることになつた。生月では、近所の医院に通院をしていた。昭和五十一年生月町で被爆者手帳

友の会の巡回相談（原爆医療法および特別措置法の説明と諸手当の請求指導等）があつたので、それに出席をして、初めて、特別措置法による認定患者としての請求および準軍属としての障害年金請求が出来ることを聴き、一日も早く、その恩恵に浴したいと度々被爆者手帳友の会に相談に行つた。腰部打撲による股関節脱臼のため、右足が左足より八センチから九センチ短く、自分一人で長い旅行が出来ないため、妹（佐世保市に居住）に付添われて、長崎市の被爆者手帳友の会事務所まで来ていたが、足が不自由であるため、再三、長崎に出てくるのも大変であるし、また、請求手続きも簡単には出来ないため、深堀会長から原爆特別養護ホーム「かめだけ」に入所するよう勧められて、入所しながら請求手続をした。会長はじめ、会の皆様のご指導のお蔭で、昭和五十五年七月に被爆者特別措置法による認定患者として、恩恵を受けられるようになった。

しかし、準軍属としての障害年金の方はまだ未裁定のようである。一日も早く、恩恵を受けたいと一日千秋の思いで待つておられた。資料不足のためか長年かかつて

いるが、友の会の適切なる措置と、親切なる指導に感謝しておられた。

いまなお傷痕に苦しむ私

佐藤 文子

原爆落下の時は、まだ五才であった。父親は応召中であつて、家には、母親と祖母、弟、叔父の五人家族であつた。家は水ノ浦の変電所近くにあつたが、叔母達一家が浦上から疎開して来て、たまたま、原爆落下前の八月一日の大空襲で、運わるく叔母達一家が爆弾で死亡したため、造船所付近は危険だと云うことで、本原の叔母のいるフランシスコ病院近くに疎開をしていた。原爆が落下した時には、弟達は外で遊んでいて、直ぐ防空壕に入っていたが、重傷で、二、三日後に死亡した。佐藤さんは家の窓際にいたため身体の前部分が放射能を浴び酷い火傷をした。母と祖母は座っていた場所がよかつたのか軽い火傷ですんだ。

終戦後、父は復員して三菱造船所に復職したが、妻と

娘の治療費等で決して生活は楽ではなかつた。父は法律には無関心な方で、生活費と治療費に追われ、諸手続等は全然していなかつた。

中学時代は、大学病院の調外科および辻村外科に入院し、三年間は入退院の繰返して満足な授業も受けられず、卒業式に出席していないため、卒業記念写真に自分の顔が写っていなかつたと寂しように語ってくれました。下半身のケロイドが酷く、特に左足の指が引きつり、靴を履くことも出来ない状態で、皮ふの移植手術も何回となく行つたが、子供の頃は怪我をすると放射能の関係か傷口がなかなか塞がらなかつた。親は歩くことが出来ないだろうと諦めていたそうです。幸い、先生方のお蔭で手術が成功し歩行が出来るようになった。しかし、医療費（手術代、付添料（母が後から来てくれた）等）、莫大な金額で、安い工員の給料では決して楽ではなかつただろうと、両親に対し感謝しておられた。その父も昭和五十四年に死亡されたとのこと。二十才を過ぎてから、どうにか働けるようになった。昭和三十八年に縁あつて、結婚をし、二人の子供に恵まれるが、上の子供が三才の

時白血病と診断され原爆との関係があるのではないかと不安であったそうです。現在は元気でおられるとのこと。

昭和五十三年にある事情で離婚することとなり、子供二人のためにも、どうしても働かざるを得なくなりました。

離婚をした年に、ヘルニアで歩行も思うようにならなくなり、病院に行くにしても会社を休む訳にもいかず、困っていたところ、友人から日曜日に診察をしてくれる医院を教えて貰ったので、思いきって、その医院（時津町桑崎外科）に行き診断を受けた。先生曰く「あなたのような酷い症状でありながら、なぜ健康管理手当の請求をしないのですか、あなたよりもっと軽い症状の人でも法の恩恵を受けていますヨ」と言われ、岳本さんという方を通じて初めて手帳友の会を知り、認定患者としての請求手続をしたのです。友の会を知る前にも度々市の原爆対策課に尋ねはしているが、資料を揃える方法等複雑であるため、会社の勤務傍らでは困難で諦めていた。昭和五十四年一月二十七日、認定患者として認められ医療特別手当の給付を受けられるようになったことを本当に感謝しておられた。

これも時津の桑崎先生、岳本さん、手帳友の会と多数の方の善意によって救われたのだといっておられた。佐藤さんは、今なお、疲れやすく、血圧も高く、顔にむくみが出る等原爆の恐ろしさを、しみじみ語ってくれました。

救援第一号のトラックに乗って

平井 茂

あの日はとても蒸し暑く、空襲警報で待避していた女子工員は、しみ出る汗を拭っていた。私は午後の始業時に工場長に説明するため、その調書を作っていた。

突然、ゴゴーツという物凄い音と電気のスパークの様な閃光が、北向きに立っていた私を背面から襲った。咄嗟に振り返ってみると、南側の窓という窓は真赤に燃えている。私は東京や佐世保での火の雨を直感した。そして

「伏せーッ」

と声を限りに号令し、自分もその場に、跪いたまま身

を伏せ、両手で目と耳を蔽った。

「どどーん」

と蔽っている耳をつんざく許りの轟音に、一瞬自分は失神状態になった。それは実に長い時間のように思えたが、実際は一瞬の出来事だったろう。気がついて見たら、いつの間にか自分は肩の所まで、台の下に押し込まれていたのである。

暫くして、自分の頸をつねって「俺は生きている」とひとり呟き乍ら、そうと台の下から頸を出してあたりを眺めた。あたりは真暗である。足元には十呎旋盤が柱に押し倒されている。私はあの時跪いたので旋盤に足を切断されずに済んだのだった。足を延ばして伏せておれば、柱と旋盤に足がはさまれていたはずだった。何という幸運だろう自分はまったくの無疵である。全く怪我をしていないと知った自分は、急に元氣と勇氣が湧いてきた。全員北側の広場に出るように大声で叫んだ。そして自分の組の者を見渡した。組の者は軽い負傷のものがあったが皆元氣のようである。よかったと思った。私は組員を誘導しながら、一番障害の少ない倉庫わきの通路

を列んで進んだ。二十米も進むうちに周囲が段々と明るくなってきた。途中負傷した女子報国隊員、それに岡村組長を連れて約百五十米ぐらい歩いて第二門に出た。第二門というのは現在の純心学園前のところにあった。そこまで来た私は、二人を降ろして、ほっと汗を拭きながら、ちよつと附近をみて吃驚りした。

門の両側、そしてその前の道路には全身火傷し、身に一糸も纏わず助けを叫ぶ人々、血みどろになった人々、どの顔をもみても誰であるか全く解らない。そしてあたりは見渡す限り火の海である。

突然エンジンの音がして、一台のトラックが本原方面から走って来た。私は飛び出してトラックの前に立ち塞がって車を止めた。みると運転手は私の知っている福本君であり、助手席には七高の学生帽が乗っていた。二人は私の頼みを快く聞き入れ、協力して附近に居る負傷者を出来る限りトラックに担ぎ込むと、かねて第一の避難所と決められていた医大病院に向った。しかし、病院に近づくにつれ、果して病院まで行かれるだろうかと心配になった。造船所の部品工場のそばを通ったときは、真

赤に燃えている火の中から人の悲鳴が聞えていた。岩屋橋まで来た。しかし、ここも火の海である。仕方がないので、時津街道に車を向けたが、ガスタンクの爆発のため電柱や建物が一樣に道路に向って倒れていて、全く人も通れない有様に、また元の道を引返し、第二の避難所である薬学部に向った。しかし、近くまで行って見ると、ここも道路わきの家が燃えているため、どうしても先に進めない。そこで思い切って川平に向うことにして先を急いだ。ところが、昭和町水源池の下まで行くと木の枝が折れさがり、電線があちこち垂れ下がって通行が困難だったが、なんとか此処をくぐり抜け川平の方に曲る所まで来た。ここもまた火の海である。万策つきて思い切つて長与に向うことにし、水源池の横に登り、太野に行き、そこからの狭い道路を二回、三回と方向転換しながら、やっと長与駅の裏に出た。そこで私は時津の方が病院の数が多いのを知っていたので、ここから時津に出るよう運転手に依頼した。トラックの上には二十五人の負傷者が乗っていた。そしてそのうち三人は重傷者であった。私は重傷者の顔を平手で撲ったり、肩をゆすぶって気を

たしかに持てと言いつづけた。また、この三人の重傷者は、いつ物が言えなくなるかも知れぬので、氏名と住所を聞いておいた方がよいと思いついた。そして先ず一番重態と見た女の人の住所氏名を聞いた。

「愛谷ふみ、片渕何番地」と言い終ると

「お母さん」と幽かな声で母を叫んでいる。私は「しっかりしろっ」

と手を握つてやったが、母を呼ぶ声は次第に細つていく。私は

「愛谷さん、愛谷さん……」

と続けざまに大声に叫んだ。しかし、やがてがっくりと手の力は抜けた。

彼女は自分を死に至らしめたものが、何であったかも知らずに死んでいった。全く知らぬ人ではあったが、私は悲しみが胸に込み上げ、涙がこぼれた。そして彼女の冥福を祈った。

時津の何阿病院に着いたのは、既に午後一時五十分になつていた。モンペ姿の婦人会の人々や、担架を持った警防団の人々が早速駆けつけて、負傷者の手当を加勢し、

手当の済んだ人を付近の万行寺へ收容する等訓練とは違つて皆一生懸命に協力してくれました。

(注、昭和四十五年十二月二十日発行の「原爆前後」から一部を転載)

平井さんはさらに、次のように思い出を語ってくれました。原爆落下の日には、長崎市に駐屯していた陸、海軍の軍人は約八、五〇〇人(長崎原爆戦災誌第四巻より)いたが、特に責任ある将校が逸早く雲隠れをしていたのである。もし、生存していた兵隊を集めて、救護に、医療に活躍をしていたならば、犠牲者は、まだ少なくとも済んでいたのではないかと、当時の事を思い出し、雲隠れをした将校に対して、怒りをぶちまけておられた。

時津町の婦人会、警防団等の人々が負傷者に対して、献身的な救護活動をされましたが、国を守り、地域住民の生命財産を守るべき立場にある軍人が、それも将校が雲隠れするとは、言語道断であると、私も憤りを感じた次第です。

平井さんは被爆時奇蹟的にも、ほとんど無傷で助かったが、最近では疲れやすく、また、水ぶくれが常に出て

て、火傷の症状が続き、血液に障害があるのか血が薄い等原爆特有の症状が、今頃になって起きてきたのではないかと不安がっておられた。

一日も早く元気になれば、老令化する被爆者のために、さらにご活躍されるよう祈念しながらお別れました。

最愛の一人娘を原爆で亡くした私

山 本 ユ キ

私の一人娘が長崎市立高女の三年生の時、先生に引率されて週に何回か、三菱④工場といって、大病院付近の工場に、動員学徒として勤務していた。

娘は二年の三学期までは、上海の第一高女におりましたが、都合により上海から引揚げて来ました。転校のため試験を、諫早と長崎で受けていたが、長崎の方が早く合格となったので、長崎市立高女に入学させました。

当時喜々津から汽車で通っていた市立高女の先生が二人、生徒も四、五人はいたようでした。戦争が激しくなってきたので、学校側では諫早の方に転校してもよいとの

ことでしたが、お友達も出来ていたので、あまり勧めも
しませんでした。毎朝早く汽車で通学していました。

原爆落下の日には、上司から今日はもう帰るように言
われて、工場を出たところ敵機らしい爆音が聞こえて来
たので、工場内にまた駆け込むと同時に、家が崩れ落ち、
その下敷となり少しでも明るい方にと死にもの狂いで、
這い出して、皆さんの行く方について行くが、自分は家
の下敷になった時に、足の付け根に木片が抜かって、皆
さんのように走ることが出来ず、とても悲しかったと家
で養生している時に話してくれました。

娘の安否を気遣っておりましたが、三菱関係の負傷者
は諫早方面に運ばれたとのことだったので、翌十日市立
高女の先生の奥さん達が、長崎市内には、とても入るこ
とが出来ないので、諫早の方を探しましょうと行って諫
早の収容先を探すことになりましたが、汽車に乗れない
ため、二里の道を歩いて、一日がかりで各収容所を探し
廻りました。夕暮れになってきたので、奥さんはとても
汽車には乗れそうにないので歩いて帰りましょうと言わ
れましたが、私はとても歩くことが出来ないので、駅長

さんに頼んでみますといってお別れし、お願いいたしま
したところ、運よく汽車に乗ることが出来まして自宅に
帰ったのです。帰りましたら姪達が来ておりまして、娘
の正枝が見つかったそうだから父達は長崎に迎へに行っ
たこのことで、私は晩には連れて来てくれるものと思っ
ていましたが、とうとう、帰って来ませんでした。夜、
布団を出そうとしたら、大きな蛇がとぐろを巻いていた
ので、本当に吃驚いたしました。私は蛇の夢を見るとあ
まりよくないのに、本物をみたのだから、不吉な予感が
して心配でならなかったそうです。その当時は、途中下
車をすれば中々次の汽車に乗れない時代でしたが、久山
の三溝と云う方が娘さんを探しに行っていた時に、たま
たま、うちの娘から頼まれたと行って伝言があったそう
です。兄夫婦は、私の帰るのを待ちきれず長崎に探しに
行くが、見つからずその日は引返して来ました。十一日
朝早く道ノ尾まで汽車で行き、歩いて浦上付近まで行っ
たところで、浴衣一枚で大きな石に茫然として座ってい
た四、五十才位の女性がいたので、声をかけているうち
に、兄はさっさと段々畑の方に進んでいくので、急いで

その後を追って行きかけますと、近くで、

「お母さん」

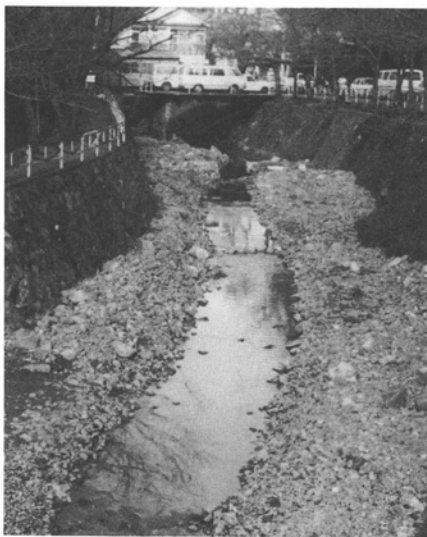
と呼ばれた。本当に奇蹟的に娘を探し当てることが出来ました。

そこは、段々畑で露よけのむしろがしいてあって、五人六人ずつ集っておられました。中々仮收容所から出してくれませんでしたので、色々とお願ひしてやっと大病院の庭に運び出してくれましたが、帰る汽車がなく、現在交渉中とのことでした。係の方が家に帰ってもよいとの事でしたので、少しでも早く喜々津の中村病院まで連れていかねければと兄が、片淵の親類まで娘を連れて行き、食事を与えて元気をつけさせてからリヤカーを借りて、それに娘を乗せて夜道をそろそろ歩きますが車の振動で傷口が痛むのか悲鳴を上げますので、中々進まずとうとう十二日朝九時中村病院につきました。翌日から毎日担架で傷口の治療をしに通院しておりましたが、初めのうちは元気でしたが、段々と衰弱がひどくなり、髪の毛は抜け丸坊主の状態で硝子の破片が顔から出るなどして、九月二日朝方死亡しました。本当に可哀想な最期で

したと涙ぐみながら語ってくれました。

この娘は、私が結婚後八年もして子供が出来なかつたので長崎市今魚町の清水博士の手術を受けて出来た一人娘だっただけに残念でならないといっていました。現在はその娘さんのかわりに兄の孫を養女に迎え、お孫さんまでお出来になったそうです。

お幸せそうな山本さんを見て、心からいつまでもお元気で過ごさしにされるよう、祈念しながらお別れしました。



ここに背びれをやいた鯉が生きていた。
(184頁参照)

支部紹介の部

立山支部の素顔

立山支部は長崎市の中心地区に近いところに位置しています。友の会結成後、昭和四十二年十一月十九日磯田泰子宅にて結成準備会を町内各位に呼びかけ開催したが、事情あつて結成がおくれ、昭和四十八年十月十二日立山町ユースホステルにて結成総会を開き、参集者一〇二名初代支部長に磯田金蔵氏を選任し現在に至っています。支部としての仕事は、友の会、動員学徒の会員の各種世話、手帳所持者又自治会単位の家族調査を元に会員募集を手がけ、昭和四十九年第一回支部総会時は会員二三〇名が入会しています。第一回から三回までは立山会館で毎年本部から役員を派遣してもらい、各種手当の受給、原爆手帳申請の方法等指導しています。五十二年度総会の折、全会員に支部費より記念品を贈呈（国会入り風呂敷）会員の相談の都度、原爆病院入院の世話、又昭和五十五年八月三十日原爆特養ホーム「かめだけ」に見学希望者八十五名をバス二台にて案内、支部還元金を使用の際は役員会の了解を取って親睦会を兼ねて挙行慰問に行

く、会員の立場にたつて、あらゆる仕事をすることに努力しています。本部あつて支部があることを強調し、友の会の存在を知らせています。

現在の役員

支部長 磯田 金蔵

副支部長 田川 貞利

嘉松半四郎

事務兼
会計 磯田 泰子

役員 一四名

会員数 二一七名

戸町支部の素顔

わが戸町支部は、昭和四十三年六月二十三日戸町公民館において結成された。



その時、たまたま参議院選挙の行なわれていたときでしたので、久保勘一参議院議員の選挙応援をされていた県連幹事長小川雄一郎氏が、俺にも挨拶をさせてくれと飛び込んでこられた。本部からは深堀会長外二名の役員が出席し、戸町地区の百名程度の会員が出席して盛大に行なわれた。初代支部長には、渡辺文子さんが就任されたこの地区は、長崎市の中心部より離れていた為に、まとめるのに苦労しました。しかしながら渡辺さんを中心とした婦人会の方々の熱心なる会の運営のために、なんとか面目を保っていた。

不幸にも渡辺文子さんの病気のため、現在の田中治太郎が二代目の支部長として就任しました。なお、支部には二四〇世帯が加盟しており、現在鋭意拡大中のところ
です。

現在の役員

支部長 田中 治太郎
理事 佐藤太郎兵衛

武次 甚之助

上戸 有一

理事 池井 チノ

水口 タエ

福田 久子

元村 ミツ子

川平支部の素顔

昭和四十五年九月頃から深堀会長が川平町に転居したため附近住民が、会長宅に押しかけ被爆者手帳交付は、諸手当の受給、原爆病院の入院等の世話をして貰っていた、このために、お世話になった家庭五十世帯程度が、川平支部を作ったのですが、はじめは、深堀会長が支部長を兼任していたのである。

昭和四十八年九月頃になって河野潔氏が、つぎの支部長となられて、一応の恰好がいたのでした。その後河野支部長の病気により、吉本敏雄さんが昭和五十二年頃から引継がれ、昭和五十六年吉本さん死亡により、現在の多以良ナミさんがあとを引継がれました。

支部内は、六十世帯の会員が加入しており、立山荘等

で総会を行っております。

小榊支部(小瀬戸)の素顔

今日もよく晴れた青空が美しい。支部の中心地小瀬戸町「バス停」より見る小ヶ倉、土井首両町にまたがる八郎航運峰、右前方には三菱香焼造船一〇〇万ドック、それにそびえる二基の巨大クレンも一入^{しお}壯観である。

又長崎港へ出入する大小さまざまな船舶も眼を楽しませる一風景である。この様な環境下にある。私等の支部は長崎港外にあると言った方がわかりやすいと思う。陸路では飽の浦立神経由なるも十数年前迄は陸の孤島とも呼ばれた事もあり陸続きであるも、歩行と汽船のみでの交通便であったが、木鉢町山頂に当時、諸谷市長時代、市のゴミ焼却場を作る事となりその一環として産業道路として、道路が整備され、ようやく車、及「バス」が通う様になり五十五年木鉢トンネル開通、それに伴う道路も神の島迄立派に整備され「バス」の回数も追加され時間も短縮、交通便がぐっとよくなった事は、いなめない

事実である。小榊支部とは字のとおり、小瀬戸の④木鉢町の⑤、神の島の神⑥その頭文字を組合せ「小榊」と呼ばれている。細長い地区で主として生活の基盤はサラリーマンの町で、三菱造船、公務員、中小企業、漁業、その他となっている。町名及び戸数人名数左記に示す。

記

小瀬戸町 全戸数三四六

人員数一、三七六

会員戸数一〇五(五十九年十月)

となつていても、被爆者戸数は約半分強で管理手当を貰っている者を会員戸数としており、一戸数に三人手当を貰っているとしても、一戸数としており、被爆者数は「三六〇」名近くである。以上の様ですが他地区には色々な事情もあり又範囲が広く、まだ手がけていない現状である。

支部の発足

昭和四十二年六月、深堀勝一氏を会長とする手帳友の会が発足した事により、現支部役員「中村キクヨ」が深堀会長の被爆者援護に対する並々ならぬその誠意と熱情

に深く感動、よしやるぞと確い決意の許、同じ志を持つ現役員「宮崎花江」と共に会員獲得に寝食を忘れ全力を傾注「二十数名」の会員の賛同を得「四十三年十月一日」小榊役場にて第一回の総会を深堀会長出席の許開催致しました。その時出席された全員が、口ぐせに良かった良かったの連発で特に同席された、故堀忠氏が友の会の運動の重大さをつくづく感銘、我が身が病身にも拘わらず一緒に運動に参加する事を確約、中村、堀三人の功績は実に偉大と言う外はない。改めて三人に感謝の意を注ぎ度い。

歴代支部長

第一代 中村キクヨ

昭和四十三年十月〜四十四年十二月迄

迄

二代 倣堀 忠

昭和四十五年一月〜四十六年一月迄

(46、1死亡)

三代 倣猪股 常吉

昭和四十六年二月〜五十四年五月迄

四代 山下 直吉

昭和五十四年六月〜現在に至る

(54、5死亡)

現在の役員

支部長 山下 直吉

常任理事 中村キクヨ

会計 支部長兼任

組長 1 宮崎ハナエ

2 森 イクヨ

3 矢野 静香

4 松尾 等

5 西島ミツエ

6 高見 花江

7 中村キクヨ

8 江口ユキ江

9 岩崎 好子

10 川崎 敏子

行事

年一回総会を開く(本部役員数名出席)会員六〇%〜七

○%出席

①会計報告 ②会員の増減報告 ③本部役員への質疑
④懇親会を含む、お菓子、飲物、寄付によるお酒(会の
の終り頃)出す。 ※お菓子(二〇〇円)程度出席
されない会員にも役員より配る。
会員へ連絡事項

①急速の連絡事項は、其の内容と簡明にコピーし各組
長役員に連絡、会員に伝達する。

結び

とり止めない記事となりましたが、少ない会員ではあ
るが、お互健康の挨拶を忘れる事なく、仲良く手を握
り合つて行く事を本旨とする。

三重支部の素顔

わが三重支部は、昭和四十二年六月十八日長崎県被爆
者手帳友の会発足に呼応して、昭和四十三年十月六日、
当時西彼杵郡三重村で三重支部として結成されたもので
初代支部長は故野本荒松氏でした。

その目的は、被爆者の相互扶助と親睦をはかり明るい
生活を送ることと本部が行う被爆者援護法制定の推進に
協力することで、後に昭和四十八年四月一日長崎市に編
入されて、現在では、長崎市三重支部と改称されている。
事務所は支部会則に基いて支部長宅に置かれ支部役員は
後で述べることとし会員は昭和五十九年四月一日現在五
百十一人である、当支部は、長崎市の西北に位置し原爆
中心地から六キロメートル乃至十三キロメートルの所に
点在する、鳴見、多以良、畝刈、京泊、三京、松崎、三
重、畦、檉山、三重田の十ヶ町でその中鳴見町(白髪、
詰ノ内、遠之木場)は昭和五十一年九月十八日被爆地域
に指定されている。

昭和二十年八月、当時の三重村は世帯数八〇九戸、人
口四、七五二人の半農、半漁の地帯であったが戦局の悪
化に併い都市部からの疎開者凡そ一五〇世帯六七〇人が
親戚、友人、知人を頼つて共に生活したのである。

昭和二十年八月九日昼前閃光と大音響が長崎の空に轟
き、それから数刻経つて真黒い煙が上り三重地区では、
大爆風に因つて雨戸が吹き飛び散る等、又戸外で遊んで

いた人、田畑に出て仕事をしていた人は、熱線と熱風を感受したと言う人が大半で中には熱線に因って顔を火傷しとつさに畑の胡瓜を採ってその汁で応急手当をして家に帰った人もいたのである。

爆弾落下後数時間を経て、黒崎、神ノ浦、雪ノ浦、瀬戸方面や三重に避難して来る負傷者が三々五々と入り三重で開業していた賀来医院は、たちまち救護所となり被災者の救護にあたったものである。何れの人も血を流し火傷をし水を欲しがる人でその火傷のむごさは悲惨なものであった。現在でも会員の松崎昇治さんは無縁仏六体を祭っている。

現在の役員

支部長 川原新三郎

副支部長 山崎 幸市

原口 健一

事務局長
兼会計

吉長 福市

監事 松崎 健市

坂口 慶作

理事 楠本 伝七

本川 勝芳

鰐口 満二

地区幹事
林 鶴吉

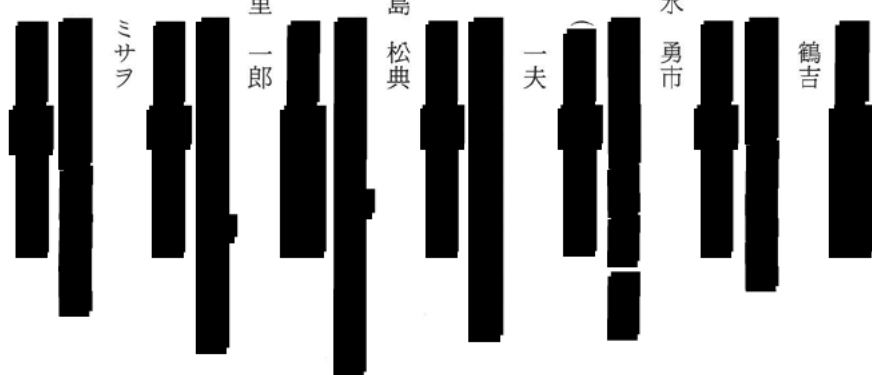
理事
森 一夫

清水 勇市

三島 松典

古里 一郎

地区幹事
辻 ミサヲ



地区幹事
川添 ナツ

木室 徳治


坂中 スグ

川口 鶴松

西中 成子

川際 勝治

小方 ナカ



平山支部の素顔

私達の平山支部は、野母半島の中心部八郎岳の麓小高な平地で、浦上原爆中心地を東北に直線で眺め約八・五キロの所に位置し、昔は農業一本でしたが、現在、市街化宅地造成が進められ、昭和二十年当時戸数十倍で一干戸を越えると言う予定がなされております。

当時被爆者手帳所持者約四百名でした。現在支部で被爆者手帳所持者名簿で調査中です。十数年前より被爆者手帳友の会の会員として、五十名ほど土井首地区支部に属していましたが時折りとぎれ、とぎれと相至りました。そこで青木氏のご尽力は一きわ目立ち会員集めに全力をつくされ百五十名を越える会員を集め、昭和五十七年十二月七日友の会平山支部として発足されました。

そして一年目昭和五十八年九月一日付にて役員改選を行い、平山支部長小川外役員若干名を置き現在に至って

おります。さて、これからのわが支部は、被爆者手帳友の会本部の運動方針にそって会員の親睦を計りながら健康管理、平和運動、その他会員の良き話し相手として、前進ある親睦団体であるように努力します。

現在の役員

支部長 小川 巽
事務局長 青木 信子
会計 爲野 タマ
連絡員 田口佳枝子
梅原よし子

監査 上尾 律子
峰 スエノ

西城山支部の素顔

私達の西城山支部は、終戦後に開けた七つの町に股がっており、人口も被爆者健康手帳所持者の数も残念乍ら解っていない現状です。西城山支部は、昭和五十八年八月に発足し、初代支部長は長洲三代二氏でした。西城山

支部は被爆者の親睦と団結を目的として被爆者健康手帳の申請事務、健康管理手当等、諸手当の受給のお世話等をして居ります。西城山支部では会員の皆さんから出された意見又要望等を聞き乍ら支部役員研修会を年一回開いて居ります。今年には被爆二世、三世にも健康手帳の交付をの話題が出ました。此の件は数年前から、本部の運動方針の中で進められて居る事を報告した。また三役の話し合いも必要に応じて数回開き不明の点は本部事務局とも相談しながら指導を受けております。以前から会員の中で旅行希望が出て居たので今年七月熊本方面に二泊三日の旅行を思い立ちました。雨の多い季節でもあり、参加人員数の都合もあり実現出来なかつたので後日計画を立て直す事にしました。

老令化する被爆者同志の幅広いふれあいの場を考えております。

現在の役員

支部長 犬山 春吉

副支部長 芦塚 春男
 兼 事務局長
 兼 会計



監査 池田八太郎
 班長 久松 正行
 久松 君子
 佐野 栄子
 久松エイ子
 田川 妙子
 長浦 初枝



現在の会員数一二五名

西町支部の素顔

我が西町支部は、長崎市の西北部にあり昭和の初め迄は西彼杵郡西浦上村の一部で農業を主とした所でしたが、長崎市の拡大と共に市に合併し市街地となつてしまいました。西町地区は爆心地に近い関係上、昔からの住民は殆んど犠牲者となつて仕舞い生残つた人も後遺症に苦しんでいる実情です。被爆者友の会結成以来本部に於て指導奉仕をされていましたが、昭和四十八年十二月西町支部を結成致して今日に至りました。

当支部は本部の指示に従い会員被爆者の親睦と団結を目的として会員の被爆者手帳の交付申請事務、健康管理手当の受給の御世話をして居ります。高令者が多いのと転出者があり結成当時より減員しまして現在会員数は百十三名になりました。

現在の役員

支部長 上園 好成

副支部長 杉本 房松

理事 下谷富太郎

深堀 龍三

班長 松川 英輝

古賀支部の素顔

わが古賀地区は、長崎市の東のはずれに位置し古くから植木の産地として有名なところです。古賀地区には被爆者が五百名近く居住しているものと思われます。

そこで友の会本部の要請で古賀支部設立のために当地区で被爆者の世話をなさっていた、動員学徒の会の副会長である山口一之先生を中心として、組織づくりが行なわれたのでした。発会式は、昭和四十三年七月十四日福瑞寺において行なわれました。当日は百名程度の出席者があり被爆者の団結と親睦をモットーとして被爆者援護法を作ろうと決議した。なお初代支部長に山口一之氏を選任した。その後古賀支部は、被爆者手帳の交付促進諸手当の受給等について、身近かな世話を身上として被爆者の相談相手として会員のお世話をいたしております。

現在の支部役員

支部長 山口 一之

副支部長 本田 吉雄

本田久間太

會計 川上フミエ
監事 赤瀬 恒彦

理事 川口 信子
田口 正儀

松田仙三郎
坂本 満

油木支部の素顔

わが油木町は長崎市の北西部で岩屋山のふもと谷間の町でございます。被爆当時、油木町の戸数七二戸、人口二七八名、緑と田畑に囲まれた静かで豊かな町でした。

昭和二十年八月九日十一時二分一発の原子爆弾により我が町は廃虚の町となり、多くの尊い人命が失われたのであります。

爆心地より一キロメートル、被害は大きく一家全滅の世帯が多くあった。また生残った者も、ヤケド、怪我等で医療施設はなく自分自身が治療したのであります。

被爆三十九年過ぎた我が町は宅地開発が進み、現在は

戸数一、二〇〇戸、人口四、二〇〇人被爆当時の十四倍と大きく発展しております。

被爆者手帳友の会油木支部は地元、生残り数人と転入者によって構成されております。現在被爆者は高令者が多く健康の保持には、お互い気を配り乍ら現在へ至っております。被爆者は訴える二度と戦争を繰り返してはいけません。核兵器を使用してはいけません。最近の報道によれば依然として核兵器の実験が行なわれ、人類は危険に直面している、私達被爆者はあの悲惨な原爆の体験を生かし国内はもとより全世界が真の平和確立の輪を広げなければならぬ。

- イ、支部結成の時期 昭和五十年四月結成
- ロ、事務所の所在地 長崎市油木町十四番
- ハ、支部役員の氏名

支部長 大平 力男

副支部長 里 時助

辻本 久義

ニ、会員数 二一七名（一一一世帯）

ホ、特記される支部の事業

被爆敬老者八〇才以上に対して記念品を贈呈している。

飽の浦支部の素顔

私達の飽の浦支部は、三菱重工業の発祥の地である三菱長崎造船所に隣接して、鶴のみなと、長崎港を眼下に眺る景勝の地にあります。

昭和四十三年七月被爆者援護運動を押し進めるため、支部設立の趣旨に対岸地区の被爆者多数のご賛同を得て、中島松作氏、福山 忠氏の格段のご尽力により発足致しました。

初代支部長は、中島松作氏でした。飽の浦支部は、相互の融和親睦を計ると共に、団結を目的としています。

現在被爆者手帳所持者で一戸一人の割合にして会員は三百九十六名で、長崎市飽の浦町岩瀬道町塩浜町秋月町入船町大谷町水の浦町に居住しています。

構成は十人又は十五人単位の班にして、班長を置き支部の運営に参画し、会員との連絡に当たっています。総会

を公民館又は会の事務局を置いてある支部長宅にて年一回開催し、役員会は支部長が必要と認めた時に開き、地区内に掲示板を常置し、報告事項などを常時掲示することにして、緊急の場合はコピーして回覧板として伝達しています。そして未加入者の勧誘を計り、被爆者健康手帳交付申請手続、会員の健康管理手当並に諸手当の受給等のお世話を致しています。

毎年八月九日の原爆慰霊祭には、沢山の会員が参列し、原爆殉難者のめい福をお祈りしています。

最近の各国の間のなりゆきは前途を憂慮すべき状態なので、本部の提唱する核兵器廃絶などの世界平和運動にも積極的に参加協力しています。

現在の役員

支部長 福山 忠

副支部長 藤本 栄

会 計 藤野 平造

監 査 石橋 久義

監 査 宮原須磨子



矢上支部の素顔

私達の矢上支部は、長崎市の東部で国道三十四号線を中心に人口は約一万人で、被爆者手帳所持者は四百名おります。矢上支部は昭和四十三年七月友の会の発足と同時に発会し、当時は会員も百余名でした。

初代支部長は、野口惣市氏で十四年の長い間御世話されましたが、高令のため五十七年より西川徳馬支部長になりました。昭和五十一年に現川、中尾が被爆地域の認定を受け金原支部長で友の会を発足されました。矢上、八部落中五部落でしたが、五十八年町の被爆者も六十名加入され、親睦と団結を目的として会員の手帳申請及び健康管理の受給のお世話等いたし現在に至っております。

五十五年には念願の原爆殉難者慰霊塔も建立され、八月九日には町民あげて殉難者のめい福を祈つて居ります。最近国際情勢の緊迫を心配して平和運動にも力を注いでおります。

現在の役員

支部長 西川 徳馬

副支部長 本田 和八

上島 富太

會計 鍵山 芳子

監 査 平尾 昌翔

松尾シズエ

会員数 三百十九名

現川支部の素顔

私達の支部は西彼杵郡矢上村現川名で山又山に囲まれた一部落で人口は僅か五百人程です。被爆者手帳所持者は二百五十名です。

現川支部は矢上支部より昭和五十年五月独立したので

す。現川支部は長崎市に最短距離にありながら被爆地に指定されていなかったのです。

金原会長は昭和四十八年被爆者手帳友の会の支部代表者大会に初めて参加して、県下各地から多数の代表者が参加されていることに驚き、友の会の組織力の強大さを初めて知ることが出来ました。

昭和四十九年四月長崎市長から近接被害調査の調査員の委託を受け、調査の結果放射能の影響と思われる白血病にかかって死亡した者が多数おられましたので、是非被爆地是正の運動をやらねばと決意したのでした。

昭和五十年二月には本部の深堀会長のご尽力により、初村参議院議員が現川、中尾地区を視察に来られました。三月には中村衆議院議員が来られ協力を約束されました。また六月には、参議院調査団が来られる等、被爆地是正運動に明けられました。

同年十二月二十八日には被爆地指定の朗報が深堀会長から入り、部落挙げて喜びました。これも、会員の一致団結と深堀会長始め長崎県選出の衆参両議員の先生方のお力添えによるものと会員一同感謝いたしております。

現在の役員

支部長 金原 勇

副支部長 山下 カル

事務局長 松本 涼

兼会計 野口 知守

監査 野口 知守

坂本支部の素顔

私共の坂本支部は市の北部に位し、東は金比羅山の高台で麓に向って長大医学部の校舎や、附属病院の近代的な病棟が建ち並び、降るに従い一般住宅や商店が増加し、略降り切ったあたりに片足鳥居で有名な山王神社で境内の楠の巨木が数本、この巨木は原爆に激しく傷められ一時は気使われたが、現在では見事に立ち直り旺盛な生活力を謳っている。大楠の下では毎年町を挙げて慰霊祭が厳かに催され、他県からの参拝者も年と共に増加している。被爆者手帳所持者一八〇名、町役員八名、平常会員の

知己の手帳、特典の申請や健康維持、相互親睦等計っております。又会員死亡の際は御仏前に現在支部名を以つてお供え（金貳千円）を差し上げて居ります。

役員

初代 笹村 球吾 支部設置昭和四十五年
現長 豊田 日丸 坂本支部所在地
副支部長 迫頭 熊吉

月村 義雄

兼務會計 迫頭 熊吉

監査 平山 ツルエ

理事 松尾 登美枝

真崎 美津子

大塩 ミヨシ

役員 田川 ルカ

坂本支部内慰霊碑場所

長崎市江手町

長崎市坂本町道上

昭和二十六年建立

昭和二十三年建立

長崎市坂本町医学部内 昭和五十四年建立

長崎市坂本町山王神社内 昭和二十七年建立

長崎市岩川町山王公園内 昭和三十年建立

西山支部の素顔

私達の西山支部は長崎市西山町三丁目自治会内にあります。自治会は世帯数約五八〇戸人口約二、〇〇〇名位です。以前は農業専業者や馬車運搬業者も多かったそうです。水道関係の建設で道路も広くなり工事関係者が居付いて順次住家も多くなり現在給料生活者が多い様です。当町には古い字名で「よけば」漢字「休場」が残っています。現在県営バスの「よけば停留所」町内の子供公園に「よけば公園」があり又町内の老人会に「よけば第一、第二老人会」があります。昔慶応三年三月西暦一八六七年に浦上に、西山口、日見峠、茂木口の四ヶ所に関所を設け長崎出入りの旅者を検したそうです。長崎守備に大村藩士が当って立山御役所も預かっていたそうです。西山口の関所は現在の西山町三丁目にあったと考え

られます。関所を通る前後に休憩した名残ではないかと思ひます。同関所を通り一方は長与に出て船便を利用、大村灣を渡り、大村等夫々に旅し、又一方木場峠を通り矢上に出て矢上街道に合流し夫々旅したと思ひます。

昔西山口を通る街道は立山方面から諏訪神社前を通り上西山、西山一、二、三丁目の上手の道を通つたと思ひます。一、二、三丁目に夫々大師堂が安置してあり旅人の道中安全を祈願した物と思ひます。その石碑も残つており、今でも町内自治会で毎年四月には祭礼してゐます。

当町内には原爆手帳所持者約二五〇名位、世帯数で約一五〇戸居住している様です。

当支部は昭和五十一年七月五日に会員数二十七名で結成しました。一時は三十五名となりましたが移転出又死亡等で減員しております。

会員の死亡の際には香典二、〇〇〇円を贈呈し又準会員「会員の両親」「連合夫か妻」にも同額を贈呈して又葬式には多数参列する様に連絡しております。

現在まで懇談会等もしていません。開催したいとは

思つていましたが、この際近々懇談会を開催し会計報告「還付金」その他懇談をする計画をしております。

現在の役員

支部長 中川 亀雄 「八〇才」

副支部長 池田 茂保 「七五才」

会員数 二十五名

稲佐支部の素顔

稲佐支部の発生は学徒動員の遺族会を母体として、片山久八氏が約三〇名位の会員を主にして初めたものです。

その後昭和四十三年頃私が自治会長をしていた時に稲佐連合自治会十ヶ町の各会長を通じて被爆者の会員を募集をした所一挙に一三〇名に増加したものでした。その後地道の努力及会員の世話を通して順次増加して現在約

二百二十名に増加しています。

最近各町の老人会長を支部理事に委嘱して各町の細部に浸透して急激に増えております。年に一回は旅行し、又全会員に些少ながら記念品を贈る様にしております。

又死亡の場合には香典二千元を供えて葬祭料請求の用紙を持って行き、その説明をすることにしており遺族に大変喜ばれております。その為に会費を百円値上げしております。最近会員の頭打ち等を言われておりますが会員の面倒をよく見ることによって会員が会員を紹介することによって増加している様です。尚十一ヶ町の老人会の例会の場合には出向いて話しをしています。

現在の役員

支部長 正田 鶴雄

副支部長 右田 悟

乙藤 信之

支部理事 岩本 秋吉

藤井 元

水谷 勝正

伊東伊之吉

支部理事 狩野 正雄

岡崎 儀一

吉岡 勘一

片山茂久雄

平山 捨蔵

原 政見

藁戸 トイ

三原支部の素顔

私達の三原支部は、昭和五十二年に発足、長崎市の北部に位置し、高台にある本原教会の周囲に約六千八百名の人口を擁している。うち被爆者手帳所持者は、宅地造成に伴う人口増加により、若干の増が見込まれるが、現在一七〇名と推定される。しかし被爆者団体（例えば長崎県被爆者手帳友の会）の組織、或いは運動方針、そして、国会等に対する陳情書の内容をなるべく知って貰う様、未加入者に対しても啓蒙の必要性を感じ、PRに努めている。ちなみに、三原支部は本部の意のあるとこ

ろを休し、被爆者援護法の推進活動の中にあつて、被爆者手帳交付申請書（今日長崎県外居住者）の事務手続き、健康管理についての相談事業等について、相互の親睦と理解を深め、病人の見舞、不幸にして亡くなられた方の弔慰金によつて、その家族との調和を計つていきます。

又、昭和五十九年度の総会に於て、支部旗を作らうと言ふ意見が盛りあがり、専門家に依頼し、その実現に努力しております。

一方被爆された七〇才以上の方々をお招きして、当時の体談やら、原爆が人類に対して、如何に無益なものであり、悲惨なものであるかを世界に、そして第二、三世に語り伝えるため、私達はどうすべきかを考え、初めて計画いたしております。そして、しいたけを喰べ、癌を追放する会に積極的に加入して、自己の健康管理に努める様話し合い、三原支部の今後の道しるべとして、昨今です。

現在の役員

前支部長 片岡 弥吉
現支部長 杉本 義光

副支部長 岩崎 繁樹

中尾 スミ子

会 計 松尾 竹吉

監 査 片岡 良一

相 談 役 片岡 弥吉

理 事 十一名

なお前述した様に、会員が増加する予定であるが、現在の会員数は一〇六名である。

追つて、前支部長片岡弥吉氏は、民生委員に奉職されること三十年、その人望厚く、三原支部原爆手帳友の会の結成と運営に尽力された功績は大きく、退任をおしまれている。

氏の今後のご健康とご多幸を祈ること切である。

式見支部の素顔

私達の式見支部は、昭和四十三年六月十六日、式見公民館において、はじめて友の会本部から、深堀会長ら会の役員数名が出席されて発足しました。はじめのうちは

友の会の運動のあり方等を聞く事だけでした。支部長をはじめ役員もきまらず、そのままの状態でした。続いて昭和四十四年六月七日も式見公民館で友の会の集会がありました。集会が、五〇名程度のものでした。

この様な事を本部の役員におんぶされておりましたが、昭和四十七年頃になって、磯宅雄さんを中心として、式見の有志一同が起ち上って、式見支部を結成することとなったわけでした。

会場の浄満寺には、三百人ばかり会員が集まって、はじめ盛大な結成大会を開いたわけでした。そして支部長に磯宅雄さんが就任し、事務局長に末次さんがなることとなり、活動を開始したのでした。一番残念なことは被爆地区指定の時、式見の半分だけが指定され、あとの半分が残ったことでした。その後、被爆地区の運動をしておりますがなかなかうまくいきません。

現在の役員

支部長 磯 宅雄
副支部長 岩尾 貞雄
会計担当 早川 里一

繁松久左工門

川辺 松見

寺坂 ナセ

野田 禎一

大村不二夫

森 高市

津浪 往雄

三根 七郎

飯田 良男

相川 留八

福吉 勲

山下 秋夫

立木 倉市

川辺 良長

山里支部の素顔

本会は長崎県動員学徒犠牲者の会を母体として、それに十年おかれて被爆者手帳友の会が発足されて、はや三

十年の歳月を経過致しました。その間深堀会長は医療、諸手当の増額及所得制限の緩和等々、私共被爆者の為に先々を見通して政府陳情に体を駆使して何回も上京されております。今後ますます健康であつて貰い度いものです。

会長の先見の明があられる事はほとほと感心させられます。何か催し事をする場合でも、今迄数十回行事が行なわれているが私の記憶では一度丈雨が降つた覚えがありません。これを見ても会長の運と計画性の良さが、この会がこれまでに発展したゆえんであると思ひます。

山里支部は、本原町（一部）平和町（一部）上野町（東一部）上野町（西一部）橋口町（一部）大橋町（一部）の六自治会にわたつて組織されており当時の会員は一二名名だったのが現在九一名と減少してあります。その理由は他県及他町に転出、或は死亡によるものであります。

私は浦上地区にどの位被爆者手帳を持っている人が居られるかを調べて見ました。先づ山里校区、高尾校区、三原校区の各自治会に、被爆者手帳を持っている有無を調べる趣意書の回覧を各自治会長にお願いした所、半年

後に私の手元に届いた所によると手帳を持った被爆者数は七百八十七名でした。しかし被爆者手帳友の会に入会していない人も幾らかおられる様です。

山里支部には現在九十一名の会員がおられ、その内より連絡員十一名で会費の徴収及各連絡事項をやつて貰つており、受け持ち員数の年一回の会費徴収時手数料として若干の手当を差し上げております。これが山里支部の実態であります。

被爆者健康教室に付いて

被爆者健康教室に於ては「がん」の予防に関し「しいたけ」を会長は盛んに喰べなさいと言われ、事実大分県農協より安価で仕入れて会員をつのり、その会員達に分けておられます。又老人ホーム「かめだけ」でも常食する様になつてから一人も死亡者が無いとの事、又最近では年老いてからの骨折は死病となる率が高いと言う事で「めざし」や「しらす干し」を食べる様にと盛んに推唱されておられます。

中尾支部の素顔

わが中尾支部は、はじめは矢上支部の一員としてその後昭和五十年になって現川支部となり独立したのが、昭和五十五年七月十二日でした。

発会式当日は一三〇名の会員が集つてにぎにぎしく食事、酒をとりながら、これからの中尾支部の前途を祝つたのでした。これまで矢上支部、現川支部、と宿かりした年月が長かったので部落民の喜びも又ひとしおなものがあつたわけでした。当中尾地区は友の会深堀会長の力を借りて僅か一年足らずの運動で、みなし被爆地区に指定された関係で、部落民の友の会に対する感謝の気持ちも友の会に対する期待も又多いのである。

初代支部長に動員学徒の会員でもある船山栄四郎が就任されました。

現在の役員

支部長 船山栄四郎

副支部長 城戸 早一

竹之久保支部の素顔

竹之久保支部は爆心地から、八〇〇米から一、三〇〇米の地点であつたため、地区内住民の大多数が爆死したのであり、生き残つた人も近距離被爆者のため放射能の後遺症にさいなまれて、かろうじて生き残つた人々でした。竹之久保支部は友の会本部の要請で、動員学徒の会の監事をつとめられていた、竹之久保幼稚園々長の高橋みなさんが支部作りに奔走されたのでした。

発会式は、昭和四十二年八月二十九日竹ノ久保公民館において開かれ五十名程の人が参加されました。友の会には多数の支部が現在ありますが、竹ノ久保支部の発会は二番目か三番目だつたと思います。それ程までに高橋みなさんの熱意が支部創立に向わせたのでした。竹ノ久保支部には近距離被爆者が多かつたため、保健手当の成立でさらにはずみがついたのでした。しかし乍ら現在の認定患者の制度が厳しくなかなか認定がむずかしいので困つております。現在百世帯程度の会員がおりますので、これを倍増したいと思つております。初代支部長の高橋

みなさんが亡くなられて現在は平野さんが支部長をして
おります。

現在の役員

支部長 平野 英男

錢座支部の素顔

昭和四十三年に錢座支部は発会しました。当地区は爆
心地から一、二〇〇米から一、六〇〇米の地区であるため、
近距離被爆者が多数居住しており、又原爆の遺族も地区
住民は他の地区と較べて多数生き残っております。その
為にキメ細かい対策が必要であるので役員の水江オケ、
田中ヒデ、森下咲さん三人が地区内被爆者の家庭訪問を
行ない皆様の御世話をさせて頂いている現状です。

なかでも水江オケ、田中ヒデさんは動員学徒の役員で
もあるので三十年來この仕事に打込んでおられます。幸
いにも昭和四十三年特別措置法が制定され漸次法改正が
あり、被爆者に対する施策も充実されて来ておりますが、
まだまだ不十分の点があります。

その為に今後は近距離被爆者に対する援護強化、二世
三世に対する手帳交付のため頑張りたいと思っております。
なお初代支部長は林光之助氏でありましたが、現在
は水江勇氏となっております。

現在の役員

支部長 水江 勇
役員 田中 ヒデ

水江 オケ
森下 咲

城山支部の素顔

わが城山地区は爆心地から三〇〇米から七〇〇米まで
の地区でして原爆により多数の爆死者を出した所で有名
な所です。そのようなことでしたので被爆者運動の原点
とも言わべきところで杉本亀吉氏、財津勝一氏等を生み
出したところでもあるわけです。

発会式は昭和四十二年七月二十一日城山公民館で開か
れました。本部からは深堀会長外二名の役員が出席され

友の会設立の意義、規約等、原爆被爆の全体に亘る説明が行なわれた。四〇名程度の人が出席されたが、原爆で夫を亡くされた井手ユキさんが被爆当時の生活の苦しきや、悲しさを詳細に語っておられました。又町内会の長老、松竹さんや財津さんの顔もみえていた。初代支部長として中島卯吉さんが選ばれました。その後中島卯吉さんの死後松尾繁次があとを引きつがれました。

現在の役員

支部長 松尾 繁次
事務局並 中島 春乃
に會計
理事 平田ヒツ子

大崎支部の素顔(茂木)

私達大崎町の友の会員は、昭和五十年、当時茂木地区の連合支部長でございました故姉川氏より、原爆友の会の内容について親しく御説明を頂き当時は会員二十名で発足をいたしました。それ以来、今日まで常に深堀会長さん始め本部役員の皆様には大変なお力ぞえをいただい

ております。特に原爆手帳或いは、健康管理手当支給の件につきましては、格別の御協力をいただき今日では会員も二十七名と増えてまいりました。会員と共にあつく御礼を申し上げます。最後に今日の大崎町民といたしましては、長年の願でございます被爆是正区域の拡大を望んでいるわけでございます。今後共に会長さん始め皆様方と力を合わせ進みたいと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

大崎町原爆友の会 山崎政次郎

佐世保支部の素顔

私達の佐世保支部は、当時友の会本部のよびかけにより、動員学徒の会の佐世保市の役員をされておられた市内浜田町の川尻平吉氏の御尽力で発会する運びとなったものである。即ち、昭和四十四年七月二十日に佐世保市常盤町にある公民館において初めて発会の産ぶ声をあげ、その初代支部長に山北喜蔵氏、副支部長にはすでに故人となられた元県議会議員の豊島徳治氏が就任されて発足

したのである。この発会式には五十名程度の人々が参加出席し、これからの被爆者の国家補償を求めて頑張つてゆこうという趣旨の決議を行ったのである。ところで佐世保市は産業基盤の整備が不十分であるため、人口の流出がはげしく且つまた、基地経済的な特殊体質を温存している町である関係上、このような大衆運動は非常に困難を伴い、苦勞が大きいものだと、山北支部長はじめ当時の役員の方々は覚悟していたものである。この山北支部長は、原爆認定患者で且つ、戦傷病者の第四項症の人であるに拘らず、十五年間の長きにわたり被爆者のよき相談相手となって御尽力を頂いたのであるが、公私共御繁忙の疲勞がたたつて昭和五十八年九月に脳血栓で病に倒れられたため、その後を引き継いで現在左記の役員で運営している。

記

第二代支部長 大隈 直之

副支部長 前田 鷹春

會計 三池マツ子

監査 北村トクエ

会員数は約四〇〇名

小野支部の素顔

東に雲仙、北に多良岳、南に金比羅岳ありて之より展開する八百余町歩の長崎県の穀倉地小野平野。人口七千。諫早市に属する。

被爆者手帳所持者一八二名である。本支部は昭和五十年九月に発足、初代支部長は高名麒久雄でした。本支部は被爆者の親睦を計り社会的経済的地位の確立を推進し、且つ未加入者の勧誘を計り会員の被爆者手帳の受給のお世話を致しております。

最近の国際状況は緊迫の度を増し憂慮に堪えないので平和教育にも意をそそいでいます。

現在の役員

支部長 黒田 定平

副支部長 野中 求

会 計 松本 讓

監 査 池松 藤蔵

荒木 貞男

有喜支部の素顔

被爆者手帳所持者 一五〇名

現在の役員

支部長 酒井 秀雄

副支部長 森 忠三

平野 安雄

浦 増雄

中山 定平

酒井 岩樹

田中房一郎

馬場チユノ

現在の会員数 一四五名

本野支部の素顔

一、本野支部結成に至るまでの経緯

長崎県被爆者手帳友の会の発足と殆んど時を同じくして諫早市全域を網羅して、諫早市市立諫早小学校講堂で発会式を挙行し、ここに諫早支部が誕生したのである。当時の幹部は次の通りであった。会長田中松雄氏、副会長高名麒久雄氏と平野清氏、監事蔭山政記氏であった。当時諫早市内の被爆者は、長崎市に次いで第二の位置を占める程の被爆者が居たにかかわらず、発会式に参加したものは二五〇名位に過ぎなかった。爾来被爆者手帳

友の会発足の意義と、その責務を多くの被爆者（手帳を持つている者は勿論申請中の者、その他該当者と考えられる者）に理解と協力を求めながらも遂次本会の主旨に副うべく同志と共に微力乍ら運動を続けて来たのであつたけれども、市全域を一単位としての支部活動は理解と協力には自ら限界があることが課題として取り上げられ、論議の中心となり真に末端まで強力な組織体となるにはどうあつたらよいかといつた組織替えのことで研究された結果、本部の指導もあつて単一支部を旧町村別（各小学校区別）に組織替えすることになつたのである。

(1) 第一次発足当時の組織

諫早支部（市内全域）

- 支部長 田中 松雄
- 副支部長 高名麒久雄
- 平野 清
- 庶務会計 蔭山 政記

(2) 第二次諫早支部を七支部に分割し、それぞれ独立し

た単位支部として組織替えをする。支部と支部長次の通り。

- イ、中央支部 支部長 田中 松雄
 - ロ、本野支部 平野 清
 - ハ、小野支部 高名麒久雄
 - ニ、西諫早支部 山本 春雄
 - ホ、真津山支部 並川 征
 - ヘ、小栗支部 山口富士男
 - ト、有喜支部 酒井 秀雄
- (3) 第三次改革として中央支部の改組の問題が未解決として残っているが近い内にこの問題も円満に解決することになっている、現在中央地区（諫早小、上山小、北諫早小、御館山小、上諫早小）の五校区である。

二、本野支部

(1) 区域—本野小学校区（旧本野村）

区域内に五ヶ町内会があるが、その区域を本野支部とする。

(2) 発足時

諫早支部の発展的改組によって、昭和五十年四月一日から本野支部となる。

(3) 会員数 一〇五名

(4) 特記する事項―農村地区で小ぢんまりしているので万事にまとまりが良く、会員同志の理解と協力がよく得られる。

(5) 役員

支部長 平野 清

副支部長 欠員

理事 前原 賢二

内田 昭二郎

川久保万四郎

池田 三郎

藤山 栄

一ノ瀬 実郎

村井 国喜

小栗支部の素顔

私達の小栗支部は、昭和五十二年前後から支部としての機能を果たしたようでした。詳細については、定かでは

ないが、はじめは、諫早中央支部（支部長田中松雄）に一括的に編入されていたので友の会本部要請により、諫早中央支部があまりにも大きな為に、分割されることにより、私が小栗支部を担当するようになりました。それから会員の身近なお世話をするようになり一三〇世帯にも増加しました。現在は会の役員はおらず、私ひとりで頑張っております。

記

支部長 山口富士男

諫早中央支部の素顔

諫早中央支部と申しますが、はじめは諫早支部と言って諫早市全域を準備範囲としておりました。

昭和四十二年の夏、画家の田中松雄氏が長崎市のコクラーヤで個展を開いたのです。その際、友の会本部に出向いたところ、本部から諫早支部を結成するから責任者をしてくれと依頼があったのです。昭和四十三年四月二十五日諫早公民館において結成大会を開いたのです。

当日は諫早市の各地から三百五十名の人々が詰めかけて活発な意見、要望が続出し市民の熱い期待感の中で発足しました。会場には当選したばかりの野田次三市長をはじめ御歴々の顔がみえておりました。又中島太郎元代議士の姿もありました。役員には田中松雄氏を支部長とし十名近くの人が就任されました。その後諫早市支部は組織活動を展開したのですが、あまりにも地域が広すぎた関係で、その後数年にして七地域に分割することになったのでした。即ち、有喜支部、本野支部、小野支部、小栗支部、真津山支部、西諫早ニュータウン支部、諫早中央支部、とこの様になったのでした。昭和五十九年になって田中松雄氏のニュータウンに転居のため、田島義治氏が支部長としてあとを継がれたのでした。

現在の役員

支部長	田島 義治
理事	清水 みち
	石原 サチ

長与支部の素顔

私達の長与支部は西彼杵郡長与町にあります。長与町は長崎市に隣接しベツトタウンとして最近急激に人口が増えた町で、現在三万一千人を越しております。そのうち被爆者手帳所持者は四千五百六十二名おります。

長与支部は、昭和四十三年友の会が発足したとき支部として生まれ、第一代支部長は吉村勇策さんでした。長与支部は会員の親睦と団結を目標に生活上、健康維持のために努力し、被爆者の健康手帳、健康診断受診者証健康管理手当等の申請、手帳の切換え等色々お世話しております。長与町には当時長与小学校の救護所で死亡した人の無縁墓地があります。毎年八月九日の命日には供養が行われています。その時には友の会、会員多数参加し死者の冥福を祈っております。

尚、当支部としては最近緊張する国際情勢の前途を憂慮し、本部の提唱する平和運動其の他の会合等には進んで参加協力しています。

現在の役員

支部長 近藤 近

副支部長 池田 光義

榭原 良三

専務局長
兼会計係 中野 章

監 査 榭原 初義

中島 敏昭

会計補助 江下 豊

松田 耕作

長与支部現在の会員数一、〇一八

神浦支部の素顔

神浦支部は西彼杵郡に属し半農、半漁の町でしたが、昭和二十七年より池島に石炭開発され只今人口八千四百五十名おります。被爆者手帳所持者百六十八名おります。神浦支部は、昭和四十三年七月発足して初代支部長本浜久一氏です。神浦支部は被爆者の親睦と団結を目的として会員の被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等諸手当の受給の御世話等しております。

毎年八月九日には、光照寺に於て原爆殉難者の供養をして冥福を祈っております。被爆死亡者の内徴用工員として三菱造船所に勤務中被爆した前平政市（当時四十八才）、学徒報国隊員として三菱長崎製鋼所に勤務中の本浜宏平（当時十五才）等爆死せるもの三十三名、軍属として神浦大松野の殉国碑に併記して毎年四月十五日町民あげて、原爆殉難者の冥福を祈っております。最近は緊張する国際情勢の前途を憂えて平和運動にも力を注いでおります。

現在の役員

支部長 本浜 久一

副支部長 平尾 長吉

事務局長 草木 金治

現在の会員数百四十三名

多良見東支部の素顔

国鉄長崎線が長与廻りと市布廻りと喜々津駅で一緒に
なり、更に国道三十四号線が国鉄と接する所、そこが、
私達の支部つまり旧喜々津村です。交通が至便で、長崎
市と諫早市の間であり、そのベッドタウンとして団地

造成が進み、人口が急速に増加しています。この事は当
支部の一つの悩みにもなっています。主として長崎から
の転入者が多いのですが、この人達はほとんど友の会に
入会していません。なかには友の会の存在すら知らない
人もおり、入会をすすめる」と長崎では何もいわれなかつ
たのに多良見に来たら友の会に入れと言われる」と不満
をいう人が多いのです。入会勧誘の努力は機会ある毎に
やっていますが、特に団地ではなかなか実績を挙げる事
が出来ません。更にもう一つの大きな課題があります。
それは多良見町が被爆地の指定を受けそこねたことです。
昭和五十年、時津、長与と同時に指定を受ける筈だつ
たのが、申請書類の提出が期限内に遅れたために、現在も
なお、未指定のままになっています。誠に残念でなりま
せん。私達の支部は、会員の親睦と融和を大きな目標と
し、その方策の一つとして毎年、親睦旅行を実施してい
ます。雲仙、小浜、嬉野等の温泉地も近く、会員の大き
な楽しみとなっています。又役員と会員のつながりを密
にする為に、役員が各部落に向いて、いわゆる部落懇
談会を開き、友の会の活動状況、運動方針等の周知徹底

を図ると共に、会員の希望、質問等を受ける事にしています。友の会の結成については、本部西本副会長のお骨折りにより昭和四十三年会員約四十名にて支部誕生する。

役員 支部長 関山 光雄

世話人 杉本富太郎

山口 卯一

林 寅太郎

其の後伊木力、大草地区は地理的条件のため別に支部を作る事となり、伊木力、大草地区を多良見西部支部、喜々津地区を多良見東部支部として、東、西の二つの支部が出来る。

昭和四十六年一月多良見東部支部総会

本部より内海県議、鈴木事務局長

役員 支部長 関山 光雄

副支部長 松岡 国一

事務会計 寺田今朝雄

相談役 前山 龍吉

地区役員 西村 勝吉

関山支部長は結成以来の過度期をよくまとめられ今日

まで育てあげて来られた事は並み大抵ではなかったと思う。結成時四十名の会員が昭和五十年には百八十名となった。昭和五十一年三月総会、本部より西本副会長、伊藤事務局長出席される。

支部長 松岡 国一

副支部長 杉本富太郎

森 寿一

寺田今朝雄

支務局長 山口ヤツヨ

監査 西村 勝喜

本村 初美

顧問 関山 光雄

地区役員 森 泉 外十六名

初代支部長、関山光雄氏勇退

氏の御功績に対し感謝状並に記念品を贈り顧問推薦する会計増強を計る。喜々津郵便局小山局長さんに地区役員の御協力により一挙に八十名の増加をみ、昭和五十二年には二百六十名となる。其の後被爆者は高令化し、当支部にては年々約五名の死亡者あり会員は横バイ状態続く。

昭和五十一年八月被爆地域是正の件で、東京陳情団の一員として石場賢次さん同行される。

昭和五十二年三月幾多の問題点はあったが、多良見町被爆地域是正推進協議会が発足する。地域是正の件は友の会からはなれ、推進協議会にて運動する事になった。

昭和五十八年八月からの役員

顧問 松岡 国一

支部長 森田 春人

副支部長 蔭山 次夫

森 寿一

事務局長 辻丸 源吾

監査 本村 初美

中路ミツエ

現在の会員数二八〇名

大瀬戸支部の素顔

私達の大瀬戸町は、西彼杵郡北部の中心をなしているため諸官庁公社の出先機関を擁しております。

町の産業は従来大半が農漁業者であったが、昭和五十三年に現在東洋一とも言われる大型火力発電所の建設完成により可成りの数のサラリーマンも増した町になっております。人口は一萬を少し切っておる町で被爆者は二五七名です。手帳所持者二五七名のうち短期間居住の官公庁等の勤務者とその家族其の外の市町村へ転出無手続きの者等四十名が未加入になっておりますが永年居住定着者は全員が加入していて、二一七名の会員となっております。

昭和四十七年からは組織を利用して、会の認識について周知徹底と加入促進をはかり、逐年毎に入会の増加をみて昭和五十年頃から土地定着者は全員加入を得て現在に至っております。

我が支部は昭和四十三年に故池本勇一氏が深堀県手帳友の会長より組織の推進方要請を受け発足したもので、昭和四十七年に規約を制定し役員を選出し故池本勇一氏を初代支部長として理事一二名（内三名は副支部長）監事二名の役員構成で規約による運営がなされる様になりました。昭和五十年に故池本支部長が死去されたので二

代支部長として川本栄助氏を選任し、昭和五十一年に三代支部長に藤本三之氏を選任し、藤本支部長は川本前支部長を相談役に推薦し現在に至っております。会の目的を遂行するための活動としては、開催希望の地域に支部長関係役員が出向いて、被爆者援護対策についての意見相談を承る懇談会を実施したり、又昭和五十六年からは会員の親睦と団結を計るために、養護ホーム視察慰問旅行会や原爆関係施設見学旅行会、又は健康保持と親睦の旅行会を年次行事として実施しております。又平常は被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等諸手当受給の御世話をして致します。

尚最近緊張する国際情勢を憂い平和運動にも力を注ぐべきと解し進みつつあります。

現在の役員

- 支部長 藤本 三之
- 副支部長 田川 初男
- 山口 兼男
- 高出 和一
- 理事 末永 嘉美

- 道脇 幸雄
- 橋川ジュン
- 坂口 市次
- 浜口 竹一
- 山本 節子
- 森田 四郎
- 山田イツ子
- 横尾 八郎
- 川原 正吉
- 戸川 勇夫
- 監事 登立 忠二
- 相談役 川本 栄助
- 書記会計 岡口 久子

崎戸支部の素顔

私達の崎戸支部は西彼杵郡に属し、蛸浦島、崎戸島、江島、平島の四有人島と大小七無人島で構成され、長崎市の西北五十二キロ、佐世保の南西二十八キロの海上に

位置する典型的離島であります。

人口は且て石炭産業の好況に三万を数えられたが、昭和四十三年三月崎戸炭坑閉山により人口は極減の一途を辿り現在は三、五二五人の過疎の町で六十五歳以上の高令者数は九三二人であります。うち被爆者手帳所持者は五十二世帯で会員は五十六名であります。

崎戸支部は昭和四十三年七月発足し支部長は、中島直次郎です。崎戸支部は被爆者援護法制定の推進と会員の相互扶助及び親睦を図り、被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等の諸手当の受給を世話し、明るい町民生活に寄与促進する事を目的とし、且亦最近緊張せる国際情勢の前途が把憂され、平和運動にも力を注いでいます。

現在の役員

支部長 中島直次郎

副支部長 橋里新三郎

監査 中村 英人

会 計 欠員中で副支部長代行

現在会員数五十二名

高島支部の素顔

高島町は長崎市から西南海上約一四、五キロの処にあり古くから石炭の島として盛えている、現在も国策産業として位置づけられ又町の基幹産業として安定化の充実を図っている。人口、六、四〇〇名、現在被爆者手帳所持者は二〇〇名おります。昭和四十六年十一月高島支部発足、現在の会員数百六十五名、高島支部として被爆者親睦と団結を目的とし役員一同が特に組織対策に重点をおき頑張っております。又高島町では全町民あげて平和運動に力を入れております。

現在の役員

支部長 本田 忠男

副支部長 石橋 要

伊藤久美子

事務局長 石橋 要

会計部長 吉田 幸男

組織部長 新田 寿子

諸岡 静子

田中 スミ

情宣部長 黒原ミツエ

池田 靖子

監事 西津 光男

字土 昭

顧問 一ノ瀬 喬

船津 日義

時津支部の素顔

昭和四十二年動員学徒の会結成十周年に当り深堀会長は一般被爆者に呼びかけ今後は全被爆者が一体となり国に対する被爆者援護に関する陳情をする必要があるとの心情から広く一般被爆者に呼びかけた。処がたちまちにして多数の参加をみて愈々四十二年六月終に長崎県原爆被爆者手帳友の会の発足をみたのである。

同時に私達時津支部も発して参加し今日に至ったのであるが、会本部としても支部としまして多事多端決して平旦の道ではなかつた事を今振り返って其の感を深くするのである。時津支部に於ても早速岩下会長、柴本副会長の下に各部落に四、五名づつの委員を立てて諸々のお世話をする事にして発足した。何と言つても会の運営等に関しては全々無知の人の集りである為に、一寸した事でもすぐに本部の役員の方々の援助と御指導をお願い

する始末で深堀会長も多大忙の毎日であった。

四十三年特別措置法の施行に依つて医療費の増額や諸手当の支給が確定されるや、友の会の入会者も年と共に増加の一途をたどり、又一方では被爆者手帳の申請する人が増加して来た。そこで又問題になつて来たのが手帳申請者の証明人の問題で、早くも当時当原爆被爆者の救援活動をやつた人々の他界する方が多く、この分では将来申請する人が出た場合に大変困る事になるので、町当局と相談の上各部落に二、三名の証明人を決めて依頼した。それと同時に原爆当日現在の町住民原簿の作製を推進したが、四十年を経た今日に於ては証明人に依頼した方々も次々と他界され、現在では二十五名中数名の方の生存のみでさびしい限りである。昭和五十一年には柴本副会長が突然倒れて他界され翌五十二年には岩下会長も死去され、会の発足当時から部落の委員として証明人として仕事をやらせて戴いた私が会を任せられ幸にして野村、松尾両副会長、高瀬事務兼全計、川口、和田両会計監査各部落に理事一名と委員若干名を得五十三年友の会支部規約を制定して歩を進めた。其の後時津町としては長崎

市のベッドタウンとして日進月歩住宅住民は増加し、それにともなつて会員数も除々に増加し現在被爆者数は約三千名と推定されますが、会としての会員数は、約二千九百名、各委員の方々の御協力並びに会員各自の自覚によつて会の運営は円滑で私達理事としても友の会本部の主旨に副つて出来得る限りの協力と努力をする覚悟である。

会の運動も今後仲々厳しくなると思われるがその様な時こそ激しくその勢力を倍加して目的達成に向つて邁進する事を誓うものである。

支部長 平井 茂

西彼大島支部の素顔

西彼大島支部は、佐世保港外にある離島、大島町にあります。町の人口は約八千人、町の中核産業は造船であります。被爆者手帳所持者は百名ですが、友の会の正規会員は半分以下の現状であり、今後共健康管理手当等諸手当の受給の世話等をして、会員の拡大を計っていききたいと

会長以下役員が努力中であります。

又老令化する会員の健康管理について、被爆者検診の受診のPRに力を注いでおります。

現在の役員

支部長 尾道 安政

理事 松田 好昭

寺井 敏夫

中島 藤内

代田 栄治

事務局長
兼会計 岩永 隆



西海支部の素顔

原爆落下時に西浦上小学校校長をして居られた、西海町横瀬郷出身の故古曾根名嘉次郎先生の肝入りで、昭和四十三年四月に西海町役場に於て発足した。先生は原爆によつて家族全部を失い、第二の人生を故郷西海町に帰る心の傷を癒すと共に、再び「原爆ゆるすまじ」と真剣に平和運動に取り組んで来られた。此処に改めて先生の御冥福をお祈りする次第であります。

発足時の会員数は五十名前後だったがその後手帳取得者が加入したので百名になり今日に及んでいる。

現在の役員

支部長 大串 近朗
副支部長 橋口 英市
書記及び
中尾 正人
役員 石口 良雄

山口 辰治

川口フヂノ

神田 絹代

中尾 輝治

西山ヒサエ

宮本 健二

計十名

西海町は、町村合併で旧瀬川村、面高村、七釜村が一緒になった処なので彼杵半島の外海北端を細長く領している。広報連絡等に地区役員さんは大変なご苦労をしておられる様である。勿論無報酬の上にはあるが支部の活動として特にみるべきものはないが本部からの資料、運動方針に従つて随時役員会を開いて検討勉強会をしている。亦年一回の総会は会員相互の親睦と融和を兼ねて盛大に行つてゐる。二年に一回研修旅行も行い、現在までに原爆資料館、如己堂、原爆病院、恵の丘、かめだけホーム等見て廻つた。若かりし青春の日々を過した長崎の街並が原子野からの復興と併せて走馬燈の如く流れる当時小生は瓊中五年生で三菱兵器から三菱製鋼所へ移つて報国隊にかり出されていた。級友も半数は亡くなつた。被爆と戦後四十年の平和の日々を思う時、今一度原点に立還つて合掌すべきものと考ええる。以上簡単にわが西海

支部の横顔を紹介します。

昭和六十年二月一日

西海支部長 大申 近朗

西彼町支部の素顔

私達、西彼町支部は西彼杵郡半島の北端に位置し、大村湾に面し、西海橋を橋渡しとして、佐世保市針尾島に接する半農半漁の人口約一万人の町です。そのうち、被爆者は約二百五十名です。

当支部の被爆者の特徴は、原爆投下後警防団による救助活動に従事し被爆した人が多数であります。

西彼町支部は、昭和四十三年十月二十四日、大西海農協亀岳事務所二階で、約六十名の参加者を以て発会式を行い初代支部長として内海武氏を選出した。以後被爆者の親睦と団結を目的として、会員の被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等の受給のお世話をし、今日では、西彼町在住の被爆者は全員友の会の会員となっております。

又、昭和五十五年七月に開設した原爆ホームかめだけ

については、西彼町内に建設するための誘地運動を被爆者と町当局及び議会とが一致協力して積極的にを行い、今日のホームの礎を築いたことは非常に大きな運動の成果であります。

現在の役員

支部長 内海 武

副支部長 朝長 秀松

事務局長 北村 金策

会 計 石原 公明

監 査 太村 力

朝長 芳

橋口 国男

なお現在の会員数二四二名です。

三和町支部の素顔

私達の三和町支部は、長崎半島の中央に位置し、三ヶ村合併による農業、漁業を基調した町でありましたが、

時代の変遷と長崎市に近接する地理的条件も加わり都市近郊町として「明るい、住みよい町づくり」をモットーとした世帯戸数三、一二〇戸、人口一一、〇〇〇名の町で、うち被爆者手帳所持者は六九三名おります。

三和町支部は、昭和四十三年七月に発足して初代支部長は門脇輝次氏でした。当支部は、被爆者相互の扶助、親睦を図り明るい住民生活の促進を目的として、会員の被爆者手帳申請事務、健康管理手当等諸手当受給のお世話等をしております。最近は緊張する国際情勢の前途を憂えて平和運動にも力を注いでおります。

現在の役員

支部長 島田 運
副支部長 森 重司
森保 誠
桑原 弥平
理事 西 隆昌
監事 小山 登
原 治一
事務局長 高西 正明

庶務会計 高比良清次郎

外十三名、会員数四八七名

(59、4、1現在)

野母崎支部の素顔

わが野母崎支部は、昭和四十三年二月十八日、第一会場が、野母公民館、第二会場が協岬公民館において発会式を行ったのでした。

野母公民館は当時古い建物でした。まるでお化け屋敷みたいなところでした。しかも当時は寒く暖房もなく、ガタガタふるえながらの発会式でした。二百名の会員を前にして、深堀会長、竹馬理事が、こもごもに、被爆者の医療費無料化、手当の交付を目的として友の会を創立したことを力説されていたのでした。

第二会場の協岬会議が、吉田支部長がおられたので、暖房も完備されており、るるん気分で結成総会されたのでした。参集人員は九十名で、満場一致で友の会が結成され、初代支部長に吉田源平さんが就任されました。

その後、野母崎支部は、被爆者手帳の交付の促進、諸手当の受給のために地味な活動をし、一時は五〇〇世帯を越えるときもあつた程でした。

現在の役員

支部長 吉田 源平

琴海支部の素顔

わが琴海支部は長崎市の北、彼杵半島南部に位し、東は大村湾を隔て大村市に面し西は大瀬戸、外海町に南は時津、長崎市に接し、北は西彼町に接する位置にあり農業が基幹産業であり主体はみかん水稲、西瓜、馬鈴薯、畜産で有り特に西瓜は全国に長浦西瓜で定着している農産物の豊かなところですが社会経済面はそのほとんどが長崎市の経済圏といえます。琴海町には友の会の支部が二支部あり私達の琴海支部と西海郷支部があります。私達の会の発会は、昭和四十三年三月三十一日琴海町長浦公民館で開かれました。当日は琴海町村松区以北の各区より三百五十名の会員が集り本部から深堀会長外三名の

役員が参られて友の会発会の目的並びに規約の説明があり全会員一致で発足しました。初代支部長に佐木篤二氏が就任しこれから来る交付被爆者手帳の件、諸手当の受給等について地道な努力を傾けられました。なかでも隣町に設置された原爆特養かめだけについては支部一戸当り千円の募金をつのり協力しました。

昭和五十七年総会に至り佐木支部長が職務の多忙な為引退され現在の林茂支部長となりました。

現在の役員

支部長 林 茂

副支部長 森 政次郎

理事 白石傳五郎

浜口 徳一

久松 忠

森 喜久男

脇川 留市

川原 弥市

吉田 薫

西村 定作

理事 渡辺 登

岳本 文一

川上 秀治

平尾 春美

岳森 新

中尾 タエ

山道 鹿市

山本 春男

松本 久男

現在の会員数三百一名

世帯数二百四十七世帯

琴海町西海支部の素顔

結成時期 昭和四十三年七月八日

事務所在地

西村正昭宅

会員数 百三十七名

役員 支部長 西村 正昭

会計 下野 孝之

監事 山下 満治

理事 杉町 峯子

士尾 サワ

東 みちえ

谷本 チカ

守田 フクヨ

松本 貞義

山下 圭一

楠本 キクヨ

西山 武雄

概況 佐藤順作初代支部長のもとに西海支部を発足し、

被爆者の健康管理及治療に対する病院等の紹介、手帳取得等会員の御世話に活躍されて来たが昭和五十九年四月病のため死亡され五十九年総会において現支部長の西村正昭が選出され今後の活動として次のように役員会で決定した。

- 1 本部の運動方針に従い活動する
- 2 支部会員の拡充と実態調査

- 3 研修旅行の実施
- 4 琴海町で原爆死没者慰霊祭実施
- 5 近隣の他支部との交流

多良見西支部の素顔

わが多良見西支部はみかんの産地として有名なところであり、山村地帯ですが非常にこじんまりとした感じの集落が点在するところでもあります。

発会式は、昭和四十四年一月十四日伊木力小学校講堂で開かれ本部から竹馬理事ら三名の人が出席され友の会の設立の意義、規約の説明がありました。出席者は八十名程でした。そこで初代の支部長として永尾虎雄氏が就任されました。はじめのうちは被爆者手帳の取得、諸手当の受給等に力点をおき会員のお世話をいたしました。

その後隣町である長与町が、みなし被爆地区と指定されたので昭和五十年頃から被爆地区指定の運動が盛りあがって、運動を展開したのですが実現されずがつくりしているところです。役員も永尾支部長から松尾豊氏へ

支部長が移り今日に至っております。

現在の役員

支部長 松尾 豊

副支部長 辻本清三郎

大久保徳次郎

監査役 坂本 勝孝

平口 稲樹

永野 三義

山下 忠夫

川津 正温

浦山介一郎

今福 利幸

末岡 安一

林田 雪造

下見 昭吉

監査役 橋本袈裟四郎

中村 憲男

辻 武夫

橋本 福男

新宮 吉郎
 橋本 テシ
 橋本 ケイ
 事務局長 稲塚 茂樹
 監事 吉川 高一
 山口 豊

瑞穂支部の素顔

私達の瑞穂支部は南高来郡に属し、主として農業の町です。人口六千五百人位です。被爆者手帳所持者百五名です。瑞穂支部は昭和四十七年に発足当初三十名位でしたが、現在全員入会致しております。長崎県被爆者手帳友の会の団結と力を信頼して諸問題に取り組んでおります。毎年八月九日に原爆殉難者の慰霊と総会を行っております。会員八十%の人が出席しました。そうして再び原爆が使用されず平和と日本、世界を念頭に平和運動に行動する事を誓っております。

現在の役員

会長 川井 計
 副会長 三戸部健一
 事務局長 小宮 公秋
 監査 岸川 保
 宮崎 省吾



現在の会員数百五名

国見支部の素顔

私達の国見支部は南高来郡に属し、国立公園雲仙の北側に位置する人口一二、六二七名で農業主体の町で従前の神代、土黒、多比良の三町村合併で国見町となっておりますが御存知ない方もあります。が熊本県長洲港から多比良港との航送船の発着地であります。

被爆者手帳所持者は、現在二二七名であります。わが国見支部は、昭和四十三年七月発足当時から現在に至る間支部長は中村新氏であります。わが国見支部は被爆者の親睦融和と団結と更には会員の健康保持を目的に運営しております。又会員の被爆者手帳交付申請事務や健康

管理手当をはじめ諸手当の受給者のお世話等をしておりますが、会員の高齢化に伴い毎年数名の死亡者があり会員が減少する現状に鑑み、日常健康が最大の幸福であることを強調するとともに会員の健康に留意し、毎年一泊と日帰りの二回温泉地旅行を実施しておりますが、更に会員の健康管理手当の受給期間満了一ヶ月前には受給期間が満了するので、早急に診断書を病院からもらい受給申請を町役場に提出するように会員に通知し受給洩れのないように特に留意しております。又世界各地で戦争が行われている事実から日本国の平和を喜び、総会や役員会の機会を利用して国内の平和問題を取りあげ非核三原則の遵守を話合っております。

現在の役員

支部長 中村 新

副支部長 吉川 政男

高原 保

理事 島田 長義

徳永 一二

酒井 忠勝

小林 栄

帆足 茂盛

川原 常之

監事 酒井 稔

監事 栗原 貴

西口 春雄

会員数二二七名

口之津支部の素顔

私達の口之津支部は、島原半島最南端、有明海の入口に位置し長崎県南高来郡に属し、日本一の船員の町として、本町勤務者は千余名に及んでおります。農業、漁業及び商工業等町内の人口九、〇三九名です。うち被爆者手帳所持者一三五名おります。

口之津支部は、昭和四十三年七月に発足して初代支部長は、一ノ瀬八郎氏で、当時の会員数は二十名でスタートし、昭和五十年四月十五日付で二代目支部長は、松尾力太郎氏となり現在に至る。

口之津支部は、被爆者の親睦と団結を目的として、会員の被爆者手帳の申請事務や健康管理手当の受給のお世話等をしております。昭和五十二年二月三日被爆者手帳友の会集会場建設し、当事被爆者の手帳所持者一五八名で役員、会員を始め寄付をいただき落成しました。

昭和五十二年四月二日被爆者婦人部役員四名スタート

し現在婦人部役員は七名で活躍しております。

昭和五十二年九月十五日長崎市原爆病院に千羽鶴、見舞金を持って慰問しました。

昭和五十三年三月四日長崎県被爆者手帳友の会本部会長深堀勝一殿より友の会集会場落成記念の為油絵をいただきました。

昭和五十三年七月三十一日長崎県原爆被爆者手帳友の会本部より助成をいただき本町会員の協力はもとより、町当局の絶大なるご援助により念願の被爆者殉難者慰霊塔を口之津町公園内に建立落成しました。昭和五十八年三月六日被爆者二世会々員二〇七人でスタートしました。昭和五十九年三月二日県本部会長殿より助成をいただき口之津支部旗作製しました。

現在の役員

支部長	松尾力太郎
副支部長	永野 万年
監 事	本多 亀利
理 事	一ノ瀬八郎

田口 英夫

保持者があり乍ら、島原市の友の会支部長（故増田国頼氏）の指導と勧めに応じ、島原市の会に加入していた。私もその中の一人で、昭和四十五年七月三十一日被爆者手帳の交付を受け、勧められるまま、島原友の会に加入していた。その翌年には、島原友の会の副支部長の一人に推薦されていた。ところがわが町内に一五〇余名の被爆者が居り乍ら、何故独自の会がなく、島原の会に加入せねばならないのか総会等でも、島原まで行かねばならない。有明町の会員は役員等十人足らずが行くばかりで、大多数の会員は、殆んど欠席が多い。

このままでは、被爆者友の会に対する認識も理解も乏しく、被爆者同志の仲間意識も、親近感も湧かず、会場の片隅に肩身のせまい思いで座っておらねばならなかった。時あたかも、昭和四十二年、県被爆者手帳友の会が結成され、組織も拡大の声も高まり、会員の中にも、わが有明町にも、独自の会を作つて欲しいとの与論も高まり、独自の機運が盛り上つて来た。

二、有明支部独立準備委員会の結成

この機逸すべからずと、有明地区委員十一名相集り、

故宮永正美（元有明中学校長）故坪田晴祥（元保育園長）二名を加えて副委員長とし、島原支部内での副支部長に推されていた、松井淳を委員長として、組織作りを内定した。

三、町当局に了解と援助を求める。

有明支部独立結成についての経過を了解していただき事務的、経済的支援を町長に依頼、町長は心良く承認して頂き、住民課、福祉協議会との連携協力も求めて、独立の被爆者友の会を結成する様激励を受けた。

四、次に島原支部長、故増田国頼氏に交渉を持つ。

予想通り相当困難であったが、回を重ね、懇願し、理をわけ、礼をつくして要請の結果最後に全会員の希望とあれば、止むを得ないとの回答を得たので、急拠、独立趣意書、入会申込書を作成し、会員の協力を示してやつと承認を得たのであった。

五、必要書類の作成

住民課等の応援を得て、会員名簿、会則案、本年度事業計画、予算案等を作成した。

六、長崎県被爆者手帳友の会事務局に出頭、会長深堀勝

一氏を訪問し、独立についての経過を報告し今後の御指導をお願いした。なお、結成総会への御指導と講演をお願いする

七、結成総会についての準備としての委員会開催する

八、結成総会

期日 昭和五十年四月四日(金)午後一時半

会場 有明町民センター大会議室

独立経過報告、役員選出決定その他省略

出席者一三〇人盛会裡に終る

九、独立後今日迄の経過を顧りみて

かようにして独立の喜びも、友の会県本部町当局をはじめ、国、県の各議員、諸団体、周囲をとりまく各位の、暖い御指導御援助と会員一同が同じ被爆者同志だとの仲間意識を以て、団結した結果によるものだと思ふ。この自分たちの団結によってつくった、自分達の友の会だと言う信念によつて、会員同志が、望ましい人間関係の親愛感に包まれて、時間励行をはじめ、調査でも会費の徴集にしても、会の運営すべてが親近感の中に運ばれたと思う。役員が勤続者が多く、友の会

県本部十五周年記念式典における表彰者二十一名の多数となったのも、この会員意識の発露だと思ふ。今後益々之を助長発展をはかりたい。

十、老令化する被爆者、有史以来の人類の悲劇その傷跡は今もなおそこ、ここに残り、家に町に病院に、その痛みは消えぬ。しかし、四十年近い歲月の流れは、立派に復興した町並み、惨禍を知らぬ世代の中で、この歴史的事実さえも、次第に過去の出来事として、忘れ去られようとしている。老令化する被爆者として、この被爆地ナガサキの惨禍は、時の流れを越えて、次の世代に引きつがれねばならない。被爆者こそは、その生き証人たるべき人である。国家補償の精神に則り被爆者援助のため、出来るだけの充実を懇願する。

支部内においても五十八年度は、高令化のひずみから、病氣、入院、死亡相つぎ、中でも創立以来の功労者宮永、坪田両副支部長の相つゞ不幸は、悲痛の限りであった。ここに会員の一同とともに御冥福を祈ると共に、各会員、健康管理に一層御留意の上御活躍の程お願申す次第である。

現在の役員（昭和五十九年度）

支部長 松井 淳

副支部長 松本 新作

横山 清

監査 平野 明

前田 豊

書記会計 佐藤 増夫

布津支部の素顔

私達の布津支部は南高来郡に属し、半農、半漁の町で人口五、九九五名です。うち被爆者手帳所持者八十七名おります。

布津支部は昭和四十三年八月に発足して初代支部長山下秀氏でした。布津支部は被爆者の親睦と団結を目的として会員の明るい日常生活を送ることを促進しつつ、被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等の受給のお世話をしております。

最近では緊張する国際情勢の前途を憂えて、平和運動にも力を注いでおります。

現在の役員

支部長 山下 光秀

副支部長 湯田政代士

平川 利男

理事 林田 俊一

大橋 一郎

池田 繁久

山口 鉄男

吉岡 豊八

森塚 政人

事務局長
兼会計 中山 松好

監事 湯田 重

平川ヒサコ

なお現在会員数八十七名

北有馬支部の素顔

私達の北有馬支部は南高来郡に属し、農業の町で人口五千五百名です。うち被爆者手帳所持者七十七名です。北有馬支部は昭和五十五年八月に発足し被爆者の親睦と団結を目的として会員の被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等諸手当の受給のお世話等をしております。毎年八月九日には町民あげて原爆殉難者のめい福を祈っており又当日は会員一同お寺に参拝して殉難者の供養を行っております。

現在の役員

支部長 井村 泰

副支部長 山坂 厚

梶原ウメ子

会計 土橋タキ子

監 事 井手 安保

飛永チミエ

現在の会員数 七十七名

吾妻支部の素顔

私達の吾妻支部は、島原半島の北西方に位置する南高来郡吾妻町に昭和四十二年九月設立、発起人代表松田十郎氏外九名の世話人をもって町の中央公民館に約三十名の同志が集まり弧々の声を挙げました。自來二十年、三代目現支部長の下で今日に至っております。

被爆者健康手帳所持者一八六名、友の会々々員一四八名にて会員相互の親睦と団結をモットーとし、密接なる連携を計り、被爆者援護諸制度確立の為め一致協力して、その目的を達成する可く支部を十五地区に分け、夫々の地区に理事を置き連絡事項の伝達並びに会員の意志を結集して日常活発なる活動を展開しております。

現在の役員

支部長 浜田 草男

副支部長 大久保照雄

事務局長 江島 保徳
兼会計

監 査 金田 正敏

監 査 萩本 明

南申山支部の素顔

一、会員現在数七〇名

二、昭和四十三年十月発足

三、発足以来会長は変わらず（南高来郡南申山町

四、五十七年五月殉難者慰霊碑建立

五、被爆者の親睦と団結を目指し被爆者手帳の申請

各種手当、申請書、診断書の世話

微用工の厚生年金受給の申請

殉難者の永代供養等々、尽力し特に町内における被

爆者の地位の向上、二世の会設立に向って準備中

ある。

現在の役員

会長 山下 孝治

副会長 竹下 馨

役員 永尾 政喜

渡部 国人

塚田 継男

富永 藤雄

森内 松義

井上 健市

和田与四郎

大石藤八郎

森下 鍛行

川内 利春

寺田 一二

渡部 国勝

渡部 義信

西有家支部の素顔

昭和四十三年四月二十一日南有馬町公民館において、

南高南部支部結成となり、西有家町被爆者出席者四十名

位会費百円を納め入会、以後昭和五十年一月二十七日の

西有家町公民館の集會にて、本部竹馬組織対策部長から

支部結成の要望があり、出席者全員が賛成し支部を結成

することとなる。役員は理事十、監事三、委員若干名と

なり各地区より理事松島重吉、増田一三、志岐重孝、永田迪禮、小林稔、植木忍、楠田真佐人、六倉直義、安達祐太郎、古閑国太郎、監事伊崎源輔、草野淳、池田トシネ、委員狩野龍則、本多正人、内村武一、近藤健生、永橋茂、伯川澄子、永田栄男、会長理事志岐重孝、副会長理事植木忍、副会長理事松島重吉と決り、町内被爆者健康手帳所持者全員入会目標に役員は戸別訪問勧誘、三役は公民館内の社協事務局の佐藤政行事務局長様に支部結成の指導と援助と会計事務をお願いに行き、社協事務局にて引受けて頂く様になりまして三月十七日公民館にて、会員百三十四名の会員にて西有家町支部を結成しました。

昭和五十年七月四日役員会、十二月五日役員会、昭和五十一年一月七日研修会長崎平和像、文化会館、三月十日役員会、八月二十三日役員会、九月十三日総会、十二月十六日役員会、昭和五十二年二月二十八日研修会小浜大和荘、八月二十七日役員会、九月十六日総会十二月九日役員会、昭和五十三年一月二十日研修会、長崎平和像、原爆病院立山荘四月十八日役員会、七月二十六日天満宮総代会に慰霊碑建設用地陳情、八月二十二日役員会、九月十四日総会、十月二十七日、長崎市友の会本部深掘会長に慰霊碑建設資金助成援助陳情、十月三十日西有家町長被爆者慰霊碑建設資金助成陳情、十一月十五日役員会、十二月六日慰霊碑建設地鎮祭、昭和五十四年一月二十四日研修会、口ノ津慰霊碑参詣、大和荘、三月十三日役員会、慰霊碑建設資金収入合計二、三五一、五三一円、支出合計一、九二三、七九五円差引残金四二七、七三六円、三月二十六日原爆被爆者慰霊碑除幕式、七月九日役員会、八月九日慰霊祭、九月十八日総会、十二月十三日役員会。

昭和五十五年一月十六日研修会、長崎平和像、友の会本部立山荘、七月二十一日役員会、八月九日慰霊祭、八月二十六日役員会、九月十日総会、十二月十一日役員会。昭和五十六年一月十二日研修会口ノ津、千々石慰霊碑参詣小浜一ノ瀬、三月十二日役員会、七月五日町福祉運動会、七月二十二日役員会、八月九日慰霊祭、九月二十五日総会、十二月七日役員会、昭和五十七年二月二十二日役員会、三月七日研修会、千々石慰霊碑、小浜観音参詣一ノ瀬、七月二十六日役員会、八月九日慰霊祭、八月二十五日総会、十二月十七日役員会、昭和五十八年一月

二十六日研修会、南串山町慰霊碑参詣小浜一ノ瀬、七月二十五日役員会、八月九日慰霊祭、八月二十五日総会、十月十一日役員会、十月三十日町福祉運動会、昭和五十九年二月十三日役員会、三月一日研修会島原市慰霊碑観音参詣、四月二十二日役員会、五月十二日町福祉運動会、七月二十三日役員会、八月七、八、九日原爆写真展及び映画会、八月九日慰霊祭、八月二十四日総会。

現在の役員

支部長 志岐 重孝

副支部長 植木 忍

松島 重吉

事務局
兼会計 佐藤 政行

監査 草野 淳

井田 濱次

尚ほかに理事七名と委員十一名であり、会員は百十七名であります。

南有馬支部の素顔

私達の南有馬支部は南高来郡（島原半島）南端に位置し、農業を基幹産業とする町で、人口は所謂過疎化の例に洩れず今では八千二百名しかいません。うち被爆者手帳所持者が百二十九名おります。南有馬支部は昭和四十二年七月発足し、初代支部長は白倉隆保氏でした。

南有馬支部は会員相互の融和と援護活動を目的として被爆者手帳の申請事務や諸手当受給に関するお世話等をして参りましたが今では既ね片づいたような状態です。又毎年町内にあるお寺に祭壇を設けて原爆殉難者並びに会員物故者のご冥福を祈る追善供養を営んでおります。

現在の役員

支部長 中村 栄秀

副支部長 小淵 鹿蔵

本多 正行



加津佐支部の素顔

私達の加津佐町は、島原半島の南西に位置し、気候温暖で風光明眉な農業、漁業が中心で外国航路の船員が多い町で、総人口一万七百余名です。うち被爆者手帳友の会々員は一三五名（世帯数一二三戸）です。

加津佐支部は昭和四十三年七月に発足し活動を続けておりましたが、更に支部活動を強化活性化するために、昭和五十一年六月に発展的に再編成を行いました。再編成の初代支部長は当時町議会議長の故宮崎明男氏でした。支部結成の大きな目的は、被爆者の親睦と団結をはかり、合せて会員の健康管理と、生活の向上をはかり、社会的経済的な地位の向上につとめる。又被爆者二―三世に対する恒久対策の早期実現を要望する声が強く、これからの運動がまたれるところである。

尚最近は緊張する国際情勢の前途を憂えて平和運動にも力を注いでおります。

現在の役員

支部長 荒木 重長

副支部長 下田 勝男

宮崎 市男

竹下 初子

監査 山本 明

長木 吉平

事務局長 竹馬 義雄

現在の会員数一三五名（一二三戸）

千々石支部の素顔

私達の千々石支部は長崎県の南端、島原半島の西部に位置し、天正年間の少年遣欧使節―千々石清左衛門、江戸時代の南画家―鉏雲仙、日露戦争で軍神と崇められた橘中佐―橘周太を生んだ風光明眉な町にある。町の人口は約六、六〇〇人、その中、被爆者手帳所持者は一九六名

である。

千々石支部が組織的な活動体として発足したのは昭和四十八年で、当初は健康管理手当の受給に全力を注ぎ、三年間で九〇%以上の受給率に高めることができました。

これで、会員の支部に対する認識も深まったので、昭和五十三年度に会員団結のシンボルとして「支部旗」を作成しました。また昭和五十四年、五十五年度には、これまでの本支部最大の事業である「原爆慰霊碑」建立に取り組みました。この事業は一年二ヶ月間を要し、御芳志二九一件分、約五〇〇万円をもって完成しました。「碑」は森静かな橘神社の境内に、西方浄土を向いて建てられており、「碑文字」は当時の長崎県知事、久保勘一先生の直筆であります。

昭和五十六年度以降は、会員の研修や親睦面を重点的に取り上げていますが、会員の「親睦研修旅行」の実施状況は次のようになっていきます。(56)の数字は年度を表します。

- (56) 原爆被爆者養護ホーム、生長の家総本山、七ツ釜
鍾乳洞(四十八名参加)

(57) 祐徳神社、嬉野温泉センター(三十三名参加)

(58) 野母マリーランド、野母植物園、大浦天主堂、グ
ラバー邸(四十一名参加)

(59) 九十九島めぐり、石岳動物園、玉屋デパートショッ
ピング(四十六名参加)

尚、本支部における各年度の「事業計画」は、概ね次のようになっています。

総会(会務会計報告、事業計画案等の審議承認)

慰霊祭(八月九日頃実施、県本部出席)

会員親睦研修旅行(秋季に実施)

理事会(随時開催。県本部拡大理事会内容報告、支部
議題審議承認)

慰霊碑清掃(毎月一回、理事奉仕作業)

会員弔事参列(供物、香典等の規約有)

町内各種行事参加

県本部拡大理事会等参加

南高連絡協議会参加

南高各支部行事等参加

※本支部は昭和四十八年発足以来、県本部への会費納入

は常に一〇〇%である。

現在の役員

支部長 田中 源一

副支部長 芦塚 和雄

秋島 丈吉

事務局長 芦塚 和雄

兼会計 小林 等

監査 鬼塚 武彦

会員数 一九六名

深江支部の素顔

一わが深江支部は昭和四十三年四月二十八日島原支部として発足したのでした。はじめは増田支部長の熱心な指導を受けておりましたが、やはり深江町には一三〇名の被爆者がいたので深江支部は是非つくるべきだとの意見が強かったので深江支部の独立の話しを増田支部長に申し入れたのでした。はじめは納得してくれなかった増田支部長も遂に深江町被爆者の熱意に負けて昭和四十八年

発会式をすることとなったわけでした。

初代支部長に製鋼所生き残りの水田秀盛さんが就任されました。それから未交付だった被爆者手帳の問題等でした。なかでも川南工場に出勤して終戦の日、浦上駅に野宿した女子挺身隊十三名の被爆者手帳取得には、深堀会長にお願ひしてやっと交付されたのでした。

現在の支部活動は被爆者の親睦・団結をモットーとして頑張っております。

現在の役員

支部長 荒木 源夫

長崎県被爆者手帳友の会深江支部

支部発会 昭和四十八年九月九日 会員五十九名

昭和五十五年一月十三日 水田秀盛支部長

死去

昭和六十年一月現在 会員百二十二名

戸数百十二名

総会——九月 会員研修年一回

一泊又は日帰り

小長井支部の素顔

私達の小長井支部は、北高来部に属し、半農、半漁、半工業の町で人口は約七、五〇〇名です。うち被爆者手帳所持者は約二、三〇名程おります。小長井支部は昭和四十三年に発足して、初代支部長は吉田賢氏でした。

小長井支部は被爆者の親睦と団結を目的として、毎年七月には支部の総会を開催し事業計画に基き、八月九日の原爆慰霊祭には五〇名ずつ交互に参列し原爆殉難者のめい福を祈っております。

現在の役員

支部長 森 藤治

副支部長 野口 繁高

事務局長 橋本初次郎
兼会計

監 査 吉岡 芳郎

堤 時雄

現在の会員数二八〇名

森山支部の素顔

私達の森山町は、北高来郡ですが諫早市と南高来郡の間にあり、北は有明海に南は橘湾に面し、中央丘陵部にはゴルフ場を、唐比海岸には温泉を持ち、北に多良岳を東に雲仙岳を望む風光明媚な、観光と農水産業の町で、人口は六千人です。うち被爆者は百八十名おります。

森山支部は、従来からありましたが、昭和五十年三月十四日、当時県被爆者手帳友の会事務局長であつた鈴木

美秀氏を迎え、総会を開いて新発足し、支部長に馬場守久氏を選任し、現在に至っております。

森山支部は、被爆者の親睦と団結を目的として、被爆者手帳の申請事務、諸手当の受給のお世話をしておりま
す。支部の特徴としては、友の会会費を、被爆者検診の
受付と同時に納めることでしょうか、特に健康管理手当
の受給指導には力を入れ、町内の医師と連携をとりなが
ら、一〇〇%受給を目指して努力しております。

現在の役員

支部長 馬場 守久

副支部長 原 茂春

横尾 直人

事務局長 早田 繁
兼会計

監 査 横山 百喜

山崎日出光

高来西支部の素顔

私達の高来西支部は、北高来郡に属し、県の東端佐賀
県寄りで、高来町は人口約一万人、町を学校区にわけ、
小江、深海地区で高来西支部として発足しました。初代
支部長故山口七大夫氏でした。部落毎に役員一名(約一
〇名程度)をおき、役員を通して、手帳の申請、健康管
理手当の申請など会員の為の奉仕につとめました。支部
発足以来今日迄、会費の納入一〇〇%、会員の親睦と団
結を目的とし、現在、サルノコシカケやアマチャヅル等
を栽培して会員に配つたりしております。

現在の役員

支部長 米田 正利

副支部長 辻 和憲

森岡係長外一名、

池下地区代表菊川源紀外十

名

佐藤 孝一

同 五月 被爆者対象者の検診 地区在住者

百九十名 地域拡大の事で話し合い

会 計 松下市太郎

昭和五十年 五月 地域拡大の署名運動

県庁並びに友の会に地域拡大を嘆願

同 六月 池下地区手帳友の会全員長崎県被爆

者手帳友の会へ入会

監 査 馬渡 繁磨

地域拡大署名簿を友の会事務局長へ

手渡す

田中 繁雄

地域拡大集会参加(戸石公民館)

同 十月 国会陳情団一名参加(地域拡大)

陳情報告会 西岡県議 本部二名

同 十二月 池下地区友の会

代表者 井田長太郎 辞任

荒川 降二 就任

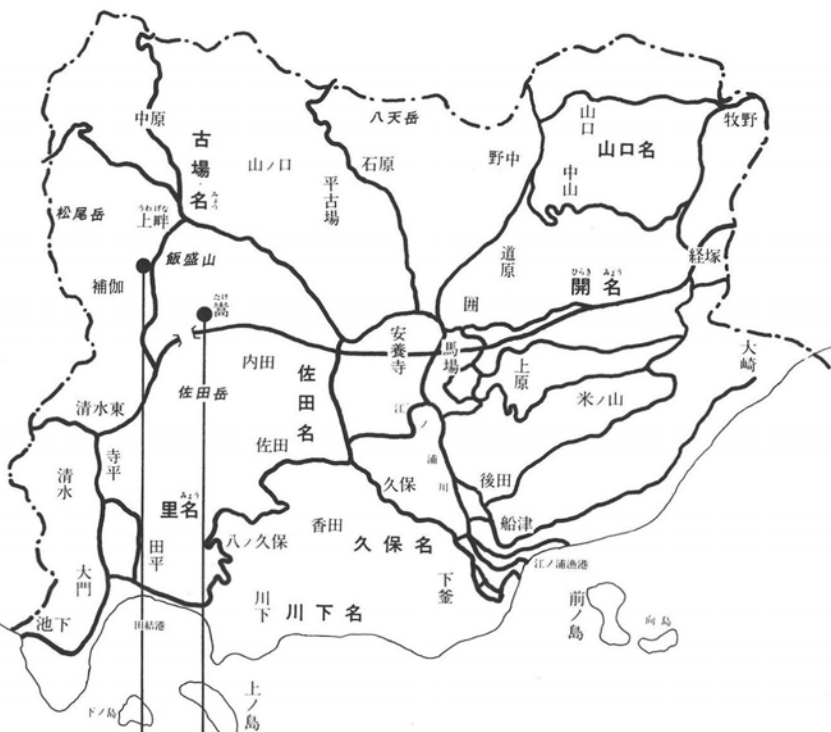
内山 道子 就任

昭和四十九年四月 協議会(被爆地域拡大および被害人員調査)

員調査)

出席者 飯盛町役場佐田住民課長、

同 八月 国会陳情団一名参加



旧、田結村
古場名補伽地点



旧、江ノ浦村
平古場名嵩地点

長崎市に投下された原子爆弾の気象観測 等のためのラジオゾンデ落下地点の標

昭和20年8月6日世界初の原子爆弾が広島市に投下され、次いで8月9日第2号の原爆は長崎市浦上上空に炸裂した。

同日正午ごろ爆心地より真東に一直線に当る地点即ち、11.6軒の旧戸石村川内、12.5軒の旧田結古場名補伽、13.3軒の旧江ノ浦村平古場名嵩に次々と三個の落下傘付ラジオゾンデが落下した。

これは、原子爆弾投下の前後に高々度より投下され風向、風速、温度及び爆圧等について、グアム島の米軍基地に発信し、その使命を達したものである。

戦後38年、原爆の悲劇を知る者も日々減じつつある今日、再びこの哭の日を繰り返さないために。

昭和58年8月建之
飯盛町

昭和五十二年四月 原爆地域是正総決起大会に飯盛支部

参加 長崎市公会堂

六月 国会陳情団一名参加

陳情報告会中村衆議院議員本部三名

十月 国会陳情団一名参加

十一月 陳情報告会本部四名

十二月 国会陳情団二名参加

壮行会（公会堂前から長崎駅まで行

進）

昭和五十三年七月 国会陳情団一名参加

十一月 陳情報告会本部三名

県庁に陳情（地域是正）

昭和五十四年二月 知事に陳情（地域是正）代表者五名

七月 国会陳情団一名参加

八月 友愛会大会 不参加

十月 地域拡大報告 友の会会長

十二月 国会陳情団一名参加

昭和五十五年二月 地域是正の問題点報告 友の会会長

今後の運動方針

七月 県庁に地域拡大陳情参加

昭和五十六年三月 国会陳情団一名参加（会長同行）

七月 代表者 荒川隆二 辞任

池田民衛 就任

内山道子 就任

昭和五十九年六月 国会陳情団一名参加（副会長同行）

陳情の際提出した資料は別冊のとおり

（飯盛町が昭和五十八年八月建立

したラジオゾンデ落下地点を示す標

示板の設置）

現在の役員

支部長 菊川 熙紀

代表者 池田 民衛

代表者 池田 民衛

代表者 池田 民衛

代表者 池田 民衛

代表者 池田 民衛

会員数 四十名

川棚支部の素顔

私達の川棚支部は東彼杵郡に属し、半農、半漁、半工業の町で、人口一万四千七百九十一名（十月現在）です。うち被爆者手帳所有者四百名以上居ります。川棚支部は、昭和四十八年に発足して初代支部長岩永清三でした。

川棚支部は被爆者の親睦と団結を目的として会員の被爆者手帳の申請事務健康管理手当等、諸手当の受給の御世話等をして居ります。わが川棚には、沢山の被爆患者が送られて来ました。被爆者無縁仏の墓があります。今は町で、まつって居られるが被爆者仲間にも協力してくれる様要望があつて居りますので慰霊塔でも町で作られる場合は何等かの方法で協力してめい福を祈りたいと思ひます。

現在の役員

支部長 岩永 清三

協力者 三名

会員数 四百名以上

福江支部の素顔

五島列島の中の福江島、福江市全域人口約三万二千名
福江支部発足 昭和五十三年十月
初代支部長山田長次郎氏で現在に至る。

現在の役員

支部長 山田長次郎

副支部長 島 宗太郎

浦 清人

会 計 日高 柰弥

監 事 新 五三郎

熊川 权一

理 事 福見幸太郎

昭和五十九年十月現在会員数一八四名

奈良尾支部の素顔

私達の奈良尾支部は南松浦郡（五島）の上部に属し、人口は五千余名です。その内約九〇％は家庭の主人、又は長男、次男が共に南支那海、三陸と当町の基幹産業である遠洋巻網漁業に従事しています。残りの一〇％は農業を少々と町公共施設の従業員と、地元建設の土木関係の青年層です。ちなみに私達の支部は昭和四十八年八月に、七十八名をもって発足しました。

初代支部長は住福幸太郎氏でした。昭和五十年八月より松村辰男氏が支部長に選任され今年八月に現支部長に変わりました。尚当支部は会員の親睦と団結は勿論、手帳の申請や、健康管理及び諸手当の受給事務等、速やかに連絡し、又色々個人の話相手にとお世話しています。念願の原爆殉難者の慰霊塔の建立は未解決であります。毎年八月六日、九月十五日は原爆殉難者及び太平洋戦争での戦没者のめい福を祈っております。

最近、ソ連、フランス、米国等核兵器に依る実験は我々の願望を無視するものであり中止させざるを得ませ

ん。故に我々は常日頃平和運動にも力を注いでいます。お互いに今後共頑張って行きましょう。

現在の役員

支部長 木村 義一

副支部長 松村 辰男
及び事務 計

現在の会員数 一一一名

岐宿支部の素顔

私達の岐宿支部は南松浦郡に属し、福江市の西端一六キロの地点に位置しており、農業を主として経営しております。町内の世帯数一、七〇〇戸で人口五、六〇〇名うち被爆者手帳所持者は一六六名おります。岐宿支部は、昭和四十四年四月に発足して、初代支部長飯田小吉氏でした。岐宿支部は被爆者の親睦と団結を目的として会員

被爆者手帳の申請事務、健康管理手当、諸手当の受給のお世話等をしております。最近のトマホークの艦船配備が進み、米・ソの核競争が激化している中に我々は平和をさげび悲惨な戦争や核の廃絶を訴え続けてゆく。

現在の役員

支部長 久保甚太郎

副支部長 谷川 貞蔵

谷川 清人

事務局長
兼会計 榎田キヨエ

監 査 桑村 繁蔵

中野喜代次

昭和五十九年九月現在会員数一六一名

奈留支部の素顔

当支部は昭和四十四年一月発足初代支部長小田 守氏（奈留郵便局勤務）であったが、病気のため辞任されその後昭和五十一年より木高爲八氏が就任し、現在に至っている。

昭和五十六年支部総会開催 参集者 二十一名

昭和五十七年支部総会開催 参集者 五十二名

昭和五十八年支部総会開催 参集者 四十八名

三ケ年は原爆二法および同改正法の説明と相談業務の実施を行った。本部から二名理事が出席の上指導を行い総会は盛況裡に終了した。

法律の改正説明および各種請求等の指導は毎年実施するよう会員は希望している。

被爆者手帳所持者 一四二名

現在会員数 一〇五名

有川支部の素顔

私達の有川支部は南松浦郡に属し、西海国立公園のな

かにあり風光明眉な捕鯨の町で人口約九、五〇〇人です。うち被爆者手帳所持者は一八〇名で友の会への全員加入をめざしております。有川町の捕鯨最盛期には会員をはじめ当時の若者達のほとんどが南氷洋や北洋上で活躍していたが、資源の枯渇に伴い鯨の捕獲制限及び禁止により、衰退しており鯨の史跡だけが捕鯨の町の面影をとどめている現状であります。

有川支部は相互扶助及び親睦を目的として昭和四十四年一月に発足し、高井良朝治氏が初代会長に就任現在にいたっている。事務局は会員の諸手当の受給、その他原爆に関する相談やお世話をしています。

又、世界の恒久平和運動の一環として原爆被災の映写会や、写真展等を開き核兵器絶滅にも力を注いでいます。

現在の役員

支部長 高井良朝治

副支部長 江口 哲雄

中村 音蔵

事務局長
兼会計

江濱 昌宏

監 査 宗 七太郎

立木 実夫

現在の会員数一五〇名

玉之浦支部の素顔

私達の支部は西海五島国立公園の中で、五島を代表する景勝地、大瀬崎断崖のある町で、戦前は遠洋漁業の基

地として人口も一万人を数え、経済的繁栄の時期があったが、その後過疎の町と化し、現在人口三、三〇〇人、半農、半漁の町である。

町内の被爆者手帳所持者は九〇名、うち支部会員は六〇名である。玉之浦支部は、昭和四十七年七月、四十七名の被爆者により結成し、支部長に白浜太郎氏が選任され、現在に至っている。当支部は、会員数が少く、取立てて事業は出来ないもので、只々被爆者の親睦と団結を計るを目的として、会員の健康管理手当等、諸手当の受給のお世話と共に、被爆者手帳の申請事務手続等の指導に力を入れている現状である。

富江支部の素顔

私達の富江は五島列島福江島の南西にあり、交通の所要時間は、海路三時間三〇分、バス四十五分を要し、空路も大村―福江間に開設されています。第一次産業が減少し、第二次、第三次産業構成比が増加し全国的な産業構造の変化と一致します。又サンゴの町としても知られ

ています。人口八千六百余人余りで、被爆者手帳所持者は二百名近くおり富江支部は昭和四十四年五月に発足し、昭和四十五年七月第一回の総会を開催し支部長は発足時から当時のままで現在にいたっています。

地域を割り振りして理事をおき、被爆者の親睦と団結を目的として会員の被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等諸手当の受給のお世話等をし、回答に自信がない時は、本部と連絡をして本人に回答しております。年一回総会をし役員の任期は二年にしております。

現在の役員

支部長 鬼塚 邦彦

副支部長 佐野 一美

中谷 俊衛

事務局 橋本 幸子

兼会計 小西 悦良

監査 福島 一子

現在の会員数 八五名

新魚目北支部の素顔

私達の新魚目北支部は五島最北端に細長く、東西は一キロ内外ですが南北は約十五キロあります。津和崎地区には今だにバスの便もありません。

農産物による収入は年毎に減少し大多数が漁業による生活に頼っております。

私達北支部は、はじめに新魚目支部として発足しましたが地形の不便等から昭和五十年北と南の両支部に別れました。五十五年再び合併しました。五十七年七月運営等種々の都合もあり又北南に別れて現在に至っております。新魚目北支部は会員の親睦並びに団結をモットーにして被爆者健康手帳の申請及び諸手当等の取得、受給に努力しております。

被爆者手帳所持者八十一名全員が友の会々員として会費の徴集にも快く協力してくれます。会長はじめ本部役員皆様の今後の御活躍を期待いたしております。

現在の役員

支部長 川口 清見

役員 島 千鶴子

中村政太郎

松下カオル

松下 恭子

田島サダ子

田平支部の素顔

私達の田平支部は北松浦郡に属し農村を主体とした町で、人口八、八〇〇人世帯数二、五五五戸です。うち被爆者手帳所持者三五〇名おります。田平支部は昭和四十三年七月に発足して初代支部長は早田次夫氏でした。

田平支部は被爆者の親睦と団結を目的として会員の被爆者手帳の申請事務及び健康管理手当等諸手当の受給のお世話等しております。又毎年八月九日には町民あけて原爆殉難者のめい福を祈り、当時の模様を回顧し、お互いに慰め合つて、励まし合うため支部総会を開催しております。最近の緊張する国際情勢の前途を憂え、平和運動等について語り合っております。

現在の役員

支部長 浦田 英秋

(電話)

副支部長 安村 豊

(電話)

事務局長 安村 豊
兼会計

(電話)

監 査 本村秀太郎

(電話)

現在の会員数三〇名

鹿町支部の素顔

私たちの鹿町支部は、北松浦郡に属し、昔は、炭坑の町としてその隆盛をきわめました。エネルギーの革命と共に町の人口も六千四百人余りに減り美しい九十九島を眺める観光と、自然の入江にたくさんのハマチや鯛の養殖などを主にした産業に生れ変わりました。

この鹿町町の被爆者手帳の保持者は二十一名です。鹿

町支部は、昭和五十一年に発足し、初代支部長は、友清

克己氏でした。鹿町支部は、年に一回総会を開きその後

懇親会をいたします。その折にそれぞれの被爆体験を語

りあっています。わずか二十一名ですのでこれからお

互い声をかけあい励ましあつていきたいと思っています。

現在の役員

支部長 辻 玲子

監 事 久保 卓朗

小値賀文字

小佐々支部の素顔

私達の小佐々支部は、北松浦郡小佐々町で半農、半漁の町で人口七千名ばかりです。被爆者手帳所持者は二十

名おります。小佐々支部では昭和四十八年十月十二日に本部役員杉山又七氏が来町になり友の会の説明をして下されてから結成の運びとなりました。

現在の役員

支部長 田中 幸市

現在の会員十七名

宇久支部の素顔

私達の宇久支部は北松浦郡に属しています。南松浦郡北端の津和崎とは指呼の間にあります。今でも五島と言えば北端の宇久島を含めて呼ばれている。藩制時代は福江藩でした。十海里以上も離れた平戸（旧地方事務所に在）に含められているが理由は不明です。杵岐、対馬が長崎県に線引きされていると同じでしょう。

宇久の歴史は古く縄文弥生時代には既に人が住んでいた事が遺物により立証されている様です。平村と神ノ浦

村が合併して宇久町になったのですが、宇久平と言う様に平家と大変なかわりのある町です。下ノ関合戦で敗れた平家一門の家盛が流着した処で由緒ある村である。

又神浦は遣唐使の船が食糧・水を補給した天然の良港で歴史を秘めた島でもある。留学生が、海難をおそれ、安隱を此の島に求めて再出発した。いわば彼等にとっては救世主であつたのではないでしょうか。有救島と読まれたことでもわかります。私は此の島に生をうけたこと誇りを感じています。産業は農業、漁業が中心です。いづこも同様第一次産業の不振で中小企業もふるわず、経済は落ち込んでいる様です。被爆者手帳所持者は六十六名（内男三十二名）六十一世帯です。宇久支部は昭和四十三年七月発足初代支部長は宇久小学校神田栄守先生でした。被爆者の親睦と団結を目的として結成されたものです。会員の相互扶助、健康管理手当の受給申請の御世話をして居りますが、被爆会員の高令化に伴う悩みごとについても手助できればと、それ迄は是非広げ度いたと考えています。まだ完全に解消されないのが被爆者で手帳を持つてない方々が居る事です。直接被爆者の救護に従事

しながら保証人を求め得ない人、被爆地に居住して居りながら、当時の隣保班の方々の所在不明で保証人が壁になつて手帳の受給がなされていない方々等々、高年令化とともに何とかしなければと思います。御知恵をいただければ幸いです。潜在被爆者の解消が今の私に課せられた戦後処理と決めています。防衛費突出を歓迎している者もある様ですが、そういう人は戦争にかり出される心配のない人が、戦時中甘い汁を吸った人で、夢よもう一度……と考えている人かも。以前と違って戦場も銃後もなく老若男女を問わずボタン一つで抹殺出来る核兵器の戦争です。あの様なこわい核兵器、あれ以上に凄惨極りない様相になると思われる核兵器の廃絶に取り組みましよう。近頃核三原則も経文になりました。まぼろしの目標かも……。

現在の役員

支部長 田向 善与



副支部長 泊 トミ子
兼 会計

世知原支部の素顔

現在の役員

支部長 市瀬 澄夫



副支部長 池田 松男



事務局兼 大園 国男



監 査 平川慎一郎



田中 昭

現在の会員数十六名

江迎支部の素顔

私達の江迎支部は北松浦郡に属し、北松北部の中心の町で警察署あり労働基準監督署、労働金庫、商工会議所職業安定所、農業改良普及所等の役所があり、江迎川を隔てて、国鉄松浦線の江迎駅があります。人口は一時は一万数千人あったのが住友、日窒の大炭砒が閉山されると共に人口も減少して現在は七千人余りとなりました。被爆者手帳友の会の人数も今では二十人前後となりました。江迎支部は、昭和五十年十月に三十人余で発足して以来引き続き私が支部長を勤めて御世話を致しております。

現在の役員

支部長 吉永 定一
 副支部長 金田 正記
 事務局長 永田 英和
 兼会計

現在の会員数二十名

美津島支部の素顔

私達の美津島支部は下県郡に属し半農、半漁の町で、人口一万〇七八名です。うち被爆者手帳所持者四十二名おります。美津島支部は昭和四十三年七月に発足して初代支部長浦瀬実でした。美津島支部は被爆者の親睦と団結を目的として会員の被爆者手帳の申請事務健康管理手当の受給のお世話等をして居ります。又昭和五十五年には念願の原爆殉難者の慰霊塔を建立し毎年八月九日には町民あげて原爆殉難者のめい福を祈っております。最近では緊張する国際情勢の前途を憂えて平和運動にも力を注いでおります。

現在の役員

支部長 浦瀬 実

事務局長 大倉 静雄
 兼会計

監 査 狩倉ノブ子

現在の会員数三十九名

上対馬支部の素顔

わが上対馬支部は、対馬の北端に位置し、西は韓国に五三Kで迫り、本土には一六〇キロの距離にあり、隔絶された国境の町で人口六、八六六名の半農半漁の町で、その内被爆者手帳所持者は三十六名であります。

昭和四十三年に支部を結成し、初代支部長に古藤栄氏を選任して今日迄十六年になります。その間、被爆者手帳の申請事務、健康管理手当等諸手当の受給の御世話をして来ました。昭和五十四年度より町補助金の受給も受け、福祉団体にも加入し、福祉協議会主催のスポーツ大会に

も被爆者団体で出場をし、親睦と団結をはかって居ります。年一回の記念行事は研修会を島内各地で開き、原爆殉難者のめい福を祈り、平和運動にも力を注いでおります。

現在の役員

支部長 古藤 栄
副支部長 米田 倭雄
兼事務局長
理事 大植五郎一
平間 一義
内田 豊実

監 事 谷山 吉久

比田勝利章

現在の会員数二十八名内同一家族五名

厳原支部の素顔

長崎県下市町村非核宣言の請願を決議した三番目の厳原町の要旨とは、原爆で世界最初の凄惨な被害を受けた

国民は恒久の平和を念願する。蔽原町は非核三原則を堅持核兵器の使用に反対し安全な町づくりを実現のため全住民と共に非核地域と宣言する。

本年は被爆四十周年を迎える年であり被爆者の高令化も進む折、皆様お体には充分気を付けて載きたいと思えます。国境の島対馬にも六町の支部がありますが、蔽原支部も昭和五十九年度は当支部長島居勇様が御他界なされ残念な事でありました。生前は非常にお世話様に相成り支部の方々も残念さ一念ではなかつた事かと思えます。御冥福をお祈り申し上げます。

私事、本田清が昭和五十九年九月より蔽原町支部長を引受ける様に相成り、果して蔽原町支部の運営を継続して行く事が出来るものかと心配しておりましたが、現在に至るまで支部の方々より苦情も無く過しておられますので継続出来るのではないかと不安まじりの毎日を送っております。蔽原町支部会員数五十一名男三十名女二十一名実在人員四十八名、美津島町在住者二名、島外者一名となっており、これは前支部長より引継の人数数より少なくなっておりますが、最終的 personnel 整理の結果と言う事

になり島外転出、会費未納者等の整理を行ないまして蔽原支部会員名簿作成、会員に配布して支部会員の交流又は友情を切に願うものであり、一度支部会議の場を開催する目的でもあります。昭和五十九年九月の町定例議会を目前にして町当局に蔽原支部運営資金請願書を作成して援助を受けるべく提出しておりますが、今だに返答がないので六十年度予算繰入れではないかと思われれます。

これが実現出来ると年一回支部会議も開催出来、蔽原支部会員交流並び役員選出等と計り今年は大きく飛躍出来るものと期待しております。又対馬六地区支部長会議も立案しておりますので、実現出来る日を望み近かれと祈り続けています。最後に支部会員の方々が来崎等の折は大変御迷惑を申し上げありがとうございます。本部役員は毎年上京運動等御苦勞様で御座居ます。蔽原町支部を代表して感謝感激を敬服申し上げます。手帳友の会員皆様非核を願ひ御健康をお祈り申し上げます。

蔽原町支部 本田 清



川平支部長 多以良ナミ



戸町支部長 田中治太郎



川平支部役員 吉村レイ



三重支部役員



西城山支部 芦塚春男



平山支部長 小川 巽



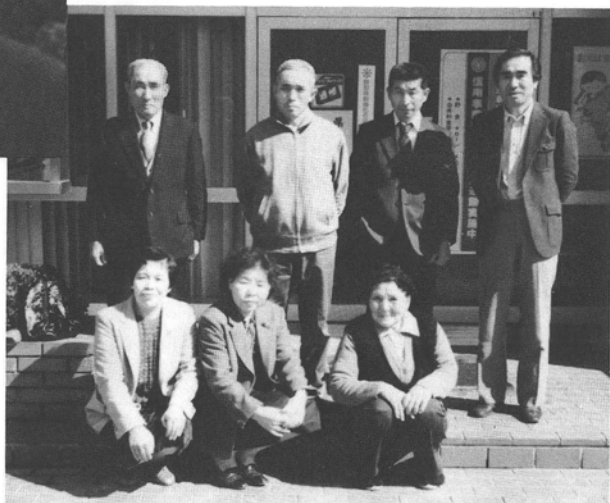
西城山支部長 犬山春吉



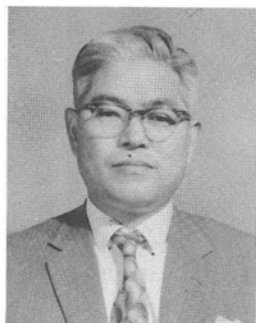
西町支部役員



古賀支部長
山口一之



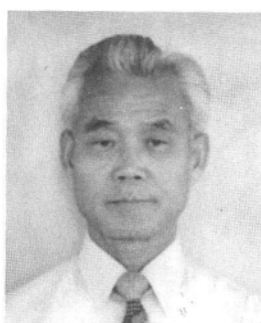
古賀支部役員



油木支部 里 時男



油木支部 辻本久義



油木支部長 大平力男



鮎ノ浦支部役員



矢上支部役員



現川支部役員



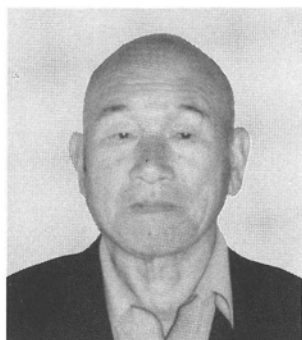
坂本支部役員



坂本支部役員



坂本支部役員



西山支部長 中川亀雄



稲佐支部役員



山里支部役員



竹ノ久保支部 山下長義



竹ノ久保支部 平野英男 田島タヤ



錢座支部役員



錢座支部役員



城山支部
支部長 松尾繁次



城山支部 中島春乃



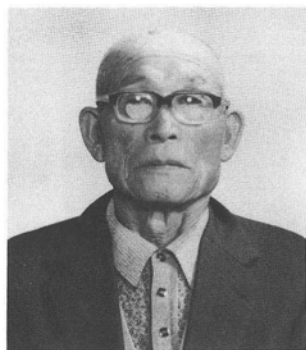
小野支部役員



本野支部
支部長 平野 清



有喜支部長 酒井秀雄



小栗支部長 山口富士男



長与支部役員



神浦支部役員



多良見東支部役員



多比見東支部
初代支部長 関山光雄



多比見東支部
二代目支部長 松岡國一



崎戸支部
支部長 中島直次郎



高島支部役員



高島支部役員



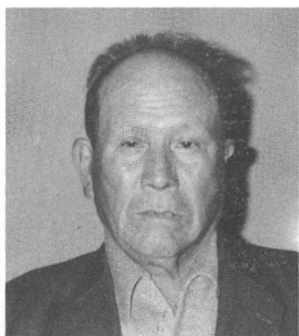
西彼大島支部役員



三和支部 森保副支部長



三和支部 島田支部長



三和支部 桑原副支部長



三和支部 森副支部長



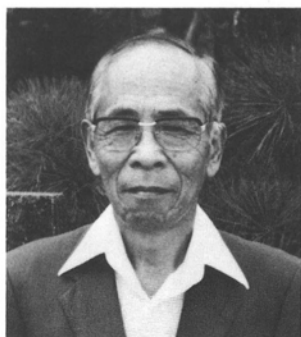
琴海支部役員



琴海支部役員



琴海西海支部
支部長 西村正昭



多良見西支部役員



多良見西支部長 松尾 豊



多良見西部役員



多良見西支部役員



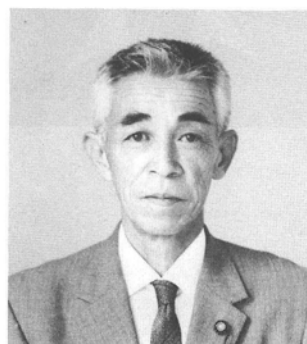
多良見西支部役員



多良見西支部役員



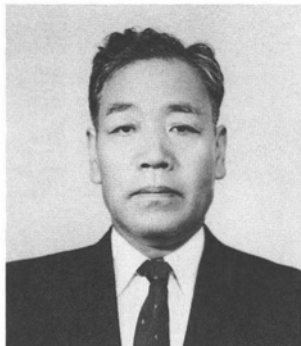
多良見西支部役員



多良見西支部役員



瑞穂副支部長 三戸崎健一



瑞穂支部長 川井 汀



瑞穂支部役員



瑞穂支部役員



瑞穂支部役員



国見支部役員



口之津支部役員



有明支部役員



布津支部役員



北有馬支部役員



吾妻支部役員



南串山副支部長 竹下 馨



南串山支部長 山下孝次



西有家支部役員



南有馬支部長 中村栄秀



加津佐支部役員



千々石支部役員



深江支部役員



小長井支部役員



森山支部役員



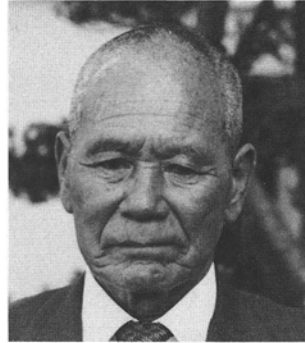
高来西支部役員



川棚支部役員



福江支部役員



福江支部長 山田長次郎



福江支部役員



福江支部役員



福江支部役員



岐宿支部長 久保甚太郎



岐宿支部役員



岐宿支部役員



奈良尾支部役員



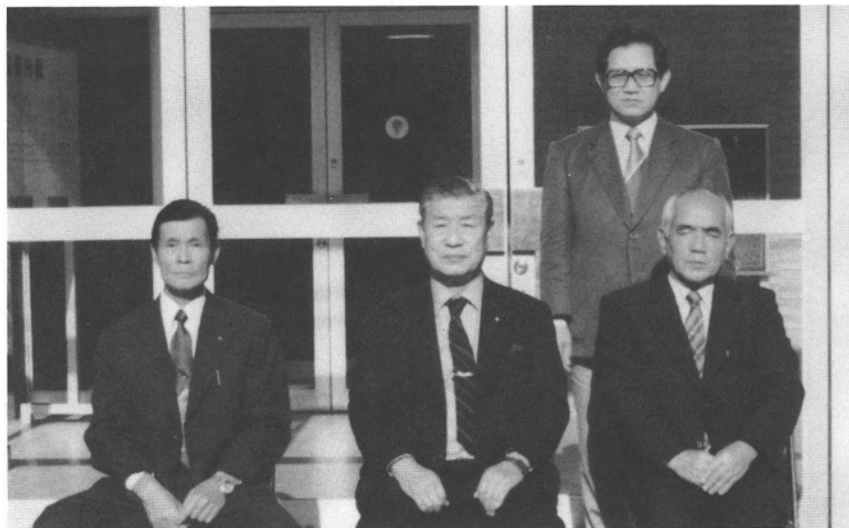
岐宿支部役員



玉ノ浦支部長 白浜太郎



奈留支部長 木高爲八



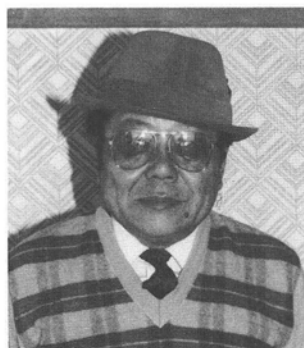
有川支部役員



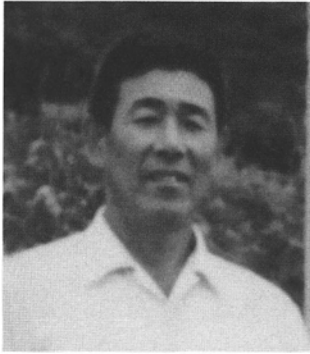
富江支部役員



小佐々支部長 田中幸市



田平支部長 浦田英秋



世知原支部役員



宇久支部長 田向善興



世知原支部役員



上対馬支部長 古藤 栄



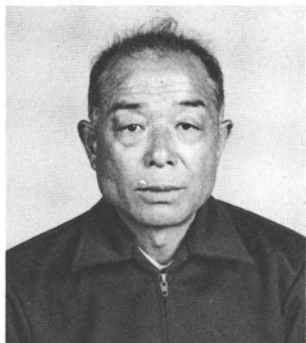
上対馬支部役員



上対馬支部役員



美津島支部役員



上対馬支部役員



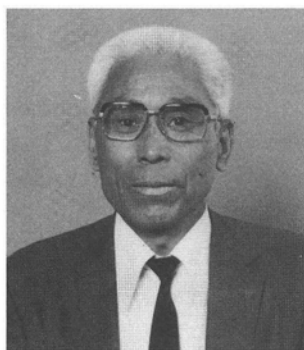
上対馬支部役員



上対馬支部役員



上対馬支部役員



巖原支部長 本田 清

友の会記録の部

被爆者手帳友の会結成趣意書

どんなに私達の要求が正しくとも、圧力団体とならない限り、現代の社会では要求を貫徹することが出来ません。サンフランシスコ講和会議においては、私達原爆被災者個人個人のもつ、賠償請求権を日本政府が私達に

んの相談もなく放棄したことは衆知の事実であります。ジュネーブ条約では毒ガス等による大量殺リクを禁じておりますが、長崎、広島ではあの恐るべき原子爆弾によって、無くなる市民に三十万の爆死者、二十万に及ぶ被災者を生じたのであります。勿論これは国際法に反し、人類の生存権に対する挑戦であります。

しかるに政府の原爆被災者に対する施策は不十分なる医療法があるだけで、その戦争災害の甚大なわりに、お粗末な限りであります。又原水禁運動の派手な反面、被災者はなおざりにされ、その声は反映されなかつたのです。周囲を見て下さい。農地報償問題、引揚者問題、軍人軍属の援護問題等々戦後処理は殆んど解決したではありませんか。

戦後処理で残っているものは只ひとつ原爆被災者の補償問題です。被爆者の皆さま、今こそたち上つて、そして団結して、なき肉親の石碑なりとも、法事の費用なりとも、獲得しようではありませんか。又被爆者の物心両面に亘る、ハンディを取り除こうではありませんか。

私達は、今から十年前、捨てて顧みられなかつた、学徒動員の補償を勝ち取った唯一の団体です。

私達はその尊い体験と、組織力を一般被爆者のために奉仕したいと思ひ、ここに被爆者援護法の制定のために、被爆者手帳友の会を発足させるものであります。

記

- 一、原爆死没者に弔慰金、遺族年金を支給すること。
- 一、二料以内にて於いて被爆したものに障害年金を支給すること。
- 一、同 被爆者に特別手帳を交付すること。
- 一、同 被爆者に健康管理手当を支給すること。
- 一、原爆による家、家財の焼失者に見舞金を支給すること。

昭和四十二年六月十八日

被爆者手帳友の会会則

第一条 本会を被爆者手帳友の会と呼び事務所を長崎市

坂本町八の二九におきます

第四条 本会に左の役員をおきます

会長一名、副会長四名、監事二名、事務局長、

第二条 本会は左の事業を行います

会計各一名、理事若干名、理事長、常務理事各

1 被爆者援護法の制定を推進します

一名

2 被爆者の相互扶助・親睦を図り明るい市民生活

第五条 役員は左の方法により選出します

を送ることを促進します

1 会長、副会長、監事は総会で選出します

3 被爆者の社会的・経済的地位の確立に努力しま

2 事務局長、会計、理事、理事長、常務理事は会

す

長の指名によります

第三条 本会はつぎのもので会長の承認によつて会員と

3 役員任期は二年とし再任を妨げません

なつたもので構成します

第六条 本会に左の決議機関をおきます

1 被爆者手帳をもっている人

1 総会は年一回招集し、最高の決議機関であつて

2 原爆により肉親を死亡させた人

予算、事業報告、役員、会則の議決を致します。

3 本会の趣旨に賛同し本会に献身的な奉仕をする

ただし、代表者大会をもつて総会にかえること

人

が出来ます

本会に入会するものは入会申込書を提出します

2 理事会は総会につく決議機関です

会長は不適當と思われる人に入会を拒否するこ

3 総会、代表者大会、理事会は出席者の過半数を

とが出来ます

もつて議決します

第七条 本会は必要な地域に支部を作ることが出来ます

支部規約は本部会則に準じます

第八条 本会の収入は左の方法によります

1 会費は年額二百円とします

2 本会の趣旨に賛同する人より寄付金を受けることが出来ます

3 県・市等公共団体より助成金を受くることが出来ます

第九条 本会の会計年度は毎年六月一日に始まり翌年五月三十一日で終わります

第十条 本会則は昭和四十二年六月十八日より発効し、総会の議決をもって改正します

《昭和42年度》

国の予算額 二十八億円

国会陳情

二回

理事会

二回

地域集会（長崎市内）

一六ヶ所

〃（佐世保市内）

一ヶ所

〃（南高）

一ヶ所

42・8・8 第一回被爆者援護法推進総決起大会

昭和四十二年六月十八日県青少年センターにおいて、長崎県動員学徒犠牲者の会員が主体となつて被爆者手帳友の会の発会式を行い、被爆者援護法を勝ち取るには、組織を強化し、会員の増強を計ることが先決であると考え、組織づくりに努力した。

第一年度は、動員学徒として、事業所に従事させられた本人ならびにその遺族が率先して、長崎市内から地域集会を始めた。

注 友の会の会計年度は、毎年六月一日から翌年五月三十一日までであるが、行事の年度は、暦年（二月一日から十二月三十一日まで）としました。

昭和42年度決算書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費	473,100	旅費	37,200
寄附金	44,920	人件費	70,000
助成金	100,000	会議費	182,897
見舞金	37,813	通信費	26,084
		印刷費	53,050
		消耗品費	2,655
		行動費	124,260
		雑費	23,620
		見舞金	37,813
		次期繰越金	98,254
合計	655,833	合計	655,833

《昭和43年度》

国の予算額 四五億円

国会陳情 一回

理事会 三回

支部代表者大会 一回

地域集会 五三ヶ所

43・2・26 被爆者手帳交付審査委員会の発足について

市長交渉

〃・5・18 原子力艦隊入港についての要望書提出

第二年度は、地域集会を強力に推進した結果会員は、初年度より大幅に増加したが、まだ、まだ政治家を電話一本で動かすまでには、ほど遠い数であった。

本年度から特別措置法が成立されたが会としては非常に不満であるが、医療保障より生活保障へと前進したことは、一応認められるとして評価した。

昭和43年度決算書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年繰越	98,254	旅費	720,543
会費	1,726,110	人件費	143,000
寄付金	31,870	地区集會費	194,807
手数料	276,000	行議費	281,413
特別カンパ	16,550	行動費	67,874
助成金	250,000	印刷費	62,020
雑収入	5,538	通信費	115,618
援助法推進大会	100,000	消耗品費	7,759
		雑費	21,235
		還元金	150,300
		次年度繰越	639,753
		援助法推進	100,000
		大会諸経費	
合計	2,504,322	合計	2,504,322

《昭和44年度》

国の予算額 六〇億円

国会陳情 二回

地域集会 五五ヶ所

44・11・3 第一回執行部会

44・11・11 亜熱帯植物園視察（野母崎町）

44・12・29 近距離被爆者対策委員会

三年目には、二万五、〇〇〇名の会員となり、目標人員三万名の会員へあと一押しのところまでとなった。

さて、今年は、特別措置法から援護法へと前進させるために、国会政府に対して陳情攻勢をかける年だと思ふ。

被爆者の援護運動は、まだ二合目附近をうろちよろしていると云えるでしょう。本年四月から特別被爆者が死亡した場合は、葬祭料として一万円が支給されるようになった。（新設）

昭和44年度決算書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
繰越金	639,753	人件費	225,000
寄付金	1,135,235	会費	1,027,350
助成金	236,480	国旅費	230,335
雑収金	650,000	普通信	116,355
	16,728	刷品	288,200
		消耗品	9,530
		会議費	70,950
		行交費	220,821
		還通費	39,120
		雑元費	227,650
		備支出	59,460
		預品	77,500
		費金	85,925
合計	2,678,196	合計	2,678,196

《昭和45年度》

国の予算額 七一億円

国会陳情

七回

地域集会

四一ヶ所

執行部会

五回

45・3・1 広島遺族団来崎

(記念像前)

44・4・11 近距離被爆者対策委員会

(宝来軒)

倉成、中村代議士外二十二名

44・4・26 亜熱帯植物園視察(野母崎町、参加者一三〇名)

44・5・16 原爆養護ホーム落成式

44・7・29 被爆者代表懇談会

44・8・19 国会議員との懇談会

(青雲閣)

44・10・8 淡路島参列団出発

(記念像前)

44・11・3 動員学徒役員会

(福祉会館)

44・11・25 県市事務打合せ

(原爆福祉会館)

44・12・2 知事面会

(県庁知事室)

過去三ヶ年全力を傾注して活動しても政府の壁の厚さは、打ち破る事が出来なかった。今後の活動の柱として、
第一に、近距離被爆者対策委員会を設置すること。

二キロ以内の直接被爆者が特に異常に影響を受けていることが厚生省の調査で明らかであるので、さらに、裏付として具体的な資料を作り、被爆者の援護措置を早急に、法制化させようというものであります。
第二に、被爆者援護審議会を国会内に設置させる請願を強力に行うというものであります。
今後の国会陳情は、この二点を主軸として遂行する事とした。

昭和45年度決算書

収入の部			支出の部		
科目	金額		科目	金額	
繰越金	885,925		人件費	591,228	
会費	1,861,600		国会請願費	651,205	
助成金	700,000		普通旅費	275,110	
寄付金	319,527		通信費	131,865	
雑収入	17,648		消耗品費	13,440	
雑収入	6,000		刷印費	254,050	
			議会費	307,152	
			支部還元費	414,700	
			雑費	212,491	
			払金	246,000	
			備品費	102,363	
			次年度運用費	591,096	
合計	3,790,700		合計	3,790,700	

《昭和46年度》

国の予算額 八六億円

国会陳情

六回

地域集会

三〇ヶ所

46・1・20 宮原事務局長歓迎会

本年度の運動の重点項目について

(一) 新しく法制定を要求するもの

1 被爆者援護法の早期制定

原爆傷害者に障害手当を、爆死者に弔慰金を

被爆困窮者に生活保証を、家、家財焼失者に

見舞金を

(二) 現行法の改正を要求するもの

1 原爆医療法について

○被爆者全員に特別手帳を

○被爆二世に一般手帳を、健康管理および放射

能影響調査を

○その他

2 特別措置法について

○近距離被爆者(二キロ以内の直接被爆者)を

特別手当支給対象者とする

○各種手当の所得制限撤廃

○その他

昭和46年度決算書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
繰越金	591,096	人件費	922,919
会費	1,918,550	国旅費	378,178
助成金	700,000	普通通信費	235,100
寄付	347,050	消耗品費	203,026
雑収	193,508	印刷費	24,989
		印会費	294,900
		支部費	239,394
		支雑費	425,005
		繰越金	230,970
			795,723
合計	3,750,204	合計	3,750,204

《昭和47年度》

国の予算額 一一五億円

国会陳情

四回

地域集会

七二ヶ所

一、運動の成果について

健康管理手当の年令を五十五才以上に引き下げ

所得制限を四八、四〇〇円まで引き上げ

金額を四、〇〇〇円に、医療手当を夫々一、〇〇〇

円増額

葬祭料を六、〇〇〇円増額して一六、〇〇〇円とし

た

二、地域集会の活動について

昭和46年6月から47年5月までに長崎市内を始め郡

部支部において運動の主旨、その成果の報告、医療法、

特別措置法等の改正点の説明会を七二ヶ所で行い好評

を得た。

三、支部結成の活動について

長崎市内を小学校区毎に、編成替えを強力に推進し

て来たが、やっと四〇％（二〇支部）の結成が出来た。

昭和47年度決算書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
繰越金	795,723	人件費	1,138,395
会費	2,119,400	国會請願費	352,620
助成金	700,000	普通旅費	268,740
寄付	467,788	通信費	145,454
雑収入	49,248	消耗品費	20,733
		印刷費	260,750
		会費	446,860
		支部助成費	503,215
		雑支費	219,318
		予備費	776,074
合計	4,132,159	合計	4,132,159

《昭和48年度》

国の予算額 一三三億円

国会陳情

九回

地域集会

六〇ヶ所

一、運動の成果について

1 昭和48年4月1日から所得税制限が七一、〇七〇円までに緩和された。

2 健康管理手当が昭和48年10月1日から満50才に引き下げられた。

3 特別手当が月額一一、〇〇〇円と五、五〇〇円に

4 医療手当が月額七、〇〇〇円と五、〇〇〇円に

5 健康管理手当が月額、五、〇〇〇円に引き上げられた。

しかし、介護手当や葬祭料は据置かれた。

二、地域集会活動について

昭和47年6月から昭和48年5月までに長崎市内を始め各支部において、役員会、総会等を開催し、運動の主旨、その成果を報告又医療法、特別措置法の改正点の説明会を六〇ヶ所で行い好評を得た。

三、支部結成活動について

支部結成は遅々として進まず僅か八支部程度が結成された。

昭和48年度決算書

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額		科 目	金 額	
繰 越	776,074	人 件 費	885,212		
金 費	3,152,800	陳 情	627,278		
成 付	650,000	普 通 旅	464,244		
寄 収	483,691	通 信	177,297		
雜 入	56,807	印 刷 品	430,300		
		備 耗 品	67,970		
		消 耗 品	21,900		
		會 議	246,800		
		光 熱 水	11,338		
		雜 支 出	215,945		
		繰 越	1,300,000		
		金 金	671,088		
合 計	5,119,372	合 計	5,119,372		

《昭和49年度》

国の予算額 一五五億円

国会陳情

六回

地域集会

六五ヶ所

一、運動の成果について

1 原爆手帳が一本化された。

2 長与、時津が直接被爆地に指定された。

3 諸手当が増額された。

4 所得制限が緩和された。

5 年令制限が引き下げられた。

6 障害の種類が二つ増えた。

二、地域集会活動について

支部で総会を行ったのは六五支部で本部から役員が

出席して被爆者援護の状況や今後の運動の進め方等又

法改正の説明を行い参会者の方から喜んで頂いた。

三、支部結成について

前年同様余り香ばしい成果が挙げらず、誠に残念でし

た。対馬、北松、東彼、宍岐方面で支部結成が出来た。

四、相談業務について

手帳交付申請、特別手帳への切替え、各種手当の申請等、本部事務所で扱った件数は、三五三件でした。

昭和49年度決算書

収入の部			支出の部		
科目		金額	科目		金額
繰	越	金	人	件	費
会		費	行	動	費
助	成	費	陳	情	費
寄	付	金	普	旅	費
雑	収	入	通	信	費
			印	刷	費
			消	品	費
			会	議	費
			光	熱	水
			繰	出	金
			雑	支	出
			繰	越	金
合	計	7,932,050	合	計	7,932,050

《昭和50年度》

国の予算額 二五五億円

国会陳情

九回

地域集会

七五ヶ所

一、運動の成果について

1 保健手当と家族介護手当が新設された。

2 年令制限が撤廃された。

3 諸手当が大幅に増額された。

4 所得制限の税額が引き上げられた。

二、支部結成と地域集会について

長崎市内では西城山、城山、本原、西北、西町等が結成され県下では西有家、有明、大村市も結成された。

会員の方々と連携を密にするため地域集会を県下各地で開催したのは七五支部でした。

三、相談業務について

手帳交付申請等の相談業務は、本部事務所で扱った件数は、手当申請関係が四二八件、認定患者関係が七

〇件、合計四九八件でした。

昭和50年度決算書

収入の部			支出の部		
科目		金額	科目		金額
繰越	金	1,357,107	人件費		1,843,000
会助	費	9,889,200	行動		675,957
委	金	852,000	陳情	旅	920,500
寄	金	300,000	普通	旅	848,543
寄	金	844,800	通	信	720,994
雑	入	87,449	印	刷	720,994
			備品	及消耗品	1,285,460
			会	議	133,140
			光熱	水	794,280
			支	助	30,737
			部	成	1,410,400
			繰	出	2,000,000
			出	支	792,350
			金	越	1,875,195
			繰		
合計		13,330,556	合計		13,330,556

《昭和51年度》

国の予算額 三六九億円

国会陳情

五回

地域集会

一〇三ヶ所

一、運動の成果について

1 被爆地域是正要求が一部認められた。

2 各種手当が増額された。

3 所得制限が緩和された。

二、支部結成および地域集会について

長崎市内では立神、西山三丁目、小ヶ倉、南大浦等が結成された。

県下では、諫早市、大村市、佐世保市の各市内を学区区で組織の再編成、諫早市内では七支部、大村、

佐世保市内で五ないし六支部に編成替えをした。

会員との連携を密にするため地域集会を県下各地で開催したのは一〇三支部でした。

三、相談業務について

手帳交付申請についての相談等本部事務所で扱った

昭和51年度決算書

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前年度繰越	3,875,195	人件費	2,710,500
会費	12,926,700	旅費	531,042
助成金	820,000	通旅費	1,166,700
委託付収	500,000	通議費	652,865
寄附	797,717	雑費	992,547
雑収入	251,781	備品消耗品費	578,115
		印刷費	330,115
		通信費	1,243,900
		水道熱費	691,918
		仮払金	54,486
		還元金	108,000
		交際費	3,060,600
		記念事業予託金	1,069,325
		次年度繰越金	4,000,000
			1,981,280
合計	19,171,393	合計	19,171,393

件数は五三二件でした。

《昭和52年度》

国の予算額 四三六億円

国会陳情

一一回

地域集会

九七ヶ所

52・5・28 支部代表者大会 (宝来軒 二〇〇名出席)

〃・7・24 拡大理事会 (日 赤 一〇二名出席)

〃・8・30 〃 (日 赤 九八名出席)

〃・8・5 「長崎の鐘」除幕式 (平和公園 六〇〇名参

加)

〃・8・14 平和大行進参加 (平和公園 三〇〇名参

加)

一、運動の成果について

1 各種諸手当の増額

2 所得制限の緩和

二、支部結成と地域集会について

長崎市内に四一支部結成されている、諫早、大村、

佐世保の三市内を各校区単位で組織づくりをし、諫

早は七支部中六支部が出来上り、大村は三地域に分

け、佐世保も七支部に編成して各地区の組織づくり

に専念した。

会員との連携を密にするため地域集会を県下各地で開催したのは九七支部でした。

三、相談業務について

手帳交付申請についての相談業務は、本部事務所で五四八件を扱った。

昭和52年度決算書

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	5,981,280	人件費	2,077,500
会費	16,924,400	人請願旅費	1,478,290
助成金	820,000	普通旅費	2,214,775
委託金	600,000	交通費	857,475
寄付金	545,000	食糧費	338,080
仮受金	0	印刷費	1,494,650
雑収入	225,203	印通費	703,678
		会議費	1,397,886
		消耗品費	91,240
		水道光熱費	70,471
		還元金	3,363,700
		借上料	504,200
		仮払金	108,000
		備品費	322,000
		慶弔交際費	1,167,290
		雑費	658,436
		長崎の鐘	2,005,995
		十周年記念費	1,456,900
		十周年記念予託金	2,000,000
		次年度繰越金	2,785,317
合 計	25,095,883	合 計	25,095,883

《昭和53年度》

国の予算額 五三九億三千万円

国会陳情

八回

53・7・30 口ノ津支部慰霊碑除幕式

〃・8・5 原爆殉難者慰霊祭（平和公園 二、〇〇〇名

参加）

〃・8・13 全国戦没者追悼式 （東京武徳殿 八名）

〃・9・17 特別養護ホーム発起人会（西彼町 一〇〇名

出席）

〃・9・19 県議会傍聴 （県議会 一〇〇名

出席）

〃・10・10 むつ反対総決起大会

〃・11・25 特養ホーム関係者理事会

一、運動の成果について

○各種手当の増額 ○所得制限の緩和

二、支部組織拡大状況と地域集会について

○長崎市内の支部結成が不十分なので、極力努力し

ましたが、充分の成果をあげることが出来なかつ

た。しかし、大村支部の組織拡大が飛躍的に前進

を見たことは評価すべきであります。

○会員の福祉と会の発展のため各支部との連携を密にし総会、説明会を県下各支部で開催した。

三、相談業務について

被爆者手帳の申請、各種手当等について、相談会を

実施、会員から好評を受けた。

1 手帳の申請、各種手当等の相談件数 六八〇件

2 健康診断受診者証切替件数 四八五件

昭和53年度決算書

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	6,150,217	人件費	2,237,000
会費	21,051,350	請願旅費	2,180,400
助成金	770,000	普通旅費	3,006,210
委託金	600,000	交通費	1,045,125
寄付金	768,330	食糧費	553,495
雑収入	6,180	印刷費	1,909,120
	412,469	通会信費	1,330,760
		会議費	1,887,959
		消耗品費	61,465
		水道光熱費	63,468
		還元金	4,619,200
		事務所借料	432,000
		仮払金	108,000
		備品費	110,900
		慶弔・交際費	1,697,538
		雑費	592,931
		十周年記念費	1,246,900
		組織助成金	1,447,570
		次年度繰越金	5,228,505
合 計	29,758,546	合 計	29,758,546

《昭和54年度》

国の予算額 六六三億七千万円

国会陳情

八回

拡大理事会

四回

特養ホーム理事会

二回

54・2・2 原爆病院運営委員会

〃・2・19 知事陳情

〃・4・17 県市被爆三団体協議会

〃・6・13 近距離被爆者対策委員会 (日赤支部)

〃・6・25 原爆被爆者対策協議会(ニュー長崎ホテル)

〃・8・8 官房長官陳情 (東急ホテル)

〃・8・9 原水禁大会 (市民会館 八〇名参加)

〃・8・13 全国戦没者追悼慰霊祭

〃・9・3 久保知事へ陳情 (被爆地域是正)

〃・10・20 認定患者問題協議会 (日赤支部)

〃・11・9 朝鮮人被爆者懇談会 (勤労会館)

〃・12・8 特養ホーム「かめだけ」起工式 (西彼町)

〃・12・12 高田副知事と会見 (被爆地区是正代表者)

一、運動の成果について

1 各種手当の増額

2 所得制限の大巾緩和

二、支部組織拡大状況と地域集会について

○支部組織拡大

長崎市三原支部結成 支部長 片岡 弥吉

福江支部結成 支部長 山田長次郎

○地域集会活動

会員との連携を密にし、特別措置法を中心に説明会

等を県下各支部で開催した。

三、各地域出張相談業務

被爆者手帳、各種手当の申請等、相談会を実施し、

会員からの好評を得た。

本部での取扱件数は、次のとおりでした。

○手帳申請および諸手当等の相談件数 一、〇七二件

○健康診断受診者証切替申請 一四七件

昭和54年度決算書

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	5,336,505	人件費	2,380,000
会費	21,478,800	人請願旅費	866,680
助成金	950,000	普通旅費	2,448,000
委託金	600,000	交通費	821,467
寄付金	1,481,000	食料費	315,190
雑収入	0	印刷費	1,324,030
	390,153	通信費	1,289,963
		会議費	1,858,851
		消耗品費	63,540
		水道光熱費	80,824
		還元金	4,768,100
		事務所借料	406,000
		備品費	106,072
		慶弔・交際費	752,530
		雑費	457,010
		十周年記念費	0
		組織助成金	2,300,000
		かめだけ寄付金	1,000,000
		次年度繰越金	8,998,201
合 計	30,236,458	合 計	30,236,458

《昭和55年度》

国の予算額 八三九億円

国会陳情

拡大理事会

三団体連絡協議会

被爆地区是正協議会

55・4・11 原爆被爆者基本問題懇談会（東急ホテル）

〃・5・11 千々石原爆慰霊碑落成式

〃・5・13 支部代表者大会

〃・8・5 原爆特養ホーム「かめだけ」落成式

〃・8・8 原水禁大会

〃・8・9 原爆殉難者慰霊祭

〃・8・15 全国戦没者追悼慰霊祭

〃・9・30 原爆病院（旧製鋼所跡地に決定）

〃・12・13 新原爆病院起工式

一、運動の成果について

○宿願の原爆病院予算獲得

○特別養護ホーム着工六月未完成

○各種手当のアップ

○所得制限の緩和

二、相談業務について

被爆者手帳、各種手当の申請、受診者証の切替等を

重点として実施し、会員から好評を得た、本部での取

扱件数は次のとおり

○手帳申請および諸手当の相談件数 四二一件

○健康診断受診者証切替申請 二八三件

昭和55年度決算書

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	8,998,201	人件費	2,398,700
会費	21,220,250	人情旅費	1,246,780
助成金	1,000,000	普通旅費	2,203,368
委託金	600,000	交通費	701,028
寄附金	776,400	食糧費	413,441
雑収入	475,543	印刷費	1,820,700
		通信費	1,360,685
		会議費	1,808,223
		消耗品費	42,705
		還元金	4,347,700
		事務所借料	276,000
		備品費	0
		水道光熱費	111,057
		慶弔交際費	361,600
		雑費	574,829
		組織助成金	2,235,000
		かめだけ落成費	2,000,000
		次年度繰越金	11,168,578
合 計	33,070,394	合 計	33,070,394

《昭和56年度》

国の予算額 九五五億円

国会陳情

八回

拡大理事會

五回

原爆病院運営委員會

二回

56・2・11 県央地区ホーム設立世話人会

〃・2・16 被爆地区是正のため保険部長へ陳情

〃・4・3 被爆地区是正協議會

〃・5・4 名古屋、広島、沖繩戦争犠牲者と共同行動

〃・5・20 支部代表者大会

〃・7・21 原爆特養ホーム〃かめだけ〃設立一周年記念

〃・8・7 全国戦争犠牲者国家補償要求長崎大会

(長崎新聞社)

〃・8・9 原水禁長崎大会

〃・8・15 全国戦没者追悼慰霊祭

〃・11・11 全国戦争犠牲者国家補償要求中央行動

(衆議院第二議員会館)

〃・12・14 ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー

(特養ホーム〃かめだけ〃)

一、運動の成果について

1 医療特別手当の新設

2 認定患者の所得制限撤廃

3 近距離被爆者のうちケロイド、身体障害者、孤

老に対する保健手当加算分(新設)

4 各種手当の増額

5 新原爆病院の着工

相談業務について

本部での取扱い件数

○手帳申請および諸手当の相談件数 四五〇件

○健康診断受診者証切替申請件数 一八五件

昭和56年度決算書

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	11,168,578	人件費	2,966,200
会費	21,444,100	陳情旅費	1,055,740
助成金	850,000	普通旅費	2,711,515
委託金	700,000	交通費	1,029,803
寄付金	304,600	食糧費	447,588
雑収入	338,270	印刷費	1,677,000
		通信費	1,916,310
		会議費	2,213,435
		消耗品費	121,206
		還元金料	4,262,800
		事務所借料	276,000
		備品費	326,200
		水道光熱費	127,972
		慶弔交際費	1,150,260
		雑費	662,128
		振替手数料	26,820
		全国戦争犠牲者大会費	920,460
		組織助成金	221,572
		15周年記念事業費へ繰出金	2,500,000
		次年度繰越金	10,192,539
合 計	34,805,548	合 計	34,805,548

《昭和57年度》

国の予算額 九九一億

国会陳情

三回

拡大理事會

五回

57・1・7 被爆地区是正協議會

〃・1・16 初村滝一郎労働大臣就任祝賀會

(長崎新聞社ホール)

〃・1・20 川棚海軍病院救護班手帳申請

〃・1・21 第一回非核同盟會議 (日赤支部)

〃・2・9 原爆病院運営委員會 (日赤支部)

〃・2・27 原水禁県民連絡會議 (労働会館)

〃・3・21 広島反核大集會

〃・4・10 創立十五周年記念

(功労者表彰、記念祝賀會、タイムカプセル、その他)

〃・5・8 県原水禁連絡會議

〃・6・8 支部代表者大会

〃・6・29 佐世保大空襲慰靈祭

〃・7・19 原水禁長崎支部結成総會

57・7・23 長崎大水害

〃・8・9 原爆犠牲者慰靈祭

〃・8・9 全国戦争犠牲者懇談會

〃・8・15 全国戦没者追悼慰靈祭

〃・9・26 原水禁シンポジウム (日赤支部)

〃・10・4 核再処理工場反対県民共闘會議(勤労会館)

〃・10・15 原水禁市民會議 (勤労会館)

〃・10・19 放影研落成式

〃・10・24 旧三菱兵器製作所生き残りの集い

〃・11・10 原爆特養“かめだけ”理事会 (長崎大学中部講堂)

〃・11・23 長崎県から優良団体の表彰を受く

〃・11・29 原爆病院落成式

昭和57年度決算書

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	10,192,539	人件費	3,062,000
会費	23,464,100	人情旅費	538,550
助成金	1,515,000	普通旅費	2,355,140
寄付金	422,567	交通費	1,084,720
雑収入	576,462	食糧費	340,911
		印刷費	1,553,600
		通会信議費	1,877,470
		会費	2,489,395
		消耗品費	126,805
		還元費	4,427,100
		事務所借料	253,000
		備品費	63,800
		水道光熱費	139,112
		水慶弔交際費	856,760
		雑費	1,144,397
		振替手数料	30,430
		組織助成金	1,856,500
		観桜会費特別会	800,000
		計へ繰出金	
		「かめだけ」ホーム	6,500,000
		貸付金	
		次年度繰越金	6,670,978
合 計	36,170,668	合 計	36,170,668

《昭和58年度》

国会陳情

二回

地域集会

四八ヶ所

拡大理事會

三回

58・1・16 被爆二・三世に対するシンポジウム

58・2・15 原爆病院運営委員会

58・3・12 原水禁連絡会議

(勤労會館)

58・3・21 エンプラ反対佐世保集會

58・4・13 支部代表者大会

(日赤支部)

58・7・21 ホーム設立三周年記念

58・7・22 原水禁理事會

58・8・7 第三回全国戦争犠牲者代表者會議

58・8・9 原爆犠牲者追悼慰靈祭

58・8・9 第二回生き残りたる吾等集いて

58・8・17 被爆地区是正協議會

58・9・27 深掘義昭副會長国連原爆展へ

58・11・18 “しいたけ”を喰べ癌を追放する會発會式

(特養ホーム“かめだけ”)

58・12・24 ベトナム難民を迎えてクリスマスパーティー

(特養ホーム“かめだけ”)

昭和58年度決算書

収 入 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
前年度繰越金	6,670,978	人件費	4,833,046
会費	24,783,600	人情旅費	1,089,280
助成金	1,480,000	普通旅費	2,207,690
寄付金	226,226	交通費	1,673,706
雑収入	2,251,253	食糧費	438,513
		印刷費	1,592,500
		通信費	1,741,650
		会議費	2,008,816
		消耗品費	92,570
		還元金	4,565,400
		事務所借用料	299,000
		備品費	15,920
		水道光熱費	132,138
		慶弔交際費	1,168,216
		雑費	1,524,738
		振替手数料	34,740
		組織助成費	726,160
		創立20周年事業 繰出金}	5,000,000
		次年度繰越金	6,267,974
合 計	35,412,057	合 計	35,412,057

資料の部

(一) 制度の概要

一、原子爆弾被爆者の医療等に関する法律

一、制定昭和32年3月31日

施行昭和32年4月1日

二、同法の目的

広島市及び長崎市に投下された原子爆弾の被爆者が今なお置かれていた健康上の特別の状態にかんがみ、国が被爆者に対し、健康診断と必要な医療を行うことによりその健康の保持及び向上を図ることを目的としている。

三、被爆者の範囲

被爆者は「被爆者健康手帳」を本人が居住する都道府県知事（広島市又は長崎市にあつては当該市の長）に申請し、その交付を受けることにより同法上の被爆者となる。被爆者の範囲は次のとおりである。

ア 直接被爆者（一号）原爆が投下された際、当時の

広島市内、長崎市内又は一定

の隣接区域で直接被爆した者

イ 入市者（二号）原爆が投下されてから二週間

以内（広島市にあつては8月

20日長崎市にあつては8月23

日まで）にアの区域のうちの

一定区域内にあつた者

ウ 死体処理及び救護に当たつた者等（三号）

原爆が投下された際又はその

後身体に原爆放射能の影響を

受けるような事情の下にあつ

た者

エ 胎児（四号）前記ア、イ、ウの被爆者の胎

児であつた者

四、同法による措置

(一) 健康診断

被爆者の健康管理のために、全被爆者を対象に年

間に定期二回希望二回計四回の健康診断を実施することとし、一般検査のほか、医師が必要と認める者に対しては、精密検査（病院等に収容して行う収容検査を含む）を行っている。なお、三の被爆者でなくとも広島、長崎に原爆が投下された際、三のAの区域に隣接する一定の区域内にあった者とその者の胎児であった者については、当分の間この健康診断が行われる。

(二) 医療の給付

医療の給付には、認定疾病に対する医療の給付と一般疾病に対する医療の給付とがある。

(1) 認定疾病医療

原爆の傷害作用に起因する負傷又は疾病で、厚生大臣が認定したものに對する医療の現物給付であつて全額国費をもつて行つてゐる。

また、原爆の傷害作用に起因する負傷又は疾病には、白血病、白血球減小症、肝臓機能障害等があり、被爆者の申請に基づき、原子爆弾被爆者医療審議会の意見を聴いて厚生大臣が認定することとしている。

(2) 一般疾病医療

被爆者の負傷又は疾病（認定疾病、先天性疾病を除く）に對する医療費の支給であつて、健康保険、国民健康保険、その他いわゆる社会保険又は公費負担による医療制度の給付を受けることができる場合は、その給付の額を控除した残額を限度として支給するものである。

2、原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律

一、制定昭和43年5月20日

施行昭和43年9月1日

二、同法の目的

広島市及び長崎市に投下された原子爆弾の被爆者であつて、原子爆弾の傷害作用の影響を受け、今なお特別の状態にある者に対し、特別手当の支給等の措置を講ずることにより、その福祉を図ることを目的としている。

三、同法による措置

(一) 特別手当の支給

認定被爆者が有する特別の需要をみたすため、認定に係る負傷又は疾病の状態にあるものに対し、所得に応じて特別手当を支給する。

(二) 健康管理手当の支給

被爆者のうち、造血機能障害、肝臓機能障害、細胞増殖機能障害、内分泌腺機能障害、脳血管障害、循環器機能障害、腎臓機能障害、水晶体混濁による視機能障害、呼吸器機能障害、運動器機能障害及び潰瘍による消化器機能障害を伴う疾病にかかっているものに対し健康管理手当を支給する。

(三) 保健手当の支給

被爆者のうち、原爆が投下された際、爆心地から二キロメートルの区域内にあつた者と、その者の胎児であつた者は、特に多量の放射線を浴びており、現に疾病を有しない場合でも日常生活上、疾病予防及び健康の保持増進に特段の注意を払うことが必要

であるため保健手当を支給する。

(四) 医療手当の支給

認定被爆者が、認定を受けた負傷又は疾病について医療の給付を受けている場合慰安又は教養の手段を与えることにより、精神的安定を図り、医療効果を高めるため、その月の受療日数等に応じて医療手当を支給する。

(五) 介護手当の支給

ア、被爆者のうち、身体障害者福祉法施行規則別表一級から三級程度の精神上又は身体上の障害のため、介護を必要とする状態にあり、かつ、介護のために費用を支出した者に対し、その月において介護を受けた日数に応じて手当を支給する

イ、被爆者のうち、身体障害者福祉法施行規則別表一級又は二級の一部程度の精神上又は身体上の重度の障害のため、介護を必要とする状態にあり、かつ、介護を受けた者に対して、その者が介護のための費用を支出しなかつた場合は、手当を支給する。

(六) 葬祭料の支給

被爆者が死亡したときは、葬祭を行う者に対し葬祭料を支給する。

支給額については各種手当等の改正経緯を参照のこと。

原爆医療法及び特別措置法の概要

(1) 原子爆弾被爆者の医療等に関する法律

(昭和32年法律第41号)

■原爆医療法による対策

○健康診断の実施(法第4条)

年4回	
定期	2回
希望	2回

一般検査の結果更に精密な検査を必要とする者については精密検査を実施

被爆者の定義

法第2条…370、594人(54・3・31現在)
1号…市内又は一定の隣接地域内で直爆2号…2週間以内に2km以内に入市

(2) 原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律

(昭和43年法律第53号)

■原爆特別措置法による対策

○特別手当の支給(法第2条)

ア、現に認定疾病の状態にある者	67、500円支給(所得税額492、600円以下)
イ、認定疾病の状態に該当しなくなった者	33、800円支給(所得税額492、600円をこえ539、900円以下の者)

イ、認定疾病の状態に該当しなくなった者33、800円支給(所得税額492、600円以下の者)

○

原爆疾病医療の給付

(法第7条)

医療機関の指定

(厚生大臣法第9条)

○

一般疾病医療費の支給

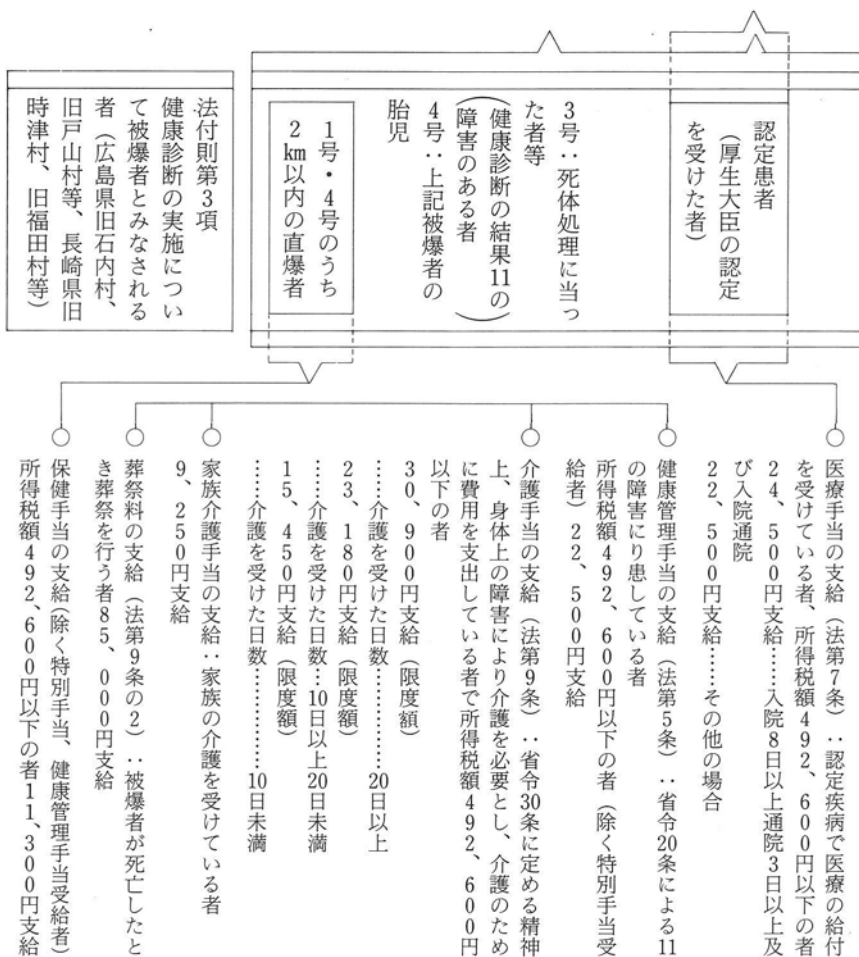
(法第14条の2)

一般疾病医療機関の指定

(都道府県知事、

法第14条の3)

その他予算措置として、被
用者保険本人一部負担医療
費の支給



各種手当等の改正経緯

区分	被 爆 者	
	一般被爆者	特別被爆者
32年	制度創設	
35		制度創設
37		1. 近距離被爆、爆心地より「2 kmを3 km」に 2. 原爆関連疾病の者「直爆から入市」を「直爆又は入市」に
39		原爆関連疾病の者「直爆又は入市」の要件で撤廃
40		1. 3日以内の入市者を加える 2. 残留放射能濃厚地区の設置
41		残留放射能濃厚地区に「長崎市新中川町」を加える
44		原爆関連疾病の者に「白内障の者」を加える
46		残留放射能濃厚地区に「長崎市岩屋町ほか50町及び長崎県西彼杵郡長興村高田郷のうち日当野地区」を加える
47	広島県安佐郡祇園町東山本ほか3地区を加える	残留放射能濃厚地区に「広島市草津浜町ほか3町及び広島県安佐郡祇園町東山本ほか3地区」を加える
48		残留放射能濃厚地区に「長崎市大浦相生町及び東琴平町」を加える
49		区分廃止

種別 対象 金額 制限 年次	医療特別手当		特別手当	
	支給対象	金額	支給対象	金額
43			①認定患者 ②現に①の認定を受けた負傷又は 疾病の状態にある者	月額 10,000円
44				所要に応じ 5,000円
45			同上	同上
46			同上	同上
47			同上	同上
48			同上	11,000円 又は5,500円
49			同上 新規認定患者で治癒した者	15,000円 又は7,500円 7,500円
50			同上 同上	24,000円 又は12,000円 12,000円
51			同上 同上	27,000円 又は13,500円 13,500円
52			①認定患者で医療が必要 ② " 必要ない	30,000円 又は15,000円
53			① 同上 ② 同上	33,000円 又は16,500円
			認定患者が治癒した者	16,500円
54			① 同上 ② 同上	60,000円 又は30,000円
			同上	30,000円
55			① 同上 ② 同上	67,500円 又は33,800円
			同上	33,800円
制度創設 56	認定患者で医療が必要な者 所得制限なし	月額 98,000円	認定患者で治癒した者	36,000円
57	"	102,400円	"	37,700円
58	"	102,400円	"	37,700円
59	"	104,400円	"	38,400円

種別 対象金額 年次	健康管理手当		保健手当			
	支給対象	金額	支給対象	金額		
制度 創設 43	1. 特別被爆者 2. 造血機能障害その他 厚生大臣の認定を受けた者 3. 次のいずれかにある者 ○65才以上 ○身体上の障害のある者 (厚生省令で定める) ○母子世帯等の世帯主 (厚生省令で定める) (厚生大臣の定める病名)	月額 3,000円				
	1. 造血機能障害 貧血症・白血病など 2. 肝臓機能障害 悪性肝炎・ヒールス性肝炎を除く 3. 細胞増殖機能障害 悪性新生物(癌など) 4. 内分泌腺機能障害 糖尿病等 5. 脳血管機能障害 脳出血等 6. 循環器機能障害 高血圧性心疾患等 7. 腎臓機能障害 慢性腎炎・ネフローゼ等					
	44		8. 視機能障害 白内障(先天性を除く)			
	45		同上	月額 3,000円		
	46		○60才以上	3,000円		
	47		○55才以上	4,000円		
	48		○50才以上	5,000円		
	49		1. 被爆者 ○45才以上 (厚生大臣の定める病名)追加 9. 呼吸器機能障害 肺気腫等 10. 運動機能障害 変形性関節症	7,500円		
	50		○年令制限なし 同上	月額 12,000円	爆心地から2km以内の直接 被爆者(制度創設)	月額 6,000円
	51		同上	13,500円	同上	6,800円

種別 対象 金額 制限 年次	健康管理手当		保健手当	
	支給対象	金額	支給対象	金額
52	同上	15,000円	同上	7,500円
53	同上 (厚生大臣の定める病名)追加 11. 消化器機能障害 潰瘍に伴うもの	16,500円	同上 特別手当、健康管理手当の 支給を受けていない者	8,300円
54	同上	月額 20,000円	同上	10,000円
55	同上	22,500円	同上	11,300円
56	同上	24,000円	同上 1. 3級以上の身障者 2. 配偶者、子、孫のいずれ もない70才以上の者 3. ケロイドの人	12,000円 } 24,000円
57	同上	25,100円	同上	12,600円 25,100円
58	同上	25,100円	同上	12,600円 25,100円
59	同上	25,600円	同上	12,800円 25,600円

種別 対象 金額 制限 年次	介護手当		葬祭料	
	支給対象	金額	支給対象	金額
43	1. 特別被爆者 2. 精神上又は身体上の障害によつて介護を受けている者 3. 介護の費用を支払っている者	日額300円	昭和44年度制度創設 特別被爆者が死亡した場合	10,000円
45	同上	介護を受けた日数に応じ 10,000円 7,500円 又は 5,000円	44年～46年まで 自殺、事故死等は認められない	
46 ＼ 48	同上	同上	昭和47～48年 同上	16,000円
49	同上	＼ 18,000円 13,500円 又は 9,000円	同上	22,000円
50	同上 家族介護手当	＼ 23,000円 17,250円 又は11,500円 4,000円	同上	33,000円
51	同上 ＼	＼ 26,000円 19,500円 又は13,000円 5,000円	同上	44,000円
52	同上 ＼	＼ 28,000円 21,000円 又は14,000円 5,500円	同上	62,000円
53	同上 ＼	＼ 29,000円 21,750円 又は14,500円 6,250円	同上	74,000円
54	同上 ＼	＼ 30,000円 22,500円 又は15,000円 8,000円	同上	80,000円
55	同上 ＼	＼ 30,900円 23,180円 又は15,450円 9,250円	同上	85,000円
56	20日以上を限度とし介護日数に応じ支給 家族介護	32,100円 10,000円	同上	97,000円
57	＼	33,600円 10,550円	同上	97,000円
58	＼	33,600円 10,550円	同上	105,000円
59	＼	35,800円 10,800円	同上	105,000円

資料の部

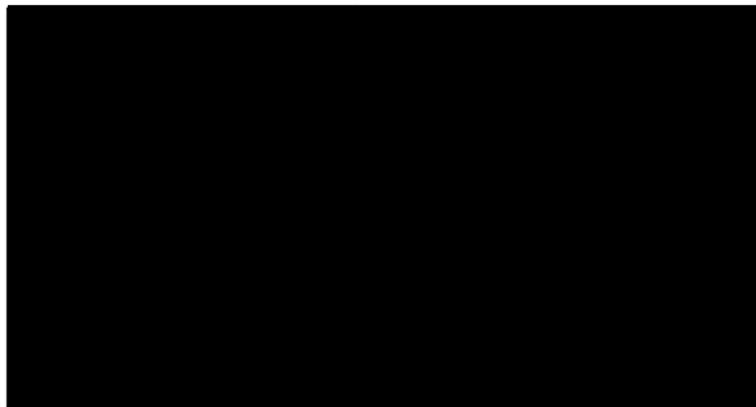
種別 対象金額 年次	医療手当		各種手当に係る 所得制限 所得税額	
	支給対象	金額		
35	認定患者で現に医療を受けている者 通院3日以上 入院8日以上 通院3日未満 入院8日未満	2,000円 又は 1,000円	35年 配偶者等 38年 本人の場合	5,660円 1,640円 以下
40	"	3,000円 又は 1,500円	本人配偶者等両者とも	17,200円
42	"	3,400円 又は 1,700円		
43	"	5,000円 又は 3,000円	44年 半額以下支給制限の創設 45年	22,700円 29,200円 又は37,000円
47	"	6,000円 又は 4,000円	47年	48,400円 又は54,700円
48	"	7,000円 又は 5,000円		71,000円 又は47,300円
49	"	9,500円 又は 7,500円		80,000円 又は86,600円
50	"	14,000円 又は 12,000円		117,500円 又は 125,000円
51	"	15,500円 又は 13,500円		183,800円 又は 195,000円
52	"	17,000円 又は 15,000円		233,600円 又は 252,100円
53	"	18,500円 又は 16,500円		354,300円 又は 380,400円
54	"	22,000円 又は 20,000円		436,800円 又は 470,100円
55	"	24,500円 又は 22,500円		492,600円 又は 539,900円
56	昭和56年6月医療特別手当制度新設 により廃止			578,100円 又は 647,500円
57				641,500円
58				698,000円
59				792,300円

その他

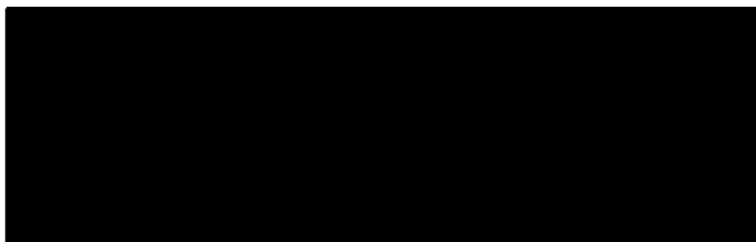
本部役員及び職員名簿（被爆者手帳友の会）

役職名	氏名
会長	深堀勝一
副会長	高尾徳一
副会長	内海武
副会長	吉田源平
副会長	深堀義昭
事務局長	伊藤三十郎
組織部長	竹馬五大洲
生活指導部長	磯田泰子
理事長	古川秀夫
常务理事	松岡国一
監事	山口一之
監事	福山一忠
相談役	正田鶴雄
相談役	佐木篤二
事務職員	有川照子
嘱託（臨時）	杉本和紀
嘱託（非常勤）	木下清人

住所



電話



昭和五十九年六月のある日突然深堀会長から電話があり、被爆者手帳友の会の記念誌を作るから手伝ってほしいとのことであった。

私は、役所をやめて自由気儘な生活をしていたので、ボランティアとしてならお手伝いしてもよいと、軽い気持ちでお引き受けしたのです。

しかし、私は、被爆者ではないし被爆者の心情とか、苦痛とか、願ひ等よくわかりませんでしたので、はじめに原爆関係の法律、いわゆる原爆二法を勉強する必要があり、あると思ひ、その方から勉強をさせて頂きました。

私は、役所での仕事が、旧軍人・旧軍属等に対する援護（恩給、年金）の請求指導・相談等でしたので、原爆二法との関連性があつた関係か、法律そのものは、わりと早くのみこめたのです。

本編の内容は、全部を七部に纏めておりまして、主なものを紹介しますと

○運動編・これは動員学徒犠牲者の会発足（昭和三十二

年十一月十日）から、被爆者手帳友の会発足（昭和四十二年六月十八日）までの経緯、例えば保健手当の新設・時津、長与、現川、中尾地区の被爆地指定・原爆特養「かめだけ」建設・原爆病院の建設等詳細に記述し、また被爆者団体としての組織づくり等に苦労したことがわかりやすく記録されております。

○被爆体験記・ご本人からご投稿いただいたものを、ありのままに掲載いたしました。

○被爆秘話・被爆者又はその遺族に対してインタビューをした記録を忠実に掲載したつもりであります、何分ルポライターの経験がありませんので、最初の頃は失敗ばかりでした。何回となく面接しているうちに、被爆者の心情・苦痛・生がいに願ひ等がわかってくるようになり、貰泣きをしたことも度々でした。被爆者の切実な訴えが少しでもわかつて頂ければ幸いですと存じます。

本編は出来るだけ、美辞麗句をさけ、平易にまとめた

つもりでございますが、何分素人ばかりでの編集でございますので、読みづらい箇所もあるうかと思いますが、多少でも皆様のお役にたてば幸いに存じます。

昭和六十年四月

長崎県被爆者手帳友の会

囑託 木下清人

わが戦いの日々

昭和六十年八月八日発行(非売品)

発行者 長崎県被爆者手帳友の会

会長 深堀 勝一

編集者

木下 清人

印刷所

